
おれに助けを求めるな！

ウサ吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おれに助けを求めるな！

【Nコード】

N8572U

【作者名】

ウサ吉

【あらすじ】

害なす魔の物——魔害物を狩る存在、益なす魔の者——魔益師の最上というべき古から存続する一族、条家十門。

その十門のひとつ、九条家で使用人として働く男、羽織。彼は九条の屋敷に帰宅の途中、死に掛けた少女と出会う。

少女は消え入りそうな声で、羽織に訴えかける。助けて欲しいと、死にたくない。

羽織は一言だけ言った——「知るか」と。

第零話 敗北（前書き）

一話へのつながりのための話なので、零話としました。つながりで、あらすじはこの話ではなく一話基準であり、これはいうなれ前哨戦です。

……まあ、主人公でないし。

第零話 敗北

雨が激しく大地を打ち据え。
戦は激しく世界を揺るがす。

大都会だからこそ生じる、無駄に広い裏路地。
何故か一切人気を感じないそこは現状において——戦場と化していた。

閃光が奔った。
速く鋭く、敵殺す一閃。その高速を、また別の閃光が受けて止める。

金属音。

鏑競り合って静止してみれば、その閃光は余りの速さに視認困難だっただけの刀の二振りであった。

一瞬の停止の間に、三本目の剣閃が割り込む。腕が二本あるのだから、刃が二本でも道理。

それを風のような斬撃で弾いて逸らす。一本の刀で、二本の刃と斬り結ぶ。数の不利を覆すは技巧と速度。

エンジンがかかったように、閃光は加速する。

斬撃と斬撃の応酬。太刀と太刀の激突。銀閃と銀閃の乱舞。

風を斬り、音を裂き、敵を屠る——まさしく死闘。

その斬象空間にて、斬り交えるはひとりとひとつ。

それは少女と化物であり、剣士と魔物——魔益師マエキンと魔害物マガイモノである。戦闘行為の片割れ——少女はどこにでもいそうな、女子高生だった。

美しい黒髪を肩ほどで切りそろえ、髪より深い黒の眼光は鋭く尖っている。その身に纏う学生服から、少女の年齢はある程度は把握できた。

しかし、その年頃には似つかわしくない、刀のような雰囲気醸し、刀のような美を誇り、そして刀を握り戦う少女は、さながら剣姫か。

その剣姫の名は、加瀬かせ 雫しずく。魔益師だ。

対するは醜惡極まる化物。

一見シルエットだけで見れば、人と勘違いできそうなほど体形は人間に近しい。腕が二本あり、足が二本あり、頭がひとつある。

しかしその肌は黒く塗りつぶされ、体軀はまるで子供ほどに小さい。そして頭部が異様と奇異の最大。身体に釣り合わないほどに顔が大きく、よくバランスを保って直立してられるものだと感心してしまう。しかも顔は人間のそれではなく、どうにか類似したものを探せば、それは獅子舞で用いる獅子頭に似ていた。

大きな口をカチカチ鳴らしながら笑う化物は、どこまでも怖気を与える異敵——魔害物だった。

雨に濡れ、血に濡れ、雫と獅子頭の化物は舞を踊る。

幻想的で、現実感の全くない舞踏は華麗で美麗で、しかし命の奪い合いだ。

踊る雫の刀捌きは見事の一言で、華奢な腕には考えられない剣速で獅子頭を狙う。

振るわれた横薙ぎの一閃は視認困難なる高速の太刀。獅子頭はその両手一本ずつ握る小太刀で受けとめ、巨大な頭を突き出すように雫に向ける。

「っ！」

大口を開け、雫を頭から噛み砕かんと瞬間後には開いた倍速で閉じる。

ガチン、と獅子の歯が噛み合うも、雫は間一髪で膝を折り、回避に成功。同時に下段から脚払い。獅子頭の体勢を崩しにかかる。しかし獅子頭は雫の蹴りなどには微動だにせず、今一度口を開く。

かぶりつくような追い討ち。雫は食い千切られるビジョンを連想し、咄嗟にバックステップを踏む。

またも空だけを食い破り、獅子頭は些か不満顔を晒す。

気にする余裕など皆無。雫はもう一度後ろに跳んで、充分に離れたと判ずる。その場で刀を大きく振り被る。無論、刀の間合いに獅子頭はいない。なにをする気か、距離をおいたのは雫自身だということ。

構わず——雫は呼気とともに刀を思い切り振るった。

「ハッ！」

そして。

ブオンと鈍い風切り音とともに、常識では考えられない現象が起こる。

虚空を裂いた一閃。その剣撃は虚空のみならず指向性を前進させ、風が逆巻き衝撃波を放ったのだ！

これには流石の獅子頭も驚き——否、それを理解する知能がなく——反応遅れて直撃してしまう。

「カヒッ!？」

奇妙な呻き声と腹にくっきりついた斬線が、獅子頭の傷の深きを語る。しかし血は流さない。化物に血はないし、涙もない。

「はぁ……はぁ……」

反して雫は傷だらけの体である。汗を流し血を流し、疲労に苦痛に倒れそうだった。

今のところはどうにか戦えているように見えるが——この獅子頭、圧倒的に手に余る。ただの魔益師が相手取るには強大すぎる。

獅子頭は未だ本気をださずにこの様では、敗北は必至だった。

「カタカタカタ」

雫の苦渋に反して、齒を打ち鳴らすような笑い声を上げ、獅子頭の魔害物は歓喜に震える。

害なす魔の物——魔害物は総じて戦闘を好み、血肉を好む闘争本能の塊。故に笑う。雫のような敵手と戦うことが、獅子頭には嬉しくて仕方ないのだ。

獅子頭はぐりん、と腰を折り曲げ、上体を百八十度逸らす。人には為しえない、異様な振り被り方をして——

がばり、と跳ね上がるやいなや雫に襲い掛かる。

「くっ!」

弱り崩れそうな身を鞭打って、雫は獅子頭に立ち向かう。刀を振るう。

そして再開される舞踏。血が彩り火花が飾る、命を削る戦舞。

銀閃は鋭く獅子頭の肉を斬る。されどそんなことは気にせず獅子頭は小太刀を自在に奔らせ、雫の柔肌を裂く。

加速。加速。加速。

常人には視認不可能な速度域で、剣が交錯し敵を捉える。

刀は幾閃もの直線を描いて、鋭角にジグザグ刻む。

小太刀は幾重もの曲線を描いて、波形にゆらゆら断つ。

その両剣はぶつかりあっては弾け、またぶつかり合う。その度にまた激烈な金属音が響く。

斬って、裂いて、振るって、舞わして、踊り踊る。

襲う斬線、弾く剣戟。剣と剣とが刃金に唄う。打ち鳴るは丁々発止の剣響和音。自前で歌う、剣の歌。

歌に合わせて、ひらりひらりと踊る剣舞と獅子舞——ひとりとひとつのそれは、まるで示し合わせたかのような混成舞踊にも見える。

ああ——それはなんと美しい。

見蕩れるほどに。

見惚れるほどに。

雫の決死の舞踏は、気高く美しい。魔害物の狂喜の獅子舞は、異常に美しい

駆動の限界でも振るい、肉体の限界でも捌き、ただ雫は刀に魂を傾け、命をあらん限り輝かせる。

そして。

まるで輝きに魅入られた羽虫のように、獅子頭は喜色満面を表す。

同時に、輝ける少女を押し潰すように、獅子頭は手加減していて

底知れぬ実力を——少し晒す。

それだけで。

「くっ」

拮抗は防戦に塗り変わる。

獅子頭の小太刀二本の速度に、ワンテンポ追いつけない。強靱な臂力に打たれ、刀ごしに腕が痺れる。一度押され始めては、そのまま吞まれてしまう。

雫の身体に、瞬く間に裂傷が刻まれる。優に百は超える刀傷が、雫の身から血を奪い取る。体力を削り取る。

すると必然。

動作の精彩を、著しく欠く。

雫が一太刀斬りこむ内に、獅子頭は二――両手に刃を持つので、真実は倍で四――太刀振るわれる。一速の遅れが、三撃の被害を生む。

斬りかかる。受け止められ、反撃の三閃に返り討ちにされる。裂かれ、斬り裂かれる。

雫はもはや斬るためではなく、命を一瞬でも繋ぐためだけに刀を振るっていた。我武者羅に、遮二無二、生き延びるために戦っていた。

とはいえ、どれだけ雫が必死に決死に戦おうとも、ジリ貧は明白。

このままでは死んでしまうことは目に見え、しかし。

こんなところで死にたくなかった。

こんなところで死にたくなかった。

その一心で、雫は自身の一歩上をいく獅子頭の太刀に喰らいつく。

足掻き、もがく。

「カタカタ」

そんな雫の必死さを、獅子頭が歓喜し齒を鳴らす。

雫の命を振り絞った剣舞を賞賛し、嬉しく思うて笑い出す。

獅子頭の剣速が――また上昇。

「くっ！」

もう、追いつけない。

後は斬られるだけ。裂かれるだけ。死ぬ、だけ。

「カタリ」

雫の一瞬の諦めを、見透かすような酷く無味な笑い音が鳴る。

それはまるで、昂った感情をいきなり冷やされたような、酷くつまらなさそうな笑み。まるで、楽しかった遊戯に、飽きて興味が失せた子供が見せる、渴き切った笑い。

そう。

雫にはもう興味がわくほどの戦意が失われた。本能的に、獅子頭にはそれがわかった。故に。

「カーター」

決着はその時に、ついた。

腕が。

腕が腕が腕が。

腕が！

獅子頭の胸部から、新たなる三本目の腕が生え、雫を急襲する。

無論、雫は獅子頭の両腕の処理に追われている。裂かれ続けている。なす術は、ない。

「がふっ!？」

雫の膨らみはじめた、小ぶりの胸元に叩き込まれた魔物の拳。

衝撃は全身を突き抜け、雫は一瞬だけ絶息し意識を失った。すぐに内側から響くような疼痛が意識を引き戻し、次の瞬間には膝を折って苦痛にのた打ち回る。刀はダメージの深刻さから、すでにその

手から消失していた。

呼吸が上手くできない。視界が歪んでぶれている。喉に違和感――吐き出せば血塊だった。

内臓を損傷したか――自己分析の暇もなく、獅子頭は雫のか細い首を第三の腕で掴む。掴み上げ、雫の足は地から離れてしまう。

そのままシミシ、と人外の膂力で首を絞められ、呼吸が完全に停止させられる。意識が混濁する。混濁し、もうろくに思考すら回らない。

目の前にあるのは、死という名の暗闇だけだ。

苦しい、苦しい。酸素が足りない。足りない苦しい。首が痛い。痛い。死ぬ、死ぬ死ぬ、死んでしまう。このままでは死んで――

その時。

誰かが、その異相空間に足を踏み入れた。

感じたのは雫だけではないようで、全ての行動を取りやめでまで、

干渉してきた方向に獅子頭が向く。
そして。

「？」

何故だろうか。

気のせいだろうか。

死に近く、幻想を錯視しているのだろうか。

——化物が、震えているように見えた。

次の瞬間にはそんな幻想は失せ、魔害物も、その場から溶けるように掻き消えていた。

何だったのか。

雫にはなにもかもがわからない。

いや。

ただひとつわかるとすれば——足音は、確かに近付いていた。

第一話 雨の日の邂逅

雨の日に外にでるものではない。

ため息とともに、男はひとりごちた。

それは猫背でダルげな表情。弛緩しきった頬肉に弛んだ瞳。なんとなく小物っぽい、テキトーを絵に描いたような十代後半の男だった。

服装もテキトー極まりなく、安物のジーパンに無地のTシャツ。その上から袖丈の長い和風羽織りを身につけているのが他とは奇異で、だから印象的だった。

ついでに手にもつ傘も、和風装飾が施され高価であると視覚に訴えるものであり、男に似つかわしくない。逆の手にはコンビニの袋をもっているのだが、こちらは異様に似合っていた。

そんな男。

彼の名は、羽織^{はおり}。

一応、現在暫定的に姓は九条^{くじょう}となっているが、実際のところこのご時世には珍しく姓はない。

別段それで困ったことはないが、姓がないと不便だろうと、現在仕えている女性に言われては、断れるはずもなかった。

ということだ。

男の名は、九条 羽織。

九条家という名家の、単なる使用人だ。

そんな彼は今、ムカついていた。

雨が地面に水溜りをつくり、それを踏んでは足を汚す。歩くだけで、大変ムカつく状況の繰り返し。そうでなくとも足が湿って気持ち

ち悪い。

だから、雨の日に外に出るのは嫌だったのだ。

それも現在の時間は深夜だ。足元が見えなくて足が汚れる汚れる。濡れる濡れる。

だが、仕えている九条家の当主に頼まれたお使いだ。無下にできないはずもなかった。

たとえ唐突にコンビニでお茶を買ってきてという、パシリ的な頼みであっても、だ。

面倒ながらも使いは済ませ、現在は帰宅中である。

「だる」

呟いて、羽織は羽織った上着の袖の袂に左手を突っ込む。コンビニの袋を、突っ込む。羽織の着る服の袂は大きく、ペットボトル一本くらいなら易々入るのだ。

どうせなら右手も突っ込み、似非中国人ごっこをしようかとも考えたが、傘をもっているため断念した。

だから、雨は――

と何度目にかになるため息を吐こうとして。

気付く。

「ん？」

進行方向、近道として毎回利用していた裏道。

その裏道に、何故か結界が張ってあった。コンビニへ行く時は別の近道を使ったので、気付いたのは本当に今だ。

強い結界ではない。簡易で、一般人を弾くためのものだった。

それは魔害物を作る類のもので、戦好きの魔害物が獲物とサシで戦り合いたい時に使う種だと、羽織は一瞬で看破した。

「ふーん？」

羽織は左手を袂から出し、顎におく。些か考える。

おそらく退魔師と魔害物が戦っているのだろうが、ここは近道だ。安全だが、遠回りになってしまいう通常の道とは屋敷に辿り着く時間は数分だが、確実に違う。まあ、他にも近道はあるにはある。が、少々道順が違い、現在においてはこの裏道が一番の近道となっているのだ。

となると。

結論は、ひとつだった。

「めんどい」

言って、羽織は躊躇なく結界に割り込み、その内部へと侵入した。強いものではないので、ちょっとチクチクする抵抗感があったが、容易に割り込めた。すると。

「……んあ？ 逃げた、か。こいつはラッキーだな」

無音で、結界が解けた。

どうやら侵入を感知し、結界を張った魔害物は即座に逃げたようだった。

これで戦場を突っ切るような面倒をしなくてよくなった。

羽織は少し機嫌を良くして道を進んだ。

と。

どれだけか歩んで。

ようよう魔気が強くなってきた辺りで、ひとりの少女が倒れているのを発見した。

身体中ズタボロで、流れ出す血を雨に洗われる、もう生きてはいないだろう少女。

「ふん？　そうか、おれが入った時、ちょうど殺したってわけか」

だから、魔害物はこの場から去ったのだ。戦闘欲求を満たし、闖入者の相手が面倒になったのだろう。

羽織は思いついた自説に頷いた。

そんな気安い機微や、死体を目にしての冷静な思考回路から、羽織にとって血や戦闘は日常なのだとわかる。

だからか、倒れ伏した少女を見やる羽織の目は冷め切っていた。

「ま。弱い嬢ちゃんがわりい」

冷静に言い放って、羽織は気にせず足を動かそうとして、

「……………」

「あん？」

感じた。

それは呼吸音か、心臓の鼓動音か、微かな魔気か。なにを感じたのかわからない。

だがともかく死んだと思っていた少女の、生きている証明を、羽織の鋭い感性は感じ取ったのだった。

少女は、微かに口を動かす。

「……けて」

喉が潰されてしまったのだろう、声とは呼びがたいしわがれた音しか鳴らなかった。

少女は構わず羽織に訴える。

「……たす……けて」

痛いだろうに。辛いだろうに。

それでも少女は助けて欲しいと告げる。

まだ死にたくはないから。まだ、生きていたいから。だから、決死で声を絞る。

「たす……けて……」

「なんだ、生きてたのか」

まさに命を懸けた少女の助命嘆願。

それを受ける羽織は、どこかかったるそうに頭を掻き、そぐわない感想を述べるだけ。

そこからは、感情が動いた様子は一欠けらさえ感じ取れなかった。死に瀕した少女には、それが気付けない。ただ助けを求めることしか、できない。

「たすけ、て……ださい。たす、け」

「……ち」

うるさそうに、舌打ちを一発。そして。

羽織は、その命乞いの一切を無視して通り過ぎた。

「……え？」

「全く……助けてだど？ 知るか、勝手に死ね——おれに助けを求めな！」

振り返って、怒ったように冷徹傲然と言い放つ。そして本当にそのまま通りすぎ、羽織はその姿を消した。

雨と血に濡れた少女は、ひとりその場に取り残される。

——雨は、より一層の激しさを増すばかり。

第二話 再会

明くる日の朝。

羽織は九条 静乃^{しずの}——すなわち、羽織の仕える九条家の現当主に呼び出されていた。

九条家——表の顔は、この日本で古くからある財閥一族、条家十門が一家だ。

財閥、といってもそこそこで、なにも漫画のように凄まじい金持ちというわけではない。

しかしそうではあるが、九条家含め条家十門は全て古くからあるがために、家は広大な日本屋敷である。

そして、困ったことに迷うほど広く複雑な構造をしていて、羽織も最初は難儀したものだ。

慣れきった現在でさえ、使用人の部屋から当主の部屋などは遠く離れており、面倒な構造には変わりない。

「あー、ねむ」

羽織は長い廊下を、欠伸を噛み殺して歩く。何故、同じ屋敷内で到着に五分以上かかるのか、羽織はため息をつきたかった。

不満たらたらで、けれど歩みは確かに前へと進んで。

そうして到着、九条家当主の私室だ。

羽織はスイッチを切り替えたように表情を引き締める。同時に居

住まいを正し、礼儀を重んじた声を出す。彼は主の前でのみ、人格が変わったかのように慇懃な物腰になる生物だった。

「九条様、羽織です。お呼びでしょうか？」

「来ましたか、入りなさい」

恭しく述べた羽織に、答える声はたおやか。

羽織は両手を使いゆっくりとフスマを開く。室内に入るのに一礼をして、それから頭を上げる。

「失礼します」

室内は簡素な和室で、畳が敷き詰められた十畳。当主なのだからもつと広い部屋を使ってもよさそうなものだが、本人がここできいと頑なに主張するのだから仕方ない。

いつもと変わらず物の少ない部屋に、正座して羽織に静かな微笑を浮かべている女性は、九条 静乃。この九条家当主にして、羽織の主のひとりだ。

高級そうな和服に身を包み、艶やかな黒い髪には髪留めにかんざしをさしている。嫌味にならないほどに華美で、穏やかそうな笑みがこの女性の全てを物語っているようだった。

見た目からも雰囲気からも、今や絶滅したとばかり思われていた大和撫子という表現がぴったり似合う——それが九条 静乃という女性だ。

と。

「ん？」

静乃に注意のほとんどを投じていたために、今気付いたが。彼女の座る傍らには、何故か布団が敷かれ、誰かが眠っていた。

誰だと思い、羽織は失礼にならないでいどに顔を覗きこむ。

「なっ!？」

使用人モードな羽織でも思わず、驚きに声が漏れ出てしまう。

その声に、目を閉じ眠っていた人物——少女も気付いたらしく、寝ぼけ眼を開き羽織と視線を交錯させる。最初は不思議そうな顔で、次の瞬間には驚愕一杯の顔で、少女は叫ぶ。

「ん……ああ！ 貴様はっ！」

その少女は——目覚めた少女は、昨夜の雨に濡れた少女だった。

「「なんでてめえ（貴様）がここにいる!!」」

咄嗟に吼えた言葉は、奇しくも両者同じもの。

そして第二声までも——

「「なっ、それはこっちの台詞——って、真似するなっ!」」

完全に言動が一致。ふたりはかなり息が合うのではないだろうか。羽織はこれ以上の合唱を警戒し口を噤み——同時に少女まで黙って、ふたりの波長は徹底的に類似していることが窺える——思考を回す。

どうなってる。何故、ここにこの少女が？

ふたりの態度に、おっとりながら静乃が口をはさむ。

「あら、羽織、加瀬^{かせ}さんとお知り合いだったの？」

「加瀬？ ……ああ、こいつか。」

いえ。知り合いというほどでは……あ」

何故、この少女がここににいるのか。一瞬前の疑問に、羽織はひとつの答えを見出した。

少し頬を引きつらせつつ、羽織は静乃に向き直る。

「あの、九条様？」

「なんです？」

「えっと、今日のお散歩はいかがでしたか？」

そう――静乃には、毎朝欠かさずひとりで散歩に出かける習慣があった。

ぱん、と手のひらを打ち合わせ、まさにそれだと静乃は嬉しそうに語りだす。

「そう、そうなのよ羽織。今日、お散歩していたら、傷ついて倒れている加瀬さんを見つけたのよ」

ああ、やっぱり。

羽織は内心ゲンナリしながらも、主の目には居住まいは崩さない。出来た使用人である。

一応、念のためにわかりきったことを問うておく。

「それで、看病したんですね」

「そうよ。放っておけるはずないもの」

「……ですよねえ」

迂闊だった。

毎朝、九条様が散歩をするのは知っていたはずだ。好奇心の溢れるお方だ、なんとなく魔気を感じる裏路地に行くことだって予測できた。

そして、倒れたこの少女を見つけてしまうことだって、冷静に考えれば予測できたはずだ！

悪いのは、間違いなく羽織自身だった。

九条 静乃という人物の善性はなにも悪くない。困った人がいたら助けたくなるなど当然のこと、静乃は心底からお人よしなのだ。全くもって失敗した。あの時。

あの時――

「あの時、おれが殺しておけば……！」

「最悪か、貴様はっ！」

思わず、加瀬と呼ばれる少女は叫んでいた。意味はわからずとも、その言葉は最悪だと思ったから。

横で静乃は母親のように、羽織をめつと叱る。

「ダメですよ、羽織。そんな言葉を使っては」

「……申し訳ありません」

主に対してのみ、羽織は常時には考えられないほどに素直で、敬虔だった。

よろしい、と静乃は頷き、次にはああそうです、と思い出す。

「それで、ですね羽織」

「つまり私が、この少女の世話役をするんですね？」

容易に見えた言葉の先を、羽織は内心ため息乱舞で先に述べた。

「その通りです」

羽織の内心など全く知らぬ静乃は、我が意を得たりとばかりにに

っこり笑った。

美しい笑みに気圧されつつも、羽織は無駄な抵抗を諦めない。

「何故、私なのですか」

ちなみに、羽織は主に対してのみ一人称すら変わる。切り替えの上手い男なのだ。

羽織の疑問に、静乃は不動の笑みで答える。

「わたくしが羽織を信頼しているからですよ」

「……承知、しました」

菩薩のような完璧な笑みに、異論など通じるはずがなく。いつものように、羽織は頭を垂れる他に道はなかった。

第三話 条家（前書き）

説明回。

第三話 条家

「ではわたくしはもう失礼しますね。

加瀬さん、羽織は頼りになる人です。じゃんじゃん頼ってください。
い。

羽織、頼みましたよ」

最後まで信頼の微笑みを浮かべ、静乃は部屋から退室した。

ていうか、ここはあなたの部屋では……？

加瀬は思ったが、なにかを言えるような立場でもないので口を閉ざした。

そして、平身低頭を絵に描いた様子だった羽織は、静乃が退室した途端に相好を崩した。

「あーもー、だりい。毎度ながら、九条様の善行には困ったもんだぜ」

礼を尽くす相手の不在で、羽織はこうも簡単に墮落する男だった。まあ、逆に言えば主が常に近くにいれば常時出来た使用人となるわけだが。

ぽんぽん、と緩く自分の肩を叩く。気を張っていたので、少々肩が凝った。

はあー、と主の手前、我慢していたため息を全力で吐き、少女に目を遣る。

「ち。しゃーねえ、主の命だ。世話してやるよ、嬢ちゃん」

「私の名前は加瀬 雫だ！嬢ちゃんではない！」

「はいはい、雫な。おれは羽織だ。呼ぶなら羽織様と呼べよ」
「呼ばん！」

威勢よく叫ぶ様子から、昨日の怪我は大分治ったようだと言羽織は判断した。

これはおそらく——いや、間違いなく九条家当主自ら治癒を施したな……。

羽織は乱暴に頭を掻く。

正式な依頼では、九条家当主の治癒など八桁は金を積まねば無理だろう。

それをこの少女——

「運のいいガキだ」

聞こえないようにぼやいて、羽織はさてどうしようを考える。

静乃の治癒を受けたのなら、おそらくもう一晩ほど休めば完全に回復するだろう。

ならば、ガキのお世話も一日の我慢だ。

精神の安定を図る羽織に、雫は険しい表情で口を開く。

「よくもまあ、私の前にその姿を現せたものだな、羽織とやら」

「はっ、好きで現したんじゃないよ。てめえが九条様の視界に入るとかいう、ラッキー現象起こさなければ一生無縁ですんだ」

「そうか。だがな、私は貴様に会いたかったぞ」

「あん？」

「とりあえず、礼を言おう。私は貴様に見捨てられ、逆に絶対に生き延びてやると思えたよ」

言葉と雰囲気は全く噛み合っていなかった。

どこにもお礼を述べるような表情はなく、それどころか殺意まで滲んでいる。

全部理解した上で、羽織は謙遜してみせた。

「いや、そんな礼を言うことじゃないぞ？ 当然のことをしたまでだ」

「皮肉が通じんのか！ 当然のこと？ 最悪か、貴様は！」

雫は激憤を押し殺しつつ、あともうひとつだけ言いたいことを言う。

「もうひとつ会いたかった理由がある」

「へえ、感謝の品か？」

羽織のにやけた態度に、雫はもう我慢の限界だった。言葉は怒りとともに吐き出される。

「必ずこの手で貴様を殴ってやると、そう誓ったのだ！ そのために、絶対に生き残るとも、同時に誓ったわ！

ああ、感謝の品だな！ 私の全力の拳を見舞ってくれる！」

怒り爆発正拳突き。

起き上がりと同時に放たれた、鋭く速い拳の一撃。

「たくっ、まだ一日しか経ってねえのに、積年の恨みみたく言うんじゃないねえよ」

それを、羽織はやれやれと肩を疎めながら、なんとも容易く回避する。

そのまま、雫の伸び切った腕に手を添えて——次の瞬間に雫は浮遊感を感じた。

「え」

「怪我人が暴れんな、ボケ」

気付けば、雫は布団に再び仰向けに倒されていた。なにが起こったかは理解できなかったが、ともかく羽織になにかをされたことだけはわかった。

「なっ、なにをした!」

「うるさい。そんな動いたり叫んだり、傷に響かないのか? てめえ、九条様直々の治療で傷が開いたら、おれが怒るぞ」

雫を全く無視し、羽織は話を挿げ替える。

「うっ」

替わった話内容は雫に効果的だったようで、小さく呻いた。

流石に、自分の怪我の深さを自覚はしていたようだ。それを癒した、九条の技の凄さも。

ぽつり、と雫は言う。

「……ここは、本当にあの九条家なんだな」

「ああ。お前も退魔師ってんなら、なおかつこの町に住んでんなら、条家十門くらい知ってるだろうよ」

「無論だ、この業界で知らずにいられるわけがない」

条家十門。

それは益なす魔の者——魔益師まえきしの中でも、最強とされる一族のこ

とを指す。

そも。

魔には二種類が存在する。

害なす種類——敵対者の核を構成する魔。

益なす種類——生命体の魂を構成する魔。

害なす魔に構成された敵対者のことを魔害物まがいものといい。

益なす魔で構成された魂を活性化し、魂の力を行使できる人間のことを、魔益師と総称する。

魂の力とは、平たく言えば超能力や魔法といった領域の異能だ。

常識を覆す、超常の力である。

魂はひとりひとり構造が違うため、発現する魂の力もひとりひとり全く異なる。魂の構造の差異により生じる個人特有の能力——それは魂魄能力こんぱくのうりよくと呼ばれている。

例えば誰かは、風を制御するような魂の構造をしているかもしれない。

例えば誰かは、剣を精製するような魂の構造をしているかもしれない。

例えば誰かは、拳を強化するような魂の構造をしているかもしれない。

そして。

世に潜み、表側からは秘匿された多数の魔益師の中でも、最上級の名家がある。歴史、能力、実績、血筋、様々な観点から見ても、比類する者なき最強の一族——それが条家十門の裏の顔だ。

一条を頂点とし、二条、三条、四条、五条、六条、七条、八条、九条、十条の十家から構成され、総じて条家という。

十家はそれぞれ特有の魂魄能力を保持し、それは血筋によって受

け継がれている。

——ちなみに、魂魄能力が子に受け継がれるなどという現象は、条家でしか確認されていない特異なことである。それは魂が受け継がれるということの意味しており、常識的——そもそも常識外れの魂魄能力なので、その言い方も妙だが——にはありえない現象だ。その中で。

九条の魂が保有する魂魄能力は“存在の治癒”。

つまり九条家とは魔益師の中でも、治癒師とされる者たちの集団なのである。

「条家十門——“瞬間再生”の九条か。名に偽りなしだな」

己が身を撫でるようにし、雫は完治した傷を思い起こす。

数分の治癒で、痛みすらほとんどなくなっていた。一般の治癒師では考えられないほどの治癒力。そしてそれだけではない。生物のみに飽き足らず、雫の纏う制服まで新調したように破れ、擦り切れ、ボロも治っていた。

まさに“瞬間再生”——理想である。

条家十門にはそれぞれ原初からの理念を持つ。

それは掲げる理想とも、目指すべき極致ともいい、あり得るはずのない人間の夢だ。

例えば、九条の掲げる理想は“瞬間再生”。

『どんな傷でも、どれほどの深手でも、瞬く間に全てを癒して再生させる』

そんな、誰もが求める治癒師最高峰の理想。

羽織は、些か硬い声音で言う。

「それを九条様の前で言うなよ」

「？ 何故だ」

「あの人は、本気でそれを目指していらっしやる。そして、それに至れていない自分をいつまでも責め続けている」

そんな理想、人間に叶うはずがないのに。

雫は少々驚いたように目を見張る。

条家といえば名門だ。その当主が未だ自分の力に満足していないとは。飽くなき向上心、強者の条件のひとつと言えた。たとえ戦闘者ではなくとも、九条 静乃は強者なのかもしれない。

それ以上の言及は避け、羽織はまたさくりと話を切り替える。今度は、素性を探るために詰問の姿勢で。

「お前は、退魔師だな」

「ああ、この町に住むフリーの退魔師だ」

退魔師——魔益師の中でも、特に魔害物を退治することを生業とする者の名称である。

表沙汰にはされていないが、この世界には無数の魔害物どもが犇き、多数の退魔師たちが奔走している。

雫もその内のひとりであり、無論、条家もそうだ。

「で、お前はじゃあ、魔害物に負けて死に掛けてたんだな？」

「……そうだ」

苦々しげに、雫は頷いた。負けた己が情けなく、その身は微かに震えていた。

羽織は震えを見取り、ニヤリと悪の笑みを浮かべた。

「ははあ、大したことねえんだな。全く。ザコが粹がって過信して、そのザマとはな」

「なっ！ 貴様、愚弄するか！」

「事実だろうが。なんだ、認めないのか？　それはそれで小物だなあ」

悪辣に言葉を連ね、羽織は憂さ晴らしをしていた。普通に嫌な奴だ。

「くっ」

根が真面目らしい雫は、上手く言い返せないよう言葉で詰まらせる。

それから、不意に真剣な面持ちになる。

「？」

羽織も口を止め、眉を顰める。いきなりの一変に、怪訝さを感じた。

雫は真剣な面持ちのまま躊躇うように、いや、体験した自身すら信じられないというように。

「武器を――使っていたんだ」

嘘みたいな真実を、告げた。

「……は？　武器？」

「ああ。私が戦った魔害物は、小太刀を自在に操り、通常の魔害物などとは比較にならない強さだった」

「そんな……馬鹿な。武器を扱うほどの知能を持った、魔害物が現れただろ？」

魔害物とは闘争本能の塊。知能なき暴走者。荒れ狂った魔。

一切のコミュニケーションはとれず、知能は獣以下。ただ戦を求めて彷徨うケダモノである。

しかし、奴らは進化する。

戦って戦って、進化する。殺して殺して、進化する。暴れて暴れて、進化する。

進化を経る毎に知力は増し、その姿は人に近付き、中身さえ人を模す。だからこそその、紛い物という名だ。

とはいえ、そこまで進化を果たした個体などそうは存在せず、その前に魔益師たちが潰していることが多い。

それが現代の常識。現代の、魔益師たちの常識。
だというのに。

——武器を扱う魔害物だと？

それは著しい知能の上昇の成果であり、つまり幾重もの進化の結果ということ。

そこまで進化した個体、ここ百年では見られたためしがない。

そんな脅威が、現存するというのか。

この時代に、この世界に、この町に。

「……それが本当なら、条家の上層部にも伝えとかなきゃならん」

深刻さを帯びる口調。世の魔益師全ての驚愕をもたらすであろう事態だ、羽織でさえ、ことの重大さに小さく焦りが見える。

その呟きを理解し、理解しながらも雫は過剰な反応を示す。

「なっ、だが私の請け負った仕事だぞ！ 条家は確かに名門だが、それに頼るつもりはない！」

「知るか。ことはそんなに小さいことじゃねえんだよ」

正論を口走りながらも、実際羽織の内心ではどうでもよかった。武器持ちの魔害物などどうでもよかった。

確かに驚きはしたが、それだけだ。そいつの処遇がどうなろうとも知ったことではない。

しかし、九条家が救った少女が、武器を扱う魔害物の存在を知っていた。このことが問題だ。

そのことが露呈してしまえば、「九条家はそんな魔害物が出現したことを知って何故対処しなかった」と他の条家に九条家が叩かれる恐れがある。条家同士、必ずしも一枚岩というわけではない。

九条家の――いや、九条 静乃の使用人としては、それは避けたかった。

そんな本音を告げるよりも正論を述べた方が、こういう真っ直ぐな少女には効くと羽織は知っていた。

畳み掛ける。

「武器を扱う魔害物だぞ？　どれほど進化したのか、お前、見当がつくか？」

「いや、それは……」

「しかも、強かったんだろ？　そんな奴を野放しにして、なにが条家か」

おれは条家ではないが――それは口の中でしか言わない。雰囲気壊すし。

「お前が死ぬのは勝手だが、他人を巻き込むなよ。魔害物は、お前だけを狙うわけじゃないんだぞ」

「うう」

雫は、結局やり込められる。彼女は、口八丁にとっても弱い少女であった。

羽織はほくそ笑み、雫はうな垂れた。

第四話 ふたり目の主

話は纏まって。

先ほどの話は、羽織が知り合いの九条に言伝を頼んでおいた。羽織自身は一応当主直々に世話役を申し付かっているの、動くわけにはいかなかったのだ。

まあ、言伝した九条の者は血相変えて当主に報告に向かったの、程なくしてその情報は九条家――引いては条家全体に伝わることだろう。

忙しくなりそうさ。

羽織は静かに布団で休む雫を眺めながらぼやいた。

眺めていて数十分、不意と「あれ、世話ってなんかすることあんの？」と今更思いついた。雫は寝てればいいだけなので、世話なんて必要ないんじゃないか？

羽織は退屈と静寂の中で疑問を弄びだす。

そんな静寂を破る、たたたっ、と廊下を小走りする音が響く。歩幅の狭さで、羽織はそれが誰だか把握した。寝付けなかったのか雫は布団から半身だけ起き上がり、ただ首を傾げる。

そうしている内に足音はこの部屋の前で停止、声がフスマ越しに投げかけられる。

「羽織さま、いますよねっ！」

「はい、いますよ。どうぞ入ってください」

元氣一杯の呼びかけに、羽織もにこやかに返す。使用人モードと化していることから、雫は声の相手が九条の上の方の人間だと思っ

た。

了承を得て、声の主はフスマを勢いよく開き、その姿を現す。それは可愛らしい——同姓の雫の目からみても、本当に可愛らしい少女だった。

見たところ年のころは十二、三か。墨を垂らしたような漆黒色の髪は非常に長く、手入れの成果か艶やかだ。黒曜石の瞳は大きく、顔立ちは幼げ。清楚な雰囲気放つが、愛嬌もあり親しみやすそうではある。目をひくのは身にまとう和服。浴衣のような淡い色の着物で、それがとても似合う。

——ちなみに、九条家は基本的には和服を好むが、他の条家では別段そんな傾向はない。

少女は花咲く満面の笑顔で、羽織に向かって駆け出す。

「羽織さまーっ！」

だきつ、と少女は羽織に抱きつく。

羽織は困ったように、けれどしっかり小さな身体を受け止め、苦笑を零す。

「浴衣様、いけませんよ。女の子がそんなに無防備に男に抱きついては。まして私は使用人です」

「ふう。いいじゃないですか、羽織さま」

拗ねた表情で、少女はけれど羽織から離れない。

子猫のように身を預け、力を抜ききった少女の様子から、羽織に全幅の信頼をおいていることがわかる。

羽織も羽織で満更でもないように、優しげに頭を撫でている。

「えへへ」

「……………」

そんなふたりの傍らで、取り残された雫はどうすればいいのかと固まってしまう。

話しかけてもいいのか。というか羽織の態度変わり過ぎ！ と突っ込んでいいのか。雫は悩む。

思案の内に、羽織に抱きつく少女の大きな瞳が、先に雫を捉えた。

「あっ、あなたが母様が言っていた加瀬さんですね」

「母、様？」

それは、まさか。

「はい。わたしは九条 静乃の娘、九条 浴衣と申します」

流石に羽織から離れ——名残惜しげに、だが——浴衣は丁重にお辞儀した。

その内容に、雫は瞠目。

「では、九条家直系ということか」

「そうなりますね」

なんということもなく、浴衣は肯定した。

しかし雫にはなんということもなく、とはいかない。

というか九条 静乃は子持ちだったのか、というのも驚きだったが、そうではなく。

直系。

条家では血筋により力を受け継ぐのだから、その血の濃さで能力の質が変わるのは当然である。

そのため、傍系たちよりも、やはり当主直系のほうが能力は優れており、伝統的に立場も上とされている。

傍系でも他とは一線を画すというのに——まあ、羽織が畏まった時点で予測はできていたが——直系とは、随分偉い立場の人間が登場したものである。

偉い——という言葉は、実質そぐわないのだが、条家ではない魔益師たちにとっては共通意識だった。

魔益師たちの中で、条家とは本当の意味で名家だからだ。喩えるなら、貴族と一般人のような感覚で畏怖されている。

雫も例に漏れず、浴衣に対して緊張してしまう。

だが浴衣のほうは一切気にせず、気さくに話しかける。

「その制服……加瀬さんも、わたしと同じで嶺盟学園れいめいの生徒なんです
すね」

嶺盟学園。ここらの地域では最も大きな高校だ。

雫の着用する制服は、その嶺盟学園のものに相違なかった。

「えっ!？ おっ、同じで？ ということは、九条様も嶺盟の?」

「はい、わたしは一年生です。加瀬さんは何年生ですか?」

二重の意味で雫は驚いた。

九条の直系がまさか普通の高校に通っているという事実にも。

この幼げな容姿で高校生であったという事実にも。

声に驚きが伝わらないように努めて、雫は手短に返答する。

「私は二年だ」

「あっ、じゃあ先輩ですね」

ぎこちなくも、雫は会話を進めていく。

浴衣の人当たりのよさにより、雫も徐々に緊張がほぐれていた。

「それにしても、九条様が同じ学園にいたとは、知らなかったな」

「あの先輩。様なんてつけなくていいですよ？　あと、九条じゃあ母様や他の九条家の人たちと混同しちゃいます、浴衣で構いません。この名前、すっごく気に入っていますし」

「む、そうか？　助かるよ、浴衣。私も様づけで人を呼ぶのは慣れていないんだ」

「ソッコーで呼び捨てってのも、失礼だな」

ぼそり、と羽織が囁いて。

浴衣は花花しい笑顔で首を振る。

「いえ、いいですよ、羽織さま。わたしは呼び捨て嬉しいです。できれば羽織さまも呼び捨てしてほしいくらいです」

「使用人ですから……主にそんな口のききかたはできません」

「ぶう」

口を尖らせて、浴衣は不満を表現する。

それでも、認めたただふたりの主には——羽織は本心から忠を尽くしていた。そのため呼び捨てなどもっての外だ。

知ってか知らずか、よそよそしい態度に浴衣はぶうたれながら言い募る。

「呼んでくださいよー」

「ダメです」

そんなやりとりを続けるふたりに、雫はなんとも形容しがたい表情となる。

少しだけ迷って、でもやっぱりこれは聞いておくべきだと判断し、思い切って言葉をぶつける。

「……なあ、羽織」

「あ？　なんだよ」

浴衣の頭をまるきり自然に撫でながら、羽織は雫に顔を向ける。
立派な成人の顔した羽織が、高校生とは思えぬ童女な浴衣の頭を
撫でている。

雫はその様子にまた言いよどみ、戸惑って、目を閉じる。暗闇の
中で決意を固めて、瞳を開いたと同時に極めて真面目な声音で問う。

「貴様は……ロリコンなのか？」

「ぶっ殺すぞっ！」

即座に羽織はブチ切れた。

あまりにあまりの発言に、冷静でいられるはずがなかった。

だって、と雫は直視できないとばかりに、視線をそらしつつ言葉を
続ける。

「なんか……すごく懷かれてないか？　それに、貴様も満更でもな
い様子だし」

「……そうか？」

羽織はすつとぼけるようなことを言ったが、全く意味をなしてい
なかった。浴衣の懐き具合は、一目瞭然と言えた。

使用人と主の娘、というには仲が良過ぎる。てか、どこの世界に
使用人に抱きつくお嬢様がいようか。

それに答えたのは、何故か浴衣。

「はいっ、わたしは羽織さまのことが大好きですっ」

「……羽織」

この好感度は尋常ではない。まさかもしや、この幼い主の娘に手を出したんじゃないか——雫は睨むように問いたです。

どう答えたものか、羽織は怒りを抑えて平静な対話を試みる。ここで心乱しては肯定するようなもの——羽織は全霊の力で感情に制動をかけていた。

「あー、なんというべきか。まずよ、おれが九条家の使用人になったのは十六年前なんだが——」

「は？ 十六年？ 貴様、年いくつだ？」

外見は、どう見ても二十歳かそれより下。それではこの屋敷に来た時の年齢は子供ではないか。それで、使用人とはどういう——

「細かいことは気にするな。いいから、話を続けるぞ」

「む……むう、仕方ない」

納得はできないが、問うたのは自分なので、話の続行のために雫は頷いた。それに、おそらく羽織にそっちのことを話す気はない。というか言いたくないのだろう。追求しても口の上手い男、はぐらかされるのは目に見えていた。

羽織は、素直な態度にひとつ頷いてから続ける。

「それで、その時の当主、つまり浴衣様の父は、浴衣様が生まれてすぐになくなった。で、親代わりとしておれが育てたというわけだ」

ちなみに名前も羽織と似せて、衣装シリーズで浴衣になったらしい。

いや何故だ、と雫は思わないでもなかったが、まあ親があの親、と無理に納得した。

ふと、雫は浴衣の前言を思い出す。

「そういえば、名前は気に入っていると」
「はいっ、羽織さまと同じですから」

輝く微笑みに、歓喜が満ち満ちており、浴衣は再び羽織に抱きついた。

正直、雫には羽織の説明とこの光景に、違和感を覚えざる得なかったが、もう黙ることにした。賢明な判断といえよう。

羽織はそんな雫の態度に頬を引きつらせ、しかしなにも言えなかった。浴衣の醸す雰囲気の中で、羽織の言葉はあらかた説得力を失っていたのだ。

なので羽織は雰囲気を一掃しようと目論み、話を変える。

「そういえば浴衣様、どうしたんですか？」

「え？」

「いえ、その……わざわざ訪ねていらっしやいましたので、なにか用があるのかと思ひまして」

「ああ、そうです！」

今、思い出したように、浴衣は雫を向く。
視線がきて、雫は思わず居住まいを正す。

「母様が、全条家に総会を要請したそうです」
「なっ、総会ですかっ!？」

羽織が驚きの声をはさむ。

雫には驚きの理由がよくわからない。しかし、浴衣の強い視線で自分も無関係ではないということだけはわかる。
浴衣は続ける。

「はい、総会です。それで加瀬先輩、その総会に加瀬先輩も出席してほしいんです」

「私も？」

「そうです。武器を扱う魔害物について、条家十門の当主に語ってもらうために」

「十門の当主！？ では、総会とは――」

雫の言葉を、羽織が継ぐ。

「総会ってのは、条家十門の当主全員が集まって開く、緊急会議のことだよ」

雫はあまりのことに、失神しそうになった。

第五話 総会

九条 静乃は、羽織からの伝言を聞いてすぐに全条家に総会の要請をした。

急であつたために、当主不在の家も無論あつたが、十家中七家は要請に応じてくれた。

朝に羽織が雫から事情を聞いて、昼過ぎには全ての準備が整う。この手際の早さからも、条家の優秀さが垣間見えた。

条家の総会は、慣例として本家というべき一条家で行われる。

一条家は他九家のちょうど中心に位置し、さほど遠くはないので妥当ではあつた。

さて今回、九条家からは当主として静乃が、補佐として羽織が出席し、そして雫も客人としても一条の敷居を跨いだ。

雫は病み上がりの上、一条の屋敷自体が放つプレッシャーで既に倒れそうだったが、必死に気丈を振舞った。そうしないと、静乃に心配されると思ったのだ。実際、幾度か治癒は必要ないかと問われた。流石にそう軽々と九条家当主の治癒を受けるのは分不相応を感じ、丁重に断ったが。

三人が通されたのは総会のための部屋で、簡素だが威厳に満ち満ちたとても広い和室だった。静乃は無言のうちに、所定の座に着く。その後ろに羽織が腰をおろし、雫も真似て座す。

程なくして——条家十門の内、一条、二条、三条、六条、七条、九条、十条の現当主たちが揃う。

和室に備え付けられた長机を条家当主が囲み、その後ろに数人の補佐たちが控える。ちなみに、補佐たちは基本的に許されない限り発言権はなく、彫刻として座るだけである。

誰も神妙な面持ちで、静かに開会を待つ。

重々しいまでに空気が凝り、刺々しいまでに空気が刺さり、室内には厳粛とした雰囲気だけが張り詰める。

凄まじいまでの居心地の悪さに、雫は冷や汗が止まらなかった。喉はカラカラになり、目はせわしなく動く。もう緊張し過ぎて死にそうだった。

一般人代表的な立場の雫は、少し前までこんなことになるなど夢にも思わなかった。今の気分をたとえると、王宮のパーティに紛れ込んだ小市民である。

いっそ逃げ出そうか、という甘く強い衝動に駆られるも、それはどうにか自制した。

気を紛らわすために、横で規則正しく正座する羽織を見やる。

「……ち、落ち着けよ、うぜえ」

すまし顔で罵る様からは緊張感など皆無。羽織はこの圧迫感の中でも、常態を普通に保っていた。

なんだか、雫は負けた気分である。

そうこうしているうちに、キンと澄み渡った金属音が響き、全員の視線が上座に座る一条に集まる。

一条——条家盟主にして、条家を取り仕切る最強の条。

現一条家当主は、まだ雫と同じくらい年若い少年だった。黒い髪をやや長めに整え、漆黒の瞳は斬り裂き貫く刃が如し、ただ在るだけで底冷えするような剣気を放つ剣士——いや、一条が帯びるそれは日本刀であるから、侍というべきなのかもしれない。

一条は抱くようにして刀を肩に寄せ、ただひとりだけ肩膝立てして座っており、無造作極まりない。それはこの満座で最も高い場所

に立つが故の無造作。敬意を払う側ではなく、払われる側であるがための――条家盟主であるがための所作ともいえる。

一条は当主内で最も若いその外見に、全く似合わない威厳ある声で朗々と宣言する。

「それでは、条家十門の総会を――ここに開く」

そして、総会は開かれた。

「それにしても、武器を扱う魔害物とはな。六条、お前知っておったか？」

さっそく口火を切ったのは二条家当主。彼は豪放磊落を地でいく元気なおじさんだ。

その二条に名指しされた六条家当主は、酷く低い声で答える。

「いえ、初耳です」

唸るような低い声が特徴的な、六条家当主は年齢不詳の謎の多き男だ。いや、そもそも六条という家自体が同じ条家内でもよくわかってはいなかった。

ただ――条家十門で、情報収集を担当しているのは内外にも周知のことで、その六条が知らないというのだから他の当主もどよめきだす。

「それはそれは……六条の情報網も、落ちたものだな」

肩を竦めて、批難を織り交ぜた言葉を放ったのは三条家当主。

三条家当主、色白の肌をした皮肉げな笑みを刻む男だ。慇懃な態度ではあるが、彼の言葉にはどこか棘がある。

六条は別段非難には反応せず、淡々と受け止めた。

「それはすみませんでした、以後気をつけましょう」

「……ふん」

その沈着さが気に入らず——それでは無能の肯定ではないか——
三条は鼻を鳴らした。

三条の態度に、二条が不服そうに口を開く。

「その態度は六条に失礼であろう、三条」

「はは、失礼でしたか。それはすみませんね。至らない部分を指摘するのが失礼だとは……気付きませんでしたよ」

「その言い方では、指摘ではなく人の神経を逆撫でするだけだろうに」

「難しいものだ。オレには区別がつかないな」

「白々しいことを……三条、お前は どうしていつも そうなのだ」

「そう？ それはあなたの気に障るという意味ですか？ だとしたら、あなたがオレを嫌っているからそう聞こえるだけでしょう」

「ちよつと、やめなさいよふたりとも。今回は客人もいるのよ」

いつもの二条と三条の口論に、割って入ったのは条家当主の中でもふたりしかいない女当主のひとり、七条だ。

強気な女性で、女だからと下に見られるのを嫌う傾向にある。

それを知っていながらも、いや知っているからこそ、三条は言った。

「女性は黙っていてくださいませんか？」

「なっ！ 三条、女だからと侮るな！ その身を永久に閉ざしてくれようかつ！」

「ふ……あなたにそんなことができるのですか？ 七条のあなたが、

三条のこのオレに」

三条は口元を隠してせせら笑う。

一条が盟主であるが故に、条家では数字の小さい方が強く上にあると——そういう古きに捨て去った慣例を、三条は時々持ち出す。

三条は変にそういった、強さに拘る傾向があるのだ。そういうところが二条の気に障り、七条の怒りを買うということを、さて本人は理解しているのか。

三条の言に、七条は怯まずそういうならと、非難を隠さず言い返す。

「あら、数字に拘るのなら、二条殿への非礼はよいのかしら？」

「非礼？ 二条の感情を、何故あなたが語るのですか？」

二条、オレの言葉は、あなたの気分を害するほどの非礼を感じましたか？ いつもの他愛無い雑談と、オレは思っていましたか？」

二条の人のよさを熟知しての三条の発言。

困惑しながらも、二条は愚直なまでに思った通りを告げる。

「いや……まあ、いつものことだからな。そこまで気分を害したわけでもないが……」

「全く、七条、あまり思い込みで話さないでいただきたい」

「三条、貴様っ！」

二条と三条と、そして七条まで混じった見るにたえない争論に。ため息を吐く男がひとり。

一条はゆっくりと刀へと手を伸ばし、左手は鞘を、右手は柄を握る。

鯉口を切り——収める。

——キン、と刀の鏢と鯉口が打ち鳴らしあう清廉な音が、紛糾の室内に響き渡った。

続けて、一条は静謐な口調のまま告げる。

「静まれ」

ぞつ。

今まで口を回していた者も、そうでなかった者も、等しく全員が悪寒を感じて静まり返る。強烈な剣気を浴びせられ、錚々たる面々である条家十門の当主が、例外なく押し黙る。

恐るべきはその若さでの到達度。強さだけでなく、覇気すら纏う戦士としての完成度。隔絶した実力者集団である条家当主の中でも、さらに上に立つ——条家盟主、一条の名は決して伊達ではない。

二条は口を嚙み、腕を組んで静観に回る。三条も、もう一度だけ鼻を鳴らして口を閉ざし、七条も不承ながら黙らざるをえなかった。

三者三様の態度を見納めてから、一条は十条に目で指示した。十条は無言で頷く。

十条家は、一条家を世話する役割も負っているのだ。そのため、一条とは関係が深い。アイコンタクトさえ可能なほどに。

十条は——現行の十条家当主は御年六十四歳にして現役の、条家最年長当主だ——静乃に向かって言う。

「九条、あなたのところの客人が、情報を持っているという話でしたな」

「ええ、その通りです」

静乃は穏やかな笑みで答えた。先ほどの争論も、一条の剣気も、まるで気にした様子もなく平然と笑んでいた。

好々爺の十条も、老人特有のやんわりした笑みで言葉を連ねる。

「客人に、直接話してはもらえんかね？」

「そうですね。……加瀬さん、頼めるでしょうか」

「……はい」

緊張しきった顔色で、いままで推移を見守っていた雫は立ち上がった。

途端に全員からの視線を感じるが、雫は深呼吸をして心を落ち着けようと努力した。

あまり効果はなく、握った手のひらには汗が滲む。

横の羽織があまりの緊張度合いに笑いを堪えているのが見えて、雫は後でぶん殴ろうと決意した。

雫は胸に手をあて、目を瞑る。

落ち着けと呪文のように胸中で呟く。大丈夫だと暗示のように胸中で囁く。

完全には拭えないが、大分マシにはなった。

雫は、目を開き語り始める。

「――私は昨晚、武器を扱う魔害物と交戦しました」

雫の一言で、一同はざわめきたつ。

とはいえ緊張しっぱなしの雫は周りの様子に気付かず、話を進めるのみ。

「私はその魔害物に敗北しました。とどめをさされることはなかったのですが、動くことはできず死を待っただけだったところを、九条様に助けていただきました」

「ふむ、加瀬殿といいましたな」

十条が合いの手を入れる。

「その魔害物の形状、戦闘法など可能な限りお教えいただきたい」
「わかりました」

頷いてから、雫は記憶を辿り思い起こしながら口を回す。

「外見は、黒いペンキを塗りたくったような肌をした人間に、獅子頭を被せたような異形でした。獅子舞とかでよく被る、あの赤い獅子頭です。」

戦闘法は、両手に持った小太刀を達人並の腕で振るい、時にその獅子頭で噛み砕こうとします。あ、あと一度だけ、胸からもう一本の腕を生やして襲ってきました。腕を生やすのは、何度までできるのかはわかりません。ただ、おそらくその腕は伸縮自在と思われるます」

「なかなかの観察眼、お見事です。そして情報提供、ありがとうございます」
「あつ、ありがとうございます」

にっこりと十条に言われて、雫はそそくさと座りなおした。

もう心臓がバクバクうるさくてかなわない。雫は戦闘後のような疲労感に、思わず正座を崩した。

だが、雫への視線は話が終わった瞬間に離れていたのも、誰にも咎められることはなかった。それよりも、すぐに内容の論議がおこなわれる。

「達人並とは……厄介だな」

「十条よ、確かお前たちも小太刀を武具とするはずだったな。敵とするとどうだ」

「そうですね、魔害物の臂力や速度を考えると、おそらく途轍もなく速い。それに両手に持つというなら、変幻自在の太刀となるでし

ような」

「速い、か。速さ比べなら四条か？」

「二条では攻撃があたらないものな」

「馬鹿にするな、二条はそれほど弱くはない」

「ふふ、そう言う三条は敵が強すぎでは無意味じゃないのかしら？」

「ふ……どれほど強いと嘯こうが、我ら三条の前には弱いも同じだ」

「なんだ、三条がいくのか？」

「構いませんが、確実性を考えるなら七条に隔離させ、五条で射殺せばいいだろう」

「ふむ……それなら確かに――」

不意に。

唐突に。

言葉を交わす当主たちに委細の遠慮もなく。

ダンッ！

と音をたて。

会話を黙って聞いていた雫が、耐え切れなくなったとばかりに荒々しく立ち上がった。

その目には、仄かな怒りが見え隠れしている。

再び視線を集めると承知しながら、雫は懇願のように叫ぶ。

「待ってください！」

その声に物議は止まり、全員の意識は完全に雫へと集中する。

不思議そうな顔。煩わしげな顔。困惑ばかりの顔。不機嫌な顔。

無表情な顔。様々な面持ちと感情で、立ち上がった雫をねめつける。

雫は怖気づくも、けれど気圧されずに自分の意志を告げる。

「この魔害物の討伐は、私が退魔師として請け負った仕事です！
たとえば条家といえど、私の仕事を奪うのは許せません！」

凜とした態度で言い終えた雫の内心は、実はかなりパニック状態だった。

いつ、言ってしまったー！ 条家十門当主の目の前で許せないとか言ってしまったー！

実際、退魔師としてもう活動ができなくなる可能性すらある、神をも恐れぬ所業である。

雫は外面では怒りの表情を見せ、内面では泣きたくて堪らなかった。

「ほう、見上げた仕事意識ですね。しかし、あなたのような市井の退魔師に、倒せるとは思えませんのでね。実際、負けたのでしょうか？」

真っ先に三条が雫をたしなめる。

既にお前の存在意義はないのだから黙っている、と言葉に排泄の意思を乗せて。

七条もそこには同意のようで、嫌そうながらも賛意を示す。

「そうね。条家には任せて、あなたはもう帰りなさいな」

「ま、威勢のよさは認めるが、条家に情報が入っちゃった以上、なにもしないわけにはいかんしな」

二条までも言って、雫は俯いてしまう。

確かに彼らの言う通りなのだ。

雫は単なる一退魔師。条家という強大な組織から見れば、弱小もいいところだろう。そんな小娘に、任せられる案件ではない。それにメンツというものもあることだし。

仕方のないこと——納得いかずとも、雫は引き下がるしかなかった。

のだが。

「いや……そう言うのなら構わない」

「え？」

雫は驚いてしまう。

なにせ、構わないと言ったのは——条家盟主、一条その人だったのだから。

次々に他の条たちが慌てて反論を述べる。

「いつ、一条様、なにを仰るのですか！」

「そうです、あんな子供ひとりに任せられるとでも？」

「さあな」

一条は肩を竦めた。それから雫を見定め、その瞳の意志を汲み取り、言葉を続ける。

「だが、彼女の言い分も確か。一度決めたことは、最後まで貫くべきだ。一度くらい、彼女に任せてみてもいいだろう」

「しかし、それでは条家としての……」

「ただし！」

反論した七条、それと雫がびくり、と竦みあがってしまうような一喝。

一条は雫をしっかりと見据えたまま条件があると言う。それは——

「我ら条家の協力を受け入れてはくれないか？」

「え？」

「これはあなたの仕事。だが、あなたを助けたのは九条だ。その九条が手助けをしたいと申し出たのだ、その協力を認めてくれないか

？
」

「えっ、え？」

意味がわからず、雫はずっと黙りこんでいた静乃を見る。

静乃は、穏やかな微笑で雫の視線に応えるだけ。しかしその笑顔から、全てを悟った気がした。

おそらく、静乃はこうなることを最初から望んでいた。

屋敷で武器を扱う魔害物の話を聞いた段階で、なんとか雫の力になりたかった彼女は、けれど雫なら協力を拒むとなんとなく察した。だから、一条に頼み、この状況が出来上がることを目論んだ。条家のメンツも、雫のメンツも保たれる、そんな状況を。

まあ、本来は静乃自身が進言するつもりで、雫の行動は予想外であつたろうが。

雫はそこまで読み取って、それでも躊躇いを見せる。

「しっ、しかし！」

「――頼む」

「っ！」

条家盟主から、直接公の場での頼み事――単なる退魔師に、断れるはずがなかった。

逡巡の末に雫はゆっくりと、本当にゆっくりと頷いた。

「――わかり、ました。私に、力をお貸しください」

「よろしい。では――これにて総会を閉じる」

有無を言わせぬ圧力で他の当主を黙らせ、一条は強制的に総会を終わらせたのだった。

第六話 一条

「いやあ、それにしても一条様とは素晴らしいお方だな。人の上に立つ者はかくありたいものだ」

九条の屋敷へ戻る道すがら、雫はそんなことを言い出した。

羽織は唐突な物言いに、頭にクエツションマークを浮かべる。

「あ？」

「貴様も見えていただろう。私とさして変わらぬ年齢だというのに、条家という大組織をしっかりと纏め上げ、なおかつ私などの言葉をキチンと受け止めてくれた。なんとも度量の広いお方だ。それに一条家当主ということは、条家で最も強いのだろうか？ 一条様とは凄すぎるな」

どうも先ほどの総会での一条の姿が、未だ色濃く残っているらしい。興奮気味だ。

様づけで人を呼ぶのは慣れていないと言っていたはずの雫が、自然に様づけで呼んでいる――それほどまでに鮮烈だったのだろう。

羽織は目をまん丸にし、すぐに吹き出した。

「ふ、く……はは」

「？ なにがおかしい。いきなり笑い出して気持ち悪い」

突然笑い出す羽織に、雫は怪訝そうに眉をしかめる。

答える気がないのか、羽織は曖昧にまた笑う。

「いや……一条さまは素晴らしいよなー、って思ってたなあ。あと気持ち悪いとか言うな」

「嘘くさい。というか、貴様の言動は全部嘘くさい」

「全部かよ！　けっ、別にてめえに信じてもらいたくなんざねえよ！」

「わかったよ、全部は言い過ぎた。九分九厘だ」

「ほぼ全部！」

立場逆転して羽織がキレよく突っ込む。

すると雫はなにか宇宙の真理にでも気付いたかのような表情をして、ぴんと人差し指で天を指す。

「待てよ……貴様という存在そのものが嘘なのではないか？」

「意味がわからん上に、とりあえずおれをけなす方向にもってくな！」

「ならば本音を言え、なにを笑っている」

雫はパツと話を戻して、詰問口調で問う。

その切り替えの早さは羽織に似通っているが——発言者は気付きもせず、本人に至っては鼻で笑う。

「はっ、聞きたきや土下座して三回回ってニャーと言いながらもう一回土下座しながら三回回れ」

「するか！　しかも土下座しながら三回回るって、どうやって同時にやるんだ！」

「気合と根性と情熱的ななにか？」

「ならばまず見本を見せてみる、土下座しながら三回回って見せろ」

「あー……ごめん、気合と根性と情熱は品切れ中だな。またのご来

店をお待ちしてまーす」

「いつ入荷するんだー!」

「しねえよ、高いもん」

そんな感じの会話で、雫が誤魔化されたことに気付いたのは、次の日の朝だったとか。

その会話と時を同じくして、総会部屋には一条と十条のふたりだけが未だ残っていた。

他の全ての気配が遠退いたことを確認すると、一条は疲労をこそぞぎ落とすように深いため息をついた。

そして、先ほどの公の場では考えられないほどに、へなへなと全身の力を抜く。眼光からも鋭さを取り去り、やわらかく穏やかな瞳となる。

完全に変わった態度と声音と口調で、一条は十条に親しげに話しかける。

「あー、疲れたー、緊張したー。なあ、十条、僕は上手く一条家当主でいられたかな?」

「ほっほ、見事でしたよ、一条様。今回の総会は文句ありません」

十条の評価に、一条は心底安堵を浮かべる。

「よかったあ。二条と三条はまた口喧嘩するし、七条は煽るし、止める時、僕はもう心臓が握りつぶされる思いだったよ」

毅然とした先ほどの態度が嘘だったかのような弱音。見る者が見れば己が正気を疑うような激変である。

ふやけた気弱な普通の少年——こちらこそが、一条の本当の姿だった。

しかし、一条家は条家の盟主。

このように弱い姿を晒すわけにはいかず、一条は演技という皮で自己を覆っていた。強い自分、立派な一条家当主を、誰にもバレることなく演じていたのだ。

他者の目がある時全てが演技——驚異の自制心といえよう。

「あ、そうだ。加瀬さんへの判断も、あれでよかったのかな？」

「加瀬殿への判断も、多少は他の当主たちからの非難もありましようが、九条の意向には添っていたでしょう。上手くまとめましたな、一条様」

唯一——いや、羽織にバレたので唯二——一条の本当を知る十条は、よく一条を孫のように褒める。それは幼少の頃より世話役をしてきたがための、本当に孫のように思うからこそでる温かみの溢れる言霊。

一条は、それがいつも照れくさい。けれどいやでは決してなく、誤魔化すように苦笑する。

「あはは、ありがとう、十条。

全く、いきなり九条が頼みがありますなんて言ってきた時は驚いたよ。それも今朝会ったばかりの少女を助けたい、だなんて」

「加瀬殿の意志の強さが気に入ったのかもしれない……いや、九条は誰にでもああいう態度でしたか」

「まあ、人助けは大事だね。

……うーん、それにしても加瀬さんか。凄かったねえ、彼女。条

家十門の前で、あれだけ言っただけのけたのは、彼女がはじめてじゃないかな？」

「ふむ、わしの記憶の中でも、あそこまで言い切った者はいませんな」

「やっぱり凄いなあ。僕、少し懂れちゃうな」

羨望のように、一条は息を吐いた。

演技で自分を偽って、一条家当主を演じているだけの――自分のことを信じてやれない一条は、意志の強さを持つ雫のような人物に惹かれてやまないのだ。

意志の強さとは、すなわち自分への信頼だ。自身に疑いをもたないがために、意志を貫ける。

それが一条にはない。ないからこそ、自分を偽る。ないからこそ、雫が羨ましい。

ないからこそ、自分を信じる勇気を――一条はなにより欲していた。

一条には、名前がない。

正確に言えば、名を捨てたのだ。

また一条家には現在、当主である彼を除いて、他にその姓を背負う者は存在しない。

何故か。何故か。

七年前、一条家は何者かの手により――滅ぼされたのだ。

当時の当主は殺され、その妻も殺され、直系のひとりも殺され、数人いた傍系の者も殺され、使用人に至るまで殺された。

まるで一条の血を断とうとしたように、その時一条の屋敷にいた者全てが殺し尽された。

一体誰がそんなことをしでかしたのか。魔害物だったのか人だったのか。個人だったのか集団だったのか。理由はなにか。そもそもどうやって最強たる一条を倒したのか。

なにもかもが、現状にあってもわかっていない。条家の情報収集を司る六条でさえ、少しも情報を掴めていない。

その殺戮から唯一生き残ったのが、もうひとりの直系である一条だった。偶然にも、一条は十条家に遊びにいらったのだ。

そして条家の構造は、その事件で少々の変容を余儀なくされた。

例えば一番顕著なのが、十条だ。十条家は全員で一条家に移り住み、一条の世話と護衛をする役目を負った。

他にも、防衛のため戦えない条家には戦闘特化の条家の者が居候し、護衛の役割を振られている。

このように、様々な意味で条家の長年の歴史に傷をつけた七年前の事件は、未だに調査が続けられている。

名もなき一条の心にも、深い傷を残したままだ。

一条はその事件を境に名を捨て、一条であること以外の全ても捨てた。個を捨て一条という家名を背負ったのだ。

当時、彼は十二歳である。

その年にして、一条は覚悟を決めた。

一条家当主を、受け継いだ。

慣れないことばかりだったが、それを努力で補った。もともと気弱な性格だったが、それを演技で覆い隠した。戦闘力はまだまだ足りなかったが、それを鍛錬で強化し続けた。

誰よりも、一条の当主であらんと自己を律した。
しかし。

一条はその血の滲むような努力に反して、自虐的なほどに謙虚だ。普通は努力をすれば自信が伴って身につくものだが、一条は己を卑下する。それは、彼が目指す“一条家当主”という理想に届かない

からだ。少なくとも、彼自身が届いていないと思っているからだ。他の一条が死に絶え、自分だけとなった一条には比べる対象も、目指す対象もない。そのために“一条家当主”という幻想は、補正の掛かった幼き日の記憶——果て無き極致点と認識してしまっているのだ。

他の者たちからどれだけ褒め称えられようと、一条は満足しない。まだまだ足りないと思う。こんな程度ではだめだと思う。自分は弱いと思う。

自分のことを、どうしても信じてやれない。

一条は、だから絶え間なく研鑽を続ける。精進し続ける。自分を信じたいがために、一条は強くあろうとし続ける。

それこそが彼の強さであり弱さ。そして、それが故に彼の成長は止まらない、終わらない。

そんな彼にこそ、一条家の掲げる理想、目指すべき極致である——“無限斬撃”はよくよく似合う。

『一撃、二撃、三撃四撃——一撃一撃、重ね続ける斬撃。それはやがて無限へと至る。無限とは即ち、最強なり』

そんな、無茶苦茶な理想が誰より似合う。

自己を信じ切れず、無限の修練を続ける少年は、

「ん、そろそろ修行でもしようかな」

いつものように、気軽にそう呟いた。

第七話 助っ人

総会の決定で、加瀬 雫という個人に九条家は全面的に協力することとなった。

雫は何度もお礼を述べたが、静乃は変わらない笑みで礼を言うようなことじゃないと言った。
そして。

「なんつつつで、おれがこんなガキの面倒みなきやなんねーんだよ！」

唯一、不満たらたら羽織はいつまでも駄々をこねるように叫んでいた。

羽織は雫に協力して、魔害物討伐に向かうことが決定したのだ。
発案者は誰と言われれば……ひとりしかいない。

「羽織ならできるでしょう？　がんばってくださいね」

最強の笑顔で、主はそう言ったものだった。羽織は、もうなにも抵抗ができなくなる。

それでもせめてもの反抗とばかりに、文句叫びまくりの羽織。を
さておいて、静乃はまずは雫に謝罪した。

「申し訳ありません。わたくしたちの領分は治癒でして、九条の名
を持ち戦える者は随分と少なく、いま戦力面で協力できそうなのは、

羽織くらいなのです」

「なっ、謝る必要なんてありませんよっ。充分感謝しています、私は！」

「そうですか？ でも、協力させてと言っておいて、羽織しか戦力になれないのは心苦しいわ。

はあ、せめて一刀と八坂やさかが任務から帰っていれば……」

「いえ、本当に！ 羽織だけでもすごく助かりますからっ！」

実際、羽織のことなど一切信用も期待もしちゃいないが、静乃に悲しい表情をされるほうが雫には困るのだった。

必死な取り繕いの成果か、静乃は曇っていた顔を少しだけ戻し、そうね、と頷く。

「羽織はやればできる子ですから、きっと大丈夫ですね」

「はいっ！」

このまま乗り切る、雫は高速で首肯していた。
しかし。

そうになると、雫と羽織のたったふたりであの魔害物と戦うことになる。正直な話、雫は勝てる気がしなかった。羽織を戦力と数えていいのかも怪しいし、仮に戦ってくれたとして、強いとはあまり思えなかったのだ。だからと言ってこれ以上の協力を求めるのも心苦しい、雫の心中は複雑である。

「ああ、そうです」

ぱん、と。

思索の迷宮から雫を引きずりだすような清廉なかしわ手が響く。
唐突に静乃がふわりと笑って手を打ち鳴らしたようだった。その仕草表情は、なにやら青空のように晴れている。

「思い出しました。ひとり、戦力になれる方がいました」

「え？」

「誰か、二条 条さんじょうを呼んできてくれるかしら？」

はっ、と傍に控えた羽織とは別の使用人が静乃の命を受け、早足でどこぞへと去っていった。というか使用人が複数、なんの違和感もなく屋敷にはいた。どうでもいいポイントの時々において、平凡雫から見れば、条家は金持ちだと感心させられるのであった。

思考がそれた。

まあともかく、雫にはよくわからないが戦力がプラスされるようだ。

嬉しいような、心苦しさが増したような、相反する感情ばかり浮かぶ雫であった。

しかし——二条？

疑問を口に出すより先に、羽織が血相変えて止めに入る。

「いけません、九条様！ 条はこの屋敷の護衛役。奴がいなくてこそこの屋敷が狙われてはあなたがっ！」

「いいですよ。屋敷が狙われたためしなどありませんし、長くもならないでしょう。そもそも、これはわたくしの不手際なのですから」

「しかしっ！」

主のことという応用的になると必死になる、基本的には最悪な羽織だった。

だが、一度決めたことを曲げないとばかりに、静乃は断固として首を横に振る。

「もう決めました。条さんの手をお借りします」

「……………」

なにやら決断したような静乃と口を閉ざす羽織。

であったが、横でひとり話についていけない雫は疑問符を溢れさせていた。交わされている言葉の意味が見えてこない。何故、二条がでてきて。何故、手を借りることが困るのだろうか。

このままの調子で話が進行されると雫だけ取り残されることが予想される。なので解説を要求するように羽織に視線を定めて問う。

「おい、羽織、どういうことだ？　なにを言っている？」

「……条家ってのはな、別に十門全部が戦闘特化ってわけじゃねえんだ。たとえば、この九条家はさきほど九条様の言った通り治癒を生業としている、戦闘力なんてねえ。まあ、一部例外はいるが、それは今はどうでもいい。

で、そうなってくると、この九条家は敵に襲われればひとたまりもないわけだ。だから、戦闘特化の他の条家の者が、非戦闘的な条家の屋敷に居候する、ってことに七年前になったんだよ。

そして、現在この九条家に護衛として居候している者はひとり――二条家直系、二条　条だ」

羽織の解説が終わった。そんなちょうどいいタイミングで、フスマの向こうから声がかかる。

「お呼びでしょうか、九条様」

「ああ、条さんね。入ってください、頼みごとがあるのです」
「それでは失礼します」

ガラリ、とフスマを開け、部屋に入ってきたのは――なんとなく強そうな男だった。

すらりとした長身の青年。年のころは雫よりも少々、上だろうか。

髪は短く純黒で、洒落っ気はあまりない。しかし戦闘者特有の硬質な雰囲気、彼の精悍な顔立ちを際立たせ、そんなものは不要だとも思う。

彼こそが、この九条家に居候する護衛役、二条家直系——二条条、その人だった。

条は頭を下げ入室し、すぐに話を始める。

「頼みごと、とはなんでしょうか、九条様」

「それがですね、こちらの加瀬さんの手伝いをしてほしいんです」

微笑んだまま静乃が雫を手のひらで示す。条は雫を観察するように僅かに眺めると、ああと思いついたらしい。

「手伝い——彼女が武器持ちの魔害物と戦ったという退魔師ですか」「そうです。それで、彼女はその魔害物の討伐をなさるので、その手伝いを、わたくしはしたいのです。ですが、わたくしは戦うことなどできません。ですからわたくしの代わりに、条さんをお願いしたいのです」

神妙に、静乃は自分の我が侘に頭を下げた。

これが押し付けの優しさだと、静乃は理解していた。別に雫が頼んできたわけでもないし、この頼みは条を危険に晒すということにもなる。

ともすれば兩人に迷惑な頼みごとということだ。それをわかっていても、静乃は自分勝手を貫きたかった。きっとそうしないと、雫が無事では済まないだろうと直感するがため。

傲慢なまでの好意。強引なまでの善意。そういったものを、勝手に気ままに振り回す女——それが九条 静乃の浮かべる自己像である。

「お願いします」

ただひとことには万感の思いが、下げた頭には計り知れない重みが。

きつとあった。

それを受け止めるように、条はひとつ頷いて

「いいですよ」

「って、おい！」

軽く了承しやがった。軽すぎる条の態度に、羽織が不満を叫び散らす。

「九条様の嘆願に対してその軽さはなんか赦せねえ！」

って、じゃなくてお前は仮にも九条家の護衛だろうが！　つまりはこの家から離れるのは不味いってことだろうが！　なに普通に了承してんだよ、ふざけんな！」

「九条様がそう仰るのだ、俺に是非はない」

「嘘だろテメエ！　単に暇だからだろ！」

「……そんなこと、ないぞ？」

ついで、と条は目をそらす。

第三者の雫からでも思った。

誤魔化すの下手すぎ！

というか、暇だからという理由で戦闘に赴くというのか。一体、どんな思考回路しているのだ。雫は外野ながら呆れてしまう。と。

「まあ！　手伝ってくれるのですね、条さん」

ワンテンポどころか、スリーテンポほど遅れて静乃が嬉しそうに

そう言った。

おっとりとしている上に、羽織の反論は丸ごと気にしていなかった。

眩い笑みに、一瞬口ごもるも、羽織は必死になって声を大にする。

「……っ。いえ！　ほんと！　マジで！　せめて一刀や八坂がいるのならばマシですが、今この屋敷での戦力は条だけです。外出はダメでしょう！」

条の適当さと静乃の独特のペースに、もはや敬語すら崩れ、それでもとかく静乃を抑えようと健気なまでに叫ぶ。

彼は確かに使用人であった。

とはいえ主は使用人の話を聞いてくれるタイプではなかった。全く持って、羽織の発言は素通りされる。

「勿論、条さんが断れば無理強いする気はありませんでしたけど……」

「俺はやつてもいいですよー」

「と、条さんが仰るなら、お言葉に甘えてもよいかな、と」

「いえ、それでもダメでしょう！」

いや違う。

悪いのは適当過ぎる二条　条に他ならなかった。

二条　条は外見とは正反対に、毎回毎回ことあるごとに適当な言動と態度で場を引っ掻き回す厄介な男なのだ。

その厄介さが、静乃のお人よしに加減と化学反応をおこすことで、羽織としては大惨事である。

条は言う。

「護衛といっても、襲ってくるような輩は俺が護衛を始めてから一

度ありません。そのせいで、ずっと暇だったんですよ、俺」

「言った！　今、暇って自分で認めた！　ほら！　九条様、暇つぶしで戦うとか、それはダメでしょう！　不謹慎という言葉がこの世にはあってですね！」

「あら？　条さん、暇だなんて仰りましたか？」

「いえ全く」

「うがあああああああああああああああああああああああああああああああああ！」

悲しき慟哭が屋敷に響き渡る。

雫でさえ、その慟哭には同情が芽生えるほどの悲痛さ——というか不憫さであった。

羽織は完全に相手にされていなかった。

話し合いとは、互いが互いの伝えたいことを伝え、それを理解しようとするための行為だ。一切の理解が示されないのなら話し合いなど意味がない。

だからこれは話し合いなどではなく、どちらかが妥協するまで続く根気の比べ合いである。

ともかく自分の意見を述べ、他の意見には耳を塞ぐ。そうすることで相手が諦めるのを待続ける。そういう低次元な行為である。そうなってくると妥協が成立するまでは、この不毛な会話は終わらないわけで、ならば妥協をすべきは……自分だろう。

羽織はもうため息を吐き出すようにして、諦観の極致といった風情で首肯する。

「……わかった……わかりましたよ……わかりましたと言えばいいんでしょうが！　満足ですか、九条様！？」

「ええ、ありがとうございます」

パアと静乃の表情が輝き、それが素直な感情表記だとわかる。

ここでそのような煌いた笑顔——ああもうこの人には絶対に勝てないと、羽織は毎度のごとく感じた。

けれども勝てずとも、羽織は負け方をどうにかマシにはしておく。

「しかし、あまり屋敷から長い間、条を離れさせるわけにもいきません。条が手伝うのは、短時間だけとします。いいですね？」

「わかりました、お願いしますね」

「条も、それでいいな」

「……まあ、いいけどよ」

とりあえず最悪の展開だけは回避して、羽織は重くため息を吐いた。

第八話 準備（前書き）

今更ですが、“羽織”が名前で、“羽織り”が彼の身に着けている和服の上着です。わかりづらいかもしれませんが、一応はそういう区別をしています。

第八話 準備

「ま、そんなわけで二条 条だ。よろしくたのむわ」
「……敬語はやめるんだな」

静乃が退室した途端に恭しさの崩壊した条の態度に、雫はジト目で突っ込みをいれた。いや、まあ途中から徐々に素の部分は見えていたが、それでも豹変されると対応に困るのだ。外見と中身も全然噛み合っていないし。

どうにも条は他人を誤解させるのがよほどに上手らしい。それが長所なのかは知らないが。

硬派っぽい外見に反したユルイ声、適当な性格、大雑把な思考、こちらが二条 条の素の姿らしい。

全く怯む様子もなく、条は手をパタパタと振る。

「いや、違う違う。なんだか九条様の前だと礼儀正しくしないとけない気がしてな。他の人の前では敬語なんざほとんど使わんで。だからさっきまでが例外」

「わかるわかる！」

既に態度の違いが二重人格といって差し支えないほどの豹変ぶりな羽織が何度も頷いて同意するも、雫の視線は極寒ほどに冷めていた。

視線に気づき、羽織はわざとらしく肩を竦める。

「九条様は、いい人過ぎる。ありえないほど、善性に偏り過ぎてる。人間から逸脱しているんじゃないかと疑うほどにな。そんな人物の

前じゃあ、悪性は引っ込んでしまふのさ。自然と、畏まっちゃう」

「確かに、九条様は出会って間もない私でもいい人過ぎると思うが、その言い方は……」

「じゃあ、お前だったら見ず知らずの死に掛けた奴を助けるか？」

それで、そいつが大変そうだからって協力するか？　そのために色々手を回すか？

おれだったら絶対しねえよ」

「貴様は貴様で悪性に偏っていると思うが……」

雫はしっかりと突っ込んでから、顎に手をあて思案する。

「そうだな——死に掛けの者を助けはすると思う。だが、九条様ほどに苦労はかけないだろうな」

「だろ？　九条様はいい人過ぎる。そして、そのいい人パワーを前面に押し出して頼まれると断れるわけがない！　ある意味、理不尽な人だよな」

いい人パワーに押し負け、口論に敗北した羽織が言うのだから、その言葉の確度は並ではなかった。

あの人の笑顔は、拒絶をやんわりと拒絶してくる。しかもそれは罪悪感を刺激し、奉仕の心をほだすことでの、強制でない湧き出るような良心を浮き彫りにするとか、なんというか。名状し難い凄みがあった。

しかも、それが全て天然である。対処に困ることこの上ない。

羽織の苦悩を無視して、それにしても、と条が口を開く。

とりあえずイマイチ状況を把握しきれていないので、状況を知るために口を動かす。

「武器を扱う魔害物、だったか。強いのか……えーと、雫、さん？」
「雫で構わんさ。私も条と呼ばせてもらう」

「んー、わかった」

雫の提案に、条は気安く頷いた。

「だから直系なんだって。ソッコー過ぎだって。失礼だって」

浴衣や条が特別、そういうことに寛容なだけだ。変に格式を重んじる条家であれば、傍系でさえ無礼に怒り出す者だっている。まあ、羽織も静乃と浴衣以外には一切敬意も敬語もないが……。

羽織がなにやらぼやいていたが、ふたりは気にせず会話を続ける。

「強かったぞ、奴は強かった……加減されていても、私は手も足もでなかった」

「つても、その強い基準がわからないよな。雫ってどのくらい強いんだよ」

「そうだな……言ってしまうえば、正直わからん」

「だよなあ。俺も条家の直系だから強いとか、よく言われることもあるけどさ。実際俺なんかより強い人たちに囲まれて育ったし、自分の強さがどのくらいなんてわかんね」

「まあ、どんな小敵にも油断するべからず——同じことで、敵は自分より強いと思っておけばちょうどいいだろう」

「……そーだな」

二条 条は適当な性格の男だ。

とりあえず頷いておく、というのが彼の基本姿勢である。

とはいえ無感動というわけでもない。

強い敵、結構である。別に自分のほうがもっと強い。

条は自己の強さを名状することはできずとも、感覚的には知悉している。自分に勝てる者など、そうはいないと確信している。だから、雫の言葉に焦る必要もなければ慌てる必要もない。

それが故の適当な返答なのだ。

だから先の言葉は単なる謙遜なのだが……否定されなかったことが、ちよつと悔しい条であつた。

そんな条の内心など露知らず、雫は立ち上がる。

「さてじゃあ、行こうか。奴を探し出す」

「おう」

につ、と強い笑みを浮かべ、条も追隨して立ち上がった。
しかし。

やる気を漲らせ、善は急げとばかりに立ち上がるふたりに、

「で、それはいいけど——なに、今から探す気なの、お前ら」

羽織は、冷や水のような声音で呼び止める。

雫はむつとして、当たり前だと言い返す。

「当たり前だ。あんな奴を放っておいて、他の退魔師や一般人にまで手をだされでもしたら不味いだろう」

「俺はノリで立ったただけだけど」

雫の正義感たつぷりの発言と。

条のかなり適当な理由とに、羽織はため息を漏らす。

「……はああ。ふたりとも、今行きたいならふたりだけで行け、おれはいかない」

「なっ！ 貴様、それでも……！」

「場所も特定できてないような敵を探すなんて、専門家もなしで見つかるわけがねえ。一日中、走り回っても無意味だろうよ」

「うっ」

「それに、今朝治癒してもらったばかりで完調じゃない嬢ちゃんの足手まといまでいるとなりゃあ、行きたいはずがねえだろう」

「ううっ」

「なんだ、文句あんのか、言ってみろ」

「うーっ」

確かに、魔害物の居所などわかりはしないし、探查能力も持ち合わせてはいない。それでは探し出せるわけがない。

また、雫の傷は治ったが、体力はまだ取り戻せてはいない。もしも戦闘途中で体力切れなんか起こせば、間違いなく足手まといどころか、足枷である。

気概とは別に、状況は全く整っていなかった。

「そう言われると羽織のほうが正しい、か」

糸も考えを改め、腰を下ろした。もともと、長い時間の外出は羽織のせいでご法度とされたので、探索の作業は彼には論外だ。

そうなる雫も立ってはいられず、意気消沈して座り込む。拗ねたように口を尖らせ、非難のように打開案を問う。

「じゃあ、どうするんだ」

「決まってる。情報を集めて、休んで、叩く」

「その情報をどう集めるかを訊いている。私はあいつと遭遇するのに、二週間はかかったぞ」

「……どういう行動をとったのかがなんとなく読めるが、今は突っ込まずにいてやる」

きっとあてもなく町中を駆けずり回ったのだろう。羽織は勝手に確信し、勝手に呆れていた。

そんな面倒かつ時間のかかる方法は使わない。羽織は不敵に笑っ

てみせる。

「情報をどう集めるか？　ここをどこだと思ってやがる」

「……ああ」

条は思い至ったらしく、納得の声を出す。

ひとりわからない雫は、やはり羽織を睨んで説明の要求をする。

「回りくどい言い方はやめろ。鬱陶しい」

「つたく、短気な嬢ちゃんだな。そういうこと言われると余計に無駄話はさみたくなるが……ま、今回はやめとくよ。」

正解は、条家。そして、条家十門にはそれぞれ役割がある」

「役割？　……ああ、九条は治癒を生業としている、とかか」

「そう。その中で、情報収集に特化している条があっても、おかしくねえわな」

「！　そうか、確か“完全予知”の——六条！」

理念にして理想、極致。

『過去を知り、現在を知り、そして未来さえも知る——全ての音はその耳に、全ての事はその眼に、^{まなこ}全ての報はその手に入る』

“完全予知”の六条。

条家の情報関連全てを担う一家である。

羽織は鷹揚に頷く。

「六条に受け継がれる魂魄能力は“遠方の知覚”。距離や時間を無視してどんな遠方の場所でも知覚できる——ま、人間が使うんで、そこまで便利じゃあねえがな」

距離の無視といっても、十メートル四方だけの知覚や、一キロメートル四方まで知覚できるが雑になってしまうなど、術者の力量

によって様々だ。時間の無視にいたっては最高難易度の技法であり、現状においては六条家当主にしかできないと聞く。

とはいえ、六条の能力は情報収集に適したもので、条家の歴史を陰ながら支えてきたことは確か。

「総会で雫に任せることが決まったんだ、六条だって情報を渡してくれるだろ」

さて、と。

羽織は自らの羽織りの袂から携帯電話をとりだし、流暢に操作、電話をかける。

「いや、貴様の羽織りは四次元ポケットなのか？」

雫の突っ込みも虚しく、羽織は既に携帯電話に意識をやっていた。気安く気軽に、全くいつもの不遜さで喋りかける。

「よう——時久^{ときひさ}。六条家、当主さんよ」

『羽織殿、ですか』

六条 時久——六条家当主に、羽織は直接電話をかけていた。

羽織のコネクションに激しく疑問は抱くも、情報収集において右にでる者なしと呼ばれる六条家、その当主から直に情報が得られるならと、雫は突っ込みを全力で我慢する。

ちなみに条も口をわななかせて驚いていた。

ただし、条の驚愕のポイントは雫とは少々ズレていた。

そもそも条は、六条家当主の下の名前など知りもしなかった。というか、おそらく六条家の者くらいしか聞き及んでいないと思われる。

それは六条に限った話ではなく、条家当主は基本的に名を伏せる。

条の名で呼ぶことが、条家の仕来りとしてそれで尊称となるから、姓で呼ばせるためだ。

流石に一家のうちでは知れているが、他家——条のように居候している者は例外として——にさえ知られていないことが多い。

こういった慣例がある故に、一条は名を捨てたのだが——閑話休題。

つまり、羽織が六条家当主の名を知り、なおかつ呼び捨てするほどに親しいことに条は驚倒しているのだった。……結局、驚きの点は雫と変わらなかった。

ふたりを気にもとめずに、羽織は至って普通に会話する。

「用件はわかるだろ？」

『武器を扱う魔害物、その位置ですね？』

電話越しだと六条の声はさらに低く、そこにはかなりの迫力を伴っていたが、羽織はいつも通りと苦笑するだけだ。

「流石に察しがいい。今、探してるんだろ。どれくらいで位置を特定できる？」

『我らの全力を注いで——そうですね、明日の正午には見つけましょう』

六条家は優秀極まる集団だった。先ほどの総会を解散してから捜索をはじめたとして、町の中だけと範囲を設定したとして、それでも早すぎる。広い町からたった一匹の標的を探し当てるには、一日では早すぎる。その早さ、普通の情報屋で聞けば与太話の領域である。しかしそこは六条家——与太話であるはずがなかった。

羽織は額を手で押さえ、ゲンナリした声を漏らす。

「ありえねえ……」

『はい？』

「いくらなんでも早すぎる！　もっと時間かけろやっ！」

わかりやすい不真面目な発言に、六条は不気味に笑う。

『ふふ、羽織殿、我ら六条家の理念は？』

六条は低い声のせいでわかりにくい、極小の楽しげを織り交ぜた声音を奏でる。

羽織はそれを把握しつつ、ただ舌打ちのように吐き捨てる。幾度も問われた、わかりきった問いの答えを。

「……“完全予知”」

『その通り。我ら六条家は情報の中で最も有益な、未来の情報を掴まんとする者——たかが一匹の魔害物の位置を探るなど造作もないのです』

誇らしげに語る六条から、己が能力への絶対の自信が垣間見える。無論、理想は理想で、完全などとは程遠いものの、確かに六条は未来を知り、そして同時に現在や過去さえも知る賢人。

羽織はやれやれとため息を吐いた。

「ま、お前の凄さは知ってるよ……じゃあ、発見しだい位置を伝えろよ」

『わかっていますよ、総会での決定ですからね——では、ごきげんよう』

怪しげに含み笑いを漏らし、六条は通話を切った。

相変わらぬ胡散臭さに眉をしかめながら、羽織は携帯電話を袂に仕舞いなおす。

胡散臭さは否めないも、しかしそこに疑いの念はない。なぜなら
いくら胡散臭そうでも腕は確かだと承知しているのだから――あと
は待つだけだ。

第八話 準備（後書き）

次回、戦闘。

第九話 再戦（前書き）

戦闘なので、今までと比べるとちょっと長め。

第九話 再戦

日が落ち、また昇って――日付は変わる。

一晚の睡眠と九条の治癒により、雫の体調は万全となる。
そして。

六条からも敵の位置を特定したと連絡が入り。

全ての準備は整った。

羽織、雫、条の三人は九条の屋敷を出て、武器を扱う魔害物の討伐を開始する。

「羽織さまっ、わたしもいきますっ!」

「浴衣様?」

大仰な九条家の門をでて、すぐにソプラノ明朗な声が羽織を捉えた。

声の方向には可愛らしい少女がひとり待ち構えていた。羽織の主のひとり、九条 浴衣。

どうやら、待ち伏せていたらしい。それに服装もいつもの和服で

はなく、動き易い服——雫に倣ってか何故か制服——を着ていて、やる気満々といったところか。羽織はその行動に微笑ましげに苦笑する。

「浴衣様のやる気には感心しますが、いけませんよ。連れては行けません」

微笑みの反面、声音は断固としていた。

けれども浴衣は全く効いた風もなく、意志を伝える。意志の強さは母親譲り。

「加瀬先輩を協力するのは九条家です。なのに、九条がいないのはおかしいですよ。だから、わたしがいきますっ！」

「だから私がいるんです。私は一応九条の姓を頂いておりますので、問題ありません」

「じゃっ、じゃあ、戦闘には治癒師がいたほうが生存率は上がるはずですよねっ」

「いえ……確かに回復役はいませんが、浴衣様を実戦の場に連れ込むわけにはいきません」

「実戦になら、もう何度も出ていますよ」

「いつもとは違います。敵の強さ、味方の強さ、それらを考慮してチームを選定された依頼では、まだ危険は高が知れているでしょう。しかし、こう突発的な状況では敵の力量ははっきりしない上に、昨日急遽編成した即席チーム、こちらが負ける可能性だって大いにあるのです。そんな無茶、九条様が心配されます」

「母様には許可をもらっています！」

「……………」

いや何故許可するんですか。

頭を抱えなくなる衝動に氣勢が削がれるも、羽織は持ち直して言

い募る。

「……あつ、そう、そうです。武器を扱う魔害物ですよ？ そんな危険な敵と戦うなんて、私が許可できません」

「強い敵との戦いという、抗いの場でこそ強くなれる。羽織さまが教えてくれたことです！」

羽織は必死になって諭すも、あまり浴衣に効いた様子もなく、口論は続く。いつもなら羽織が退くところだが、流石に命に関わる問題、容易く退けない。

というか、前日に静乃に言いくるめられたのが記憶に新しく、余計に意固地となる。羽織も羽織で負けず嫌いの傾向があるのかもしれない。

見かねた条が適当そうに口をはさむ。

「俺は別にいいけどな、浴衣ちゃんは九条様に次ぐ治癒能力の持ち主だし」

「条！ 煽るようなことを言うな」

吼える勢いで羽織は条を黙らせた。必死である。

そうしていると横の雫も、むうと思案顔で意見を述べる。

「私は……どちらかといえば反対だな。もしも浴衣が怪我でもしたら、九条様に示しがつかない」

「今はじめてお前がいい奴に思えた！

雫の言うとおりです、浴衣様、あなたにもしものことがあったら、

私は――」

「だいじょうぶです！」

「はい？」

どんな根拠か、浴衣は一寸の迷いもなく断言した。

「私にもしもはありえません！ 羽織さまが、護ってくれますからっ！」

「っ！」

的確に羽織の弱点をつくのは九条親子の共通スキルだった。

羽織は、真っ直ぐな信頼というものが心底苦手だった。特にこう純粹さを前面に押し出されたら、いつもはよく回る舌も停止してしまう。

そして痛烈なるトドメの一言。

「羽織さま、お願いです！ わたしは羽織さまが心配なんですっ！ 加瀬先輩とも仲良くなりましたし、条さんともお友達です——わたしは、助けになりたいんですっ！」

「……………」

本当に、この少女は九条 静乃の娘だった。意志の強さも、優しさも、まるきりそっくりだ。

連敗——羽織は苦渋に満ち満ちた表情で、血を吐くような悲痛さで、涙さえ流しそうになりながら、頷かざるをえなかった。

「わかり……ました。絶対、私から離れないでくださいよ」
「うんっ！」

浴衣は静乃と同じように、満面の笑みで頷いた。
いい人とは、かくも理不尽なものなのだ。

特定したその場所まで、四人は急ぐ。追加の情報で、戦闘が始まっていると伝わったからだ。どこぞの退魔師が、あの魔害物と遭遇してしまったらしい。

羽織は駆けながら、六条に電話をかける。情報は逐一変化するもの。今朝ではなく、先ほどでもなく、現在の情報を聞き出したかった。

「現場はどうなってる？」

『現在、標的は複数の退魔師と交戦中——既に退魔師たちの敗戦色は濃く、もって数分ほどの足止めにはかならないでしょう』

「急いだほうが、いいってことだな」

羽織も六条も、負けている退魔師の安否など一切考慮にいれず、ただの足止め扱いである。

後ろで走る雫や浴衣に聞かれては面倒になる非情な会話なので、声量を抑えてふたりは会話する。

「退魔師どもは、敵に損害を与えたか？」

『……いえ、遊ばれていますね。おそらく殺す気があれば、一瞬でできる』

「ち。いつ飽きるかわかんねえし、やっぱ急ぐべきだな……」

ここでさらに移動されては、また探し出すのに厄介だという、その一点にのみふたりは焦点をあてていた。

目的以外の全てを排泄しつくした、世には冷酷と呼ばれる人種であること——羽織と六条はそこを共通点として交友を深めていた。

羽織は通話を打ち切り、振り返る。

「急ぐぞ！ 逃げられちまう」

「そうじゃないだろう！ 早くしないと被害者が増える……！」

雫は毅然と否定し、羽織にはない心配色を覗かせる。できるのなら、死者などだしたくなかった。

一方、いつもなら同意するであろう浴衣は、そういう余裕もなくてやや苦い顔色だ。

「うう、みんな速いですよお」

「ま、退魔師の速度は治癒師にはきついか。おぶろうか？」

「ふざけんな、条！ 浴衣様になに色目つかってやがるっ！ おんぶならおれがする！」

条の言葉に羽織が即反応、剣呑に叫ぶ。親馬鹿丸出しの反応速度である。

当の条は笑い出す。

「はっは、冗句だ」

「くすくす」

浴衣も口元を手で押さえ込むも、笑みは隠し切れていなかった。

走りながらも、よくよく余裕のあるメンバーである。

そうこうしている内に、雫は眼光を鋭角とし呟く。

「……そろそろか」

頷き、羽織は指をさす。

「そこを曲がった路地——って、今回の魔害物は路地裏好きなのか？」

「知るかつ！　ともかく、踏み込むぞ」

魔害物の作り出した異相空間——そこは死臭漂う、血塗れの世界。足を踏み入れれば、視界にあるのは血色のみ。戦場だったそこは既に惨状となり、生ける者はただのひとりもない。

戦っていた退魔師は負け、既に殺しつくされていた。ただひとつ、黒塗りの肢体に頭頂部は獅子を模す頭、両手に握るは小太刀——すなわち、武器を扱う魔害物だけがそこには存在していた。

羽織はつまらなさそうに目を細め、すぐに視界を塞ぐように浴衣の前を陣取る。条は無音で腰を落として構える。

雫は険しく眉を歪め、即座に臨戦態勢——右手で虚空を掴み取る。なにもなかったはずなのに、右手は何時の間に刀身の長い日本刀を握り締めていた。

その刀は、刀剣美とでもいおうか、人殺しの凶器であるのに、いやそれが故なのか——心を溶かすほど美しかった。

一点の曇りさえなく、刀身は澄み渡っている。銀色の刀身はそれそのまま魂の輝きを映しているのか、見る者を無条件で惹き付ける美しさを誇っていた。鰐は単純な円形で黒色、柄も特に凝った作りとは言わないが、それでも雫が握るとまるで一個の絵画のように似合いすぎるほど似合う。

それは魂魄能力を具象化したもの——魂の具象武器。

魂の力という曖昧なものは、こうして物質化しなければ酷く不安定で、簡単に暴走してしまうのだ。安定化のための技法が、具象化というわけだ。

安定化とは束縛とも言え、全ての能力の始点が武器からとなるが、

そこは致し方ない。

今も昔もいつの時代もどこの場所でも、魔益師は魂魄能力を具象化してその武具を行使する戦法が主流である。

ブウオン、と雫は露払いのように己が魂の刀を一振りし――

「貴っ――様ああ！」

ダンッ！ と一足跳び。堪え切れずに雫は獅子頭に踊りかかった。

「つて、おい！」

一拍遅れた羽織の制止も届かず、雫と獅子頭の距離は既にゼロ。頭蓋へ落とす真っ直ぐ過ぎる太刀。

「カタ？」

獅子頭は小首を傾げつつ、右腕を掲げる。ちょうどそこに雫の斬撃が落ち、巧みに小太刀で防ぐ結果。ついでのような気安さに、雫は舌打ちしかける。している場合でなく。

雫は刀を翻し、腰を沈める。深く深く沈みて狙いは獅子頭の細い脚部。両足を絶つかの横薙ぐ一閃。

獅子頭は軽く跳躍、避けられた。同時に低い体勢の雫を踏み潰さんと、着地点を決定。雫は刀を手放し――瞬間に具象化が解ける、刀が消失する――両手を地につき横っ跳び。

ドスン、と獅子頭の両足が雫の元いた大地を踏み締め、雫は両手両足で着地しどうにか体勢を維持する。止まることなく雫は再び両手で大地を叩き、その反動で上体を起こす。その頃には振り被られた獅子頭の小太刀が唐竹割に雫の頭頂部に振り下ろされ――具象化は済み、手の内には刀――水平に構えた日本刀が小太刀の一撃をどうにか受け止める。

ガギャアア！！

と。

刃音響き、火花散る。

噛み合う刃と刃——さらに追撃とばかりに、獅子頭は逆の手の小太刀を水平の刀に叩きつける。

「ぐっ」

激しい衝撃が刀へ、そして全身へと伝い、雫はグラつく。

そして再び掲げられる獅子頭の小太刀——単調な動作に、雫の目が計略に細まる。

片腕を振り上げているがために、もう片方——刀と組み合っている方の小太刀の力が微かに減じている。馬鹿みたいな大振りが原因だ。そこを見逃さず、雫は具象化を解きながら後方へ一歩だけ退くことに成功。たちまち獅子頭は支えを失いバランスを崩す。

さらには振り下ろした小太刀のいく末も失う。剣閃が歪み、剣筋がブレる。一歩分による紙一重、刀尖が退いた雫の鼻先を通り過ぎる。短い小太刀が相手であるからこそできた対処法。

対処により生じた隙、穿たぬは阿呆——素早く具象化、刀を顕現。袈裟懸けに振り下ろす、必中を期した刀刃。

だというのに。体勢は最悪だというのに。獅子頭は右の小太刀を無様ながらも振り上げる動作での投擲する足掻き。

雫は咄嗟に身体ごと回転。舞い回るように小太刀を軽やかに避ける。そのまま遠心力を乗せて刀を横薙ぐ。今度こそ直撃を確信し、獅子頭は下品に大口を開く。そして。

「っ！ なにっ!？」

来たる刀身に、喰らいついた。生え揃う歯牙が、ガチンと刀を捕まえ噛み締める。

勢いの全ては殺され、刃は停止。押しても引いても、獅子頭の顎の力に敵わず動かない。ぴくりとさえ、刀は動かない。

しかし小太刀は止まらない。

風切り喉狙う剣線。

主導権を奪われ、武器を握られ、タイミングを逸した雫に回避な
どできやしない。

自分の勝機は相手の勝機、簡単に天秤は傾く。雫に傾いていた勝機は一瞬で獅子頭へと傾き、それに対する悪態すら吐けずに死だけが迫り――

「ちよつとごめんよ」

そんな軽い声と、ゴガンと重苦しい打撃音が嫌に耳に染み渡る。
刃が喉裂く直前。

獅子頭を、条が殴り飛ばしたのだ。

ボールのように吹き飛ぶ獅子頭を尻目に、条は僅かばかり責めるように話しかける。

「雫、先走りすぎ」

「すっ、すまない」

「たくっ――ま、気を引き締めろよ、敵、来るぞ」

壁に叩きつけられようとなんのその、獅子頭は幽鬼のように起き上がる。そして投擲してなくしたはずの右の小太刀を瞬く間に再生し、どうだとはかりに滲む狂喜を雫と条に突きつける。

「カタカタカタ」

「はっ、楽しそう戦う魔害物だな。それも進化の結果か？」

雫と条、そして獅子頭の三者から離れた位置。一步も動かず、羽

織は浴衣を背にして笑う。

「って、羽織！ 貴様も動け戦えこっち来いっ！」

「やだね」

「なっ！」

「浴衣様がいる以上、おれは浴衣様の護衛をする」

決定事項の通達。羽織に動く気配も曲げる様子もなかった。

労働意欲が皆無なのか、使用人の鏡なのか。判断に迷うところである。

流石に忍びないのは浴衣。

「あの……羽織さま、わたしのことはいいですから、戦ってください」

「いえダメです。治療師はパーティの要です。治療師を失ったパーティは瓦解するのみ。ですからこのメンバー唯一の治療師である浴衣様を誰かが護るのは当然です。そしてそうになると、一番の適役は私かと」

羽織は懇切丁寧に理路整然と諭す。

戦闘のセオリーを語りつつ、それは浴衣の安全確保と自分を戦闘行為から外すための言動に他ならない。

羽織としては、浴衣が無事ならそれでいい。なので前線にはださず、ついでに自分も護衛の名目で戦闘回避。一石二鳥である。

浴衣は正論——正論っぽいもの——をそれらしい口調で言われては、強く言えなくなる。戦闘に関して、羽織の方が経験豊富で、判断力も上なのは明らかだったからだ。

羽織はダメ押しに雫と条にも、この状況を正当化する策を告げる。

「前衛ふたり！ ダメージがきつくなったら、片方は一旦こっちに

退け。浴衣様が治癒する。それを繰り返してけば削り勝てる」

「貴様の役割だけ、随分ラクそうだなあ！」

「お、来るぞ、前向け」

「！」

雫は文句の暇もなく、敵に視線を戻す。確かに、獅子頭はゆつくりとこちらへと前進していた。

はあ、と糸がため息を吐いてから、視線を獅子頭に、声は雫に向ける。

「雫、諦めろ。別にそこまで悪い作戦でもないんだし、羽織に乗るしかない」

「むう……心底不本意だが、わかった」

不承不承を前面に押し出しつつも、雫は刀を構えなおす。羽織を意識から追いやり、獅子頭にのみ注視する。

獅子頭は向けられるふたつの戦意に、ぶるりと身を震わす。人間
 であろうところの、それは武者震いなのだろうか。なんにしても不気
 味だ。

がぱり、と大口を開けて、

「力々力々力々力々力々力々力々力々力々力々力々力々」

獅子頭は高速で齒を打ち鳴らす。大笑を上げる。狂笑を轟かす。転瞬。

!

雫の視界から、獅子頭は消え失せた。

背を走る悪寒。這い寄る恐怖。

咄嗟に、雫は身を引いていた。

ガチン、と噛み鳴らす歯音。一瞬前まで雫の存在した空間を、いつの間に接近した獅子頭は噛み千切っていた。

続く銀刃の津波。避けた直後の雫に、小太刀双刃が振りかかる。

咄嗟の回避動作であつたため少々無理な体勢となつてしまつた雫は、それでも刀でもってどうにか迎撃。攻め立てる小太刀、弾き防ぐ刀――斬り斬り、裂き裂き、突き突き、薙ぎ薙ぎ――連続で響き渡る金属音。交わる刃と刃、その十四合目になって、遂に雫の体勢は本格的に崩れる。

「くっ！」

その隙を突く、獅子頭の小太刀一閃。

だが――雫の口元は、笑み形作る。

先ほどと、なんら変わらない状況だったから。

「そこお！」

隙を突くのは獅子頭ではなく条。

攻撃動作の真つ最中の背中へとぶちかます、渾身の拳撃。

条の拳が獅子頭に突き刺さる――はずが、受け止められる。

「「なっ!？」」

驚愕は雫と条の同時。

それは、背から生じた第三の腕。その黒腕が条の拳を止め、さらに生えた第四の腕が素早く条の腹を打つ。

「がっ！」

衝撃と苦痛に呻き、条はよろめきながら数歩下がる。

気にしている余裕は、雫にはない。

一瞬だけ止まった小太刀は、次瞬に起動。驚愕のせいで雫は体勢を立て直すタイミングを逃した。身を捻っても斬撃は避け切れず、

「っっ！」

雫の右腕を、鮮血散らして裂く。

痛みに声さえ出ない。だが、足だけはバックステップを踏んでいて、追撃を逃れる。

——それら全てを眺めることしかできなかった浴衣は、我慢ならず絶叫していた。

「条さん！ 加瀬先輩！ 治癒しますっ！ 一旦、退いてくださいっ！」

だがそれは浅慮。

ふたりの前衛が揃って後退してしまえば、後衛に魔の手が届く。たとえば治癒の途中で襲われれば、まとめてやられる。そうでなくとも隙を晒す。

つまるところ、パーティ全体の敗北を意味している。浴衣だってわかってているが、感情は抑えられなかった。走り出す寸前で羽織に肩を掴まれ、浴衣は唇を噛み締める。

無論、雫も条も理解していた。だから黙殺し、立ち塞がるように立ち止まる。

とはいえ雫の傷は浅くなく、下手に動けば腕がとれてしまうのではないかというほどだ。血も目を背けたくなるほどに右腕を染めている。控えめに見えても、右手は使い物になるまい。

条は確認し、グッと拳を握り締める。

「ふう……羽織の作戦通り、雫は一旦退いて治癒してもらえ。俺は奴をひきつけておく」

「なっ！　しかし、条ひとりでは――！」

「大丈夫だ」

ニッ、と条は不安感を殺すように笑った。まるで問題ないと、そう告げるように。

雫はそれでも渋ったが、羽織がうざったそうに急かす。

「いいから、お前は退けつての！　手負いじゃ足手まといだ！」

「アレ相手にひとりだぞっ！？」

「うるせー！　条はそんなでも一応、戦闘特化条家の二条、その直系だぞ！　お前に心配されるほど弱かねえ！　それにっ！」

ビシィ、と条を指差し、羽織は非難を織り交ぜ叫ぶ。

「そいつはまだ、具象化すらしてねえ！」

ちなみ羽織が必死なのは、戦略的に見て雫が戦えなくなると困るからであり、気遣いの類ではないことをここに明記しておく。

そう、気遣い。その気遣いが、敗北に繋がることもある。不本意ながら雫は理解し、後方に思い切り跳び退く。

獅子頭が追撃をしようとしたが、条が遮ったことで断念。かわりに条にターゲットを絞ったらしく、渴いた笑みを鳴らす。

条は揺るがず、たったひとりで獅子頭と相対する。

ひとえにその自信の源は、条が具象化していないことにある。

――条は具象化をしていない。

具象武具は人それぞれ、魂魄能力と同じで姿かたちが違うため、

実は一見しただけでは具象化中か否かはわからないことが多い。

たとえば雫のようにまるきり戦闘向けの武器が具象武具であることは退魔師には多いが、それ以外にも戦闘のイメージのないアクセサリーが具象武具であったり、単に着用している服自体が具象武具であったりするのだ。

これもまた、魂の構造。千人千色である。

だが——ともかく具象化をせずに能力を使うのは極めて無駄だ、非効率的にもほどがある、不便に過ぎる。それは体力をやたら消費するし、力が拡散し上手く指向性を保てないし、暴走の危険性をも孕む。暴走させてはいけないので、必然的にほとんど力を発揮できない——しない。

いうなれば素の状態であり、戦闘状態である具象化とは性能に天と地ほどの差があるのだ。

つまり——条はまだ、全然本気をだしていない。

「よっし、全開でいくぜ」

無論、条だって具象化せずに戦う不利は重々承知している。今回は単に、雫がいきなり突っ込んだりするから、具象化の暇がなかっただけだ。まあ、彼自身がスロースターターだというのも起因してはいるかもしれないが……。

条は速やかに具象化——音もなく、条の両手には黒い指貫グローブが物質化、装着していた。

漆黒をそのまま手に塗りつけたような、本当に黒一色のグローブだ。それは条の性格を表しているといったいい。

戦いに格好いいも悪いもいらない、そんなものはただの欺瞞で、戦いとは単なる卑しい殺し合いでしかない。戦闘という行為を一切美化せず、率直にそれが汚く忌避されるものと弁えている。故に、武具にも飾りや彩りは不要。ただ、用途を満たせばそれでいい。

それこそが二条 条の考え方であり、それがために具象武具は全

くの質素。

そしてその能力は――

「ううらッ！」

跳び掛り、なんの躊躇も考えずらい拳を獅子頭へぶちかます。獅子頭は低能ながらも先と同じ対処で充分と判断。未だ生えていた第三の腕で条のパンチを受け止め

――切れずにブチ抜かれる！

「カヒッ！？」

二条の血統に受け継がれる魂魄能力――それは“一撃の強化”。条家十門、その中で最も単純にして明快な能力。インパクトの際に、威力が倍增するだけの強化系能力。

単純ゆえに強力――その一撃は、どんなものでも遍く砕く！

砕かれた第三の腕は木っ端微塵、獅子頭は立て続けに第四の腕で条を襲うも。

「無駄だっ！」

まるでなんでもないように、条は走りながら、襲い来る腕を軽く左手で薙ぐ。それだけで獅子頭の腕は吹き飛ぶ。

獅子頭は本能の警鐘に従い、残った両腕を交差し防御を構えて。

「求めて曰く――“一撃必倒”！！」

大砲のような条の全力拳撃に、それこそ砲弾よろしく殴り飛ばされた。

さきほどとは比べものにならない重い拳。強すぎる衝撃に、獅子頭はなんの備えもできずに凄まじい勢いで壁に激突、ずるりと倒れ伏した。もしもここが通常の空間ならば、激突した壁もぶち抜き、さらに遠方まで吹き飛んでいただろう。

「なん、て……威力だ」

雫は浴衣の治癒を受けながら、愕然としたように呟く。

今、殴り飛ばされた獅子頭が、消えたように感じた。それほどの速さでぶっ飛んだということだ。それほどの威力でぶん殴られたということだ。

「これが、二条家直系」

二条家の理念にして理想、極致——“一撃必倒”。

『一撃のみで打ち砕く。一撃のみで打ち倒す。一撃のみで打ち滅ぼす。そこに次撃は不必要。何故ならその一撃に、全ては籠っているのだから』

条の一撃はまさにその理想を体現したかの威力といえた。少なくとも、雫はそう強く思った。

しかし、理想とはそう甘くはない。

「はっ。まだまだだな。一撃必倒できてねえ」

羽織が口にした厳しい評価の通り、確かに獅子頭の魔害物は——

「カタ、リ」

生きていた。

しっかりとその両足で大地を踏み締め、再び立ち上がり、笑う。

「力タ力タ力タ力タ力タ力タ力タ力タ力タ力タ力
力タ力タ力タ力タ力タ力タ力タ力タ力タ力タ力
力タ力タ力タ力タ」

笑う。笑う。笑う。

まるで壊れたように。まるで狂ったように。

笑う。

それはまるでこんな程度では満足しないと、不敵に語りかけているように。

羽織はほんのり目を細めた。

「ちつくしよ、硬えな」

シヨックを隠しきれずにぼやく条。今の一撃は確かに全力全開の、必倒をこめた拳だったのだ。

その威力は鉄塊をも粉碎する——それを直撃して、笑うか……。

「バケモンだな」

もうこつちも笑えてしまう。
そして。

「カタリ」

笑みはやみ。

魔害物が炸裂した。

——否。

その全身から黒い腕が爆発のように生え、生え、数え切れないほど生えた。

腕。

腕腕。

腕腕腕。

腕、腕だ。

黒い、腕である。

総身余すところなく、魔害物のどこからも、新たなる黒の腕が生えた！

顔からも、手からも、足からも、胸からも、背中からも、腹からも——どこからも腕が生えて、生えて、生えた。

腕は距離を埋めるがごとく伸長し、伸びた腕がさらに枝分かれ、鼠算式に増量する。増大する。激増する。

大量膨大の腕の群は爆伸と増殖を繰り返し、全てを塗り潰す。染みが浸透して広がるように、着実静かに世界を侵蝕する。

増えて増えて、黒を広げて増進する腕の奔流——それはまさに腕の津波か、はたまた黒き瀑布。

そしてその全てに狙われる退魔師一同は。

「——！」

そんな馬鹿げた光景に驚愕し、声さえ失う。
常識外れの魔害物——それを超越した異常な攻撃法。視界一杯は

黒、黒、黒。常軌を逸した黒一色。

この異なる世界を埋め尽くすようにして、魔害物の腕が増えて伸びる。四人の小さな人の子らを押し潰さんと迫る。迫る。迫る。

脅威が迫っているというのに、しかし身体は動かない。大自然に對するような本能的戦慄に、身体が震えて動かない。思考の活動が一足先に殺され、無となる。思考が無では、身体が動こうはずもない。

魔害物を滅ぼすための存在であるはずの魔益師たちは、死の確信に吞まれてしまう。死の行進に蝕まれて、瞬きもできない。文字通り死の腕に捕まれ黄泉へと直行す――そこに。

「止まるな、動け！ 死にてえのか！」

硬直を解く叫び。

唯一、動じずいた羽織の声。

そこでようやく全員がハッと我にかえり、現実と直面することになる。

だが、我にかえったとて、こんな現状でマトモな思考が回せるはずがない。それは年齢を考えるに当然過ぎる経験の浅さ。逆境への対処法の不明。経験は、直接的な強さとはまた無関係、積み重ねた年月のみで獲得するもの。いくら雫が一流の退魔師でも、いくら条が二条家直系でも、年若きは如何ともし難い。

それ故に思考の無から脱しても、次に思考は真っ白となる。結果、一瞬前と大差なく意味ある行動はなにひとつとしてできない。やはりただひとりを除いて……だが。

「ち――馬鹿どもが」

毒づき。

羽織は苛立たしげに指示を飛ばす。

「条！ お前は全力で一点を穿て！
雫！ その穴をお前の能力でさらに掘って道をつくれ！」

空白の思考に、まくし立てるような命令は染み渡る。

自身の思考回路がマヒしているために、ふたりは反抗の言葉も忘れて素直に頷く。

その身体は指向性を得て、ようやく起動を開始。真実思考なく、命ざれるままに稼働する。

拳を握り、条は黒の津波に真っ向から立ち向かう。それは思考が働かないがための、恐怖なき立ち回り。

「う、おおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

雑念全てを封殺しただ一念——全力で、という言葉だけを頭に響かせ、条は雄叫び己が力を解放する——魂魄能力“一撃の強化”！
極限まで強化された条の拳が誤魔化しも、小細工も、牽制もなく——ただ思い切り黒の奔流をぶん殴る。

思考が回らなくてもそれ以前の魂の底で、条は理解し切っていた。
二条の一撃に、誤魔化しも小細工も牽制も必要ない——なればこそ、無心で放たれるのは愚直なまでのストレート！

「——！」

ああ、そうだ。

条はそこでようやく自分の思考を取り戻していた。空白を抜け、自身の色を思い出す。

そうだ、腕など一度打ち抜いた。それが束になろうとも——

打ち抜けぬ道理はない！

ズガン！ と爆裂にも等しい景気いい大音を響かせ、幾重にも寄せ集まった腕々をなぎ倒し、なぎ払い——小さな条の拳は、腕の津波に大穴を穿った。

拳に残るは心地よい痺れのみ。見事、打ち克った証明。たったひとつの拳が、何百ほどにもなる腕の群に打ち克ったという証明。

それを見届け、羽織はニヤリと邪悪に笑って次撃の指示を叫ぶ。

「次、雫！」

「あっ、ああ！」

条のその真後ろ。

浴衣の治癒の成果。雫はダメージに顔色が翳ることもなく、痛みで動作に支障がでることもなく、慌てながらも握る刀を限界まで振り被る。条の崩した黒い大波を見据える。

「————！」

指示から一拍開いてしまったが故の、圧倒的な黒への恐怖。雫は痛みを思い出してしまい、身が竦みそうだった。

息を吸い込み——雫は刀を振り被ったままに目を瞑る。

落ち着けと呪文のように胸中で呟く。大丈夫だと暗示のように胸中で囁く。

痛みは幻想で、自己は万全だ——浴衣を信じる。

カッと目を見開き、溜めた呼吸を怖じ気と一緒に吐き捨て、

「破ああッ！」

渾身の——

斬撃を――

放つ！

裂帛の気合をこめた雫の一閃は空気を震わせ、震えた空気は風を呼び、風は加速し鉄槌となる。

――この戦いの直前、四人は自分の魂魄能力について説明をし合った。仲間の能力も把握せずに、共に戦うなどできるはずもないのだから。

そして、その説明にて聞いた雫の魂魄能力は――“風の制御”。この世界に満ち満ちた空気をそよがせ木葉を揺らす、吹き荒れる烈風を御して岩さえ砕く――雫は刀を振るいて空気を乱し、風を起こす退魔師なのだ。

雫の振るった刀、その延長線上から烈風が発生する。

周囲広域から掻き集めた風を統合し制御することで黒の津波、その穿たれた穴を目指して清廉なる旋風が吹き抜ける。

ひゅるん――風が囁き。

轟！――風が叫んだ。

一拍遅れて凄まじいまでの轟音を引き連れ、大穴をさらに竜巻がごとき螺旋回転する風が貫く。掘削機がトンネルを掘るように――黒の波濤に抜け穴が開き、道となって拓ける。

ちなみに条は、風が上手く制御されていたので無事である。

「よっしゃ！ 走れ走れ！ 穴を駆け抜けろ！」

間髪いれずに叫び、羽織はアタフタしている浴衣を抱きかかえ、スタコラ走り出す。

穿ち貫通させた穴は、しかしゆっくりと動画の巻き戻しのよう

塞がっていく。

当然だ。腕は増殖を続けているのだから。増えて伸びて、侵食を続けているのだから。風の残響で塞がる速度が緩やかなのは唯一の救いか。

そのことに気付いてビックリ、条と雫も羽織に倣って駆け出す。出口を目指して全力疾走。

走って走って。

さして長くもない道のりの果て、確かに見える。

穴の出口、黒の終わりに立つ異形が。

「！ 魔害物！」

「あれを潰せばいいんだな」

魔害物は全身から腕を生やしており、さらなる異形と化していた。そしてその姿は、この腕の中心を意味する。

中心とはつまり、奴さえどうにかすれば、腕は消え去るということ。

羽織は理解とともに獰猛に犬歯をむき出し、けれど一切の仕事を他人に押し付ける。

「雫、その場で遠距離攻撃！ 条、その直後にトドメ！」

「了解！」

他人任せという真実——雫と条はそれに気付かず、単にその指示の的確さに頷くのみ。

自分が動きたくない分、羽織は指揮官向きなのかもしれない。

雫は指示通り急停止——左足を前に踏ん張り、身体ごと刀を振り被り。

「風よ舞え。嵐よ踊れ。刃の歌を聴きながら！」

右足で踏み込むことで行き場をなくした疾走の勢いを刀に乗せ、全霊を込めた太刀を放つ。

斬！

必滅の意志を込めた斬撃は、同時に必勝の威力を宿す颶風と化す。高速で距離を踏破し、刃が如く鋭利に研がれた風が獅子頭へと殺到。

斬り――

「カヒッ!?」

――裂く！

あまりの速さに回避も防御も間に合わず、ズパンと見事綺麗に獅子頭の身に斬線が刻まれる。

蓄積された分も含めてダメージは深刻へと至ったのか、莫大に激増していた黒の腕が――嘘のように全て消え去る。黒が一点残さず晴れる。

それでも死なない――否、生存を続ける、死を拒絶する、そのための増殖の停止だ。

攻撃に叩き込んでいた魔を、自分一個に集約したのだ。そうしたことにより、腕を構成していた魔を再生に充てられる。死の淵からも再生可能。

腕は二本に戻るが、刻まれた刀傷は修復される。蓄積されたダメージをある程度回復する。

魔害物の生命力は驚嘆に尽きる――とはいえ、存在を保ち構成する魔は確実に減少しているのだが。

「!」

刹那で癒えた傷を見て、退魔師たちは瞠目。動揺。

する前に、

「ブレンな条！ お前はなんも考えずに拳を握れ！」

引っ叩くような羽織の号令。それは、こんな土壇場で躊躇いなど不要だと告げる。

揺れそうな精神を無理やり停止。条はできる限りの無心を努め、拳を握り締める。

「カタカタ」

獅子頭は、小太刀を構えて迫る条を迎え撃つ。

条は、疾走しながら拳を引き絞る。

接近。

接近。

近接！

先に、小太刀の間合いに入る。

拳士にはまだ遠いその位置で、獅子頭が両手の小太刀を振るう。

近付くなどばかりに、切っ先が届くギリギリの場所でもって振るう。

それは先ほど、条の拳に対する防御は無意味とこっ酷く思い知らされたがための選択だろう。

そんなもの委細構わず。

条は斬撃乱に飛び込む。

致命になるものだけを辛うじて避け、けれどそれ以外に斬り刻まれ。

それでも条は止まらない。

肉が裂け、骨まで軋ませ、鮮血が派手に散る。

だが、右腕だけは無傷。

右腕だけは身体全体で隠し庇い、条は乱剣と血煙の中を真っ直ぐ進む――吼える。

「この一撃だけはっ！」

肉体に刃が食い込む、肉が刃の進軍に抵抗する——それが微か一瞬すらない、しかし確かな剣速の遅れを生む！

一瞬遅れた剣速をつき、命へと銀刃が届くその直前に拳を——

「そのふざけたツラに叩き込む！！」

拳をブチ当てる！

ズガンッ！ と。

衝撃は衝き抜け、否、衝撃は獅子頭の中で一切無駄なく弾けて。故に吹き飛びはせず、獅子頭は数歩ふらつきながら後退し、数秒だけ棒立ちになる。すぐにふらつき、全身で震えて、やがて膝を折った。

「かた……か、た」

ぱきん、と乾いた音を響かせ、獅子頭の頭部は碎け散り——その存在は静かに消滅した。

第九話 再戦（後書き）

主人公なのに戦わないという。

幕間（1）

遠く高い、なにものも見下ろすようなどこか建物の上。

武器を扱う魔害物を打倒した羽織ら四人——というと羽織が中心っぽく聞こえるが、今一度明記しておく。彼は一切の手出しをしていない。口出しはしたけど——を微かな気配も感じさせずに、眺める少女がいた。

ブロンドのロングヘアで、日本人離れした白亜の肌をした……というか確かに間違いなく外人の、白人女性である。目を惹く腰まで届くその髪は不自然さなく煌いており、金糸の如き美しさを誇る。年の頃は雫と同じくらいだろうが、その整いすぎた——言ってしまえば作ったような美麗さを放つ容貌は、どこか大人びてみせる。拍車をかけるのが、その少女のありえないほどの無表情さだ。

よくできた西洋人形だと言われても、迷ったのちに納得してしまいそうなほどに、人間離れした美しさと無感情である。

少女は人形のような面持ちのまま、外見にそぐわず流暢な日本語で——あくまで抑揚なく淡々と——声を紡ぐ。

「第四期複製個体、位階武器型、消滅確認しました。いかがなさいますか、博士」

『あれを討つ魔益師か……条家かね？』

周囲には少女しか存在していないというのに、どこからともなく男の声——にしては少々高い声だったが——が問う。

よく見れば、少女の整った耳には通信機と思しきものが装着しており、遠方の誰かと会話しているようだった。

「はい。能力から察するところ、二条と九条……それと、」

少女は一度口を噤んだ。どう伝えようか逡巡するように。

機械のように話す少女が、言葉を詰まらせるなど酷く珍しいことだった。それがため、遠くのどこかで男はいぶかしむ。

『どうかしたのかね?』

「いえ……魔害物と戦闘を行った魔益師は四名。先ほど挙げた条家の二名に加え、直接的な戦闘行為に関与せず能力が不明の者がひとり、条家の能力に該当しない能力を使う魔益師がひとりいました」
『ふむ? 前者はまあ、後方支援の条家だったとしても——もうひとり魔益師がいたのかね?』

「はい」

『つまりは、条家とまた別の魔益師が共闘したということかね?』

「はい」

『それは……面白い』

条家が他の助けを請うなど、前代未聞だ。

条家は条家のみで完結している——それが条家の矜持であり、誇張でもなんでもなく事実としてそうだ。

条家はどこよりも優秀で、だから助けは求めない。求める必要性がない。組織として、一族間で全てが賄われている。

いや、逆に助けを請われた可能性もあるか。男は思い直す。

しかしそれだって驚愕である。

組織として条家と繋がりのあるところなどありえない——ならば

一個人が、条家と接点をもっているということになるのだから。

『一体そいつは、どうやったのだろうねえ』

私でもできないことだったのに……。男は少しだけ残念そうに口の中で呟いた。

ふふ、と細く笑ってから、男はまた思考回路を戻した。

『それにしても自信作だったのだがねえ、壊されたか……。』
「……………」

わざとらしいくらいに落ち込んだ声音に、少女は無言を選択する。少女は知っていた。この男が芝居がかった言動をするときは、酷く楽しい時なのだ。

自分の“父親”が、楽しがっているところに水をさすのも無粋というもの。少女にもそれくらいのことは思考しえた。

『条家か……その魂の特異性、いずれ調べたいと思っていた。くく、いい機会だ。意趣返しも含めて、ちよっかいをかけてみようかな?』

楽しそうに楽しそうに、男はくつくつと笑う。

まるで明日は遠足だと母親に語る子供のように無邪気に――けれど無邪気だからこそその酷薄さをたたえて。

第十話 回想

嶺盟学園、放課後の二年一組。

そこにはなにやら不機嫌そうな少女がひとり頭を悩ませていた。

少女の名は加瀬 雫。

退魔師にして高校二年生な少女である。

「はあー」

なんとも——ここ最近は様々なことが起こり過ぎた。

いつものように依頼を受けたと思ったら、討伐対象は武器を扱う魔害物で。

負けて死に掛けたと思ったら、ニヤけた最悪男が通りすがって無視されて。

そのまま死ぬのかと半ば諦めていたら、今度はなんと条家十門の九条が助けてくれて九死に一生を得て。

最悪男と再会したと思ったら、条家の総会に出席して。

何故か、この口が勝手に動いて啖呵を切ってしまい——今思い出しただけでも震えがくる。

適当男と協力して、武器を扱う魔害物を倒した。

……二日である。

たったか二日、全て四十八時間内での出来事である。

過酷というか、酷い。今までのどの二日間よりも濃厚な二日であり、そのために大変苦労した。

まあ、いい。

それはもう、終わったことなのでいい。

雫は前向きな少女だった。

それよりも今は、討伐し終え、その後に言われた言葉について思い悩もう。それこそが、現在雫の頭を煩う事項だ。

倒したその後、九条の屋敷に戻ると、静乃に満面の笑顔で迎えられ手厚く治癒を施された。

ただ――

害なす魔により構成された武器で、斬りつけられた傷。それは単に傷としてだけでなく、魂を穢す。

魔害物を構成しているのは害なす魔であり、その害なす魔とは人の魂にとって毒にも等しいものなのだ。害なす魔は触れた魂を穢す。益なす魔を殺す。

人の魂――益なす魔の結晶にして生成炉のようなもの――に傷から害なす魔が侵入し、穢すことで機能を阻害、最悪魂を喰らって死に至らしめる。実はこれが、近年の退魔師たちにとっての最大最多の死因なのだ。

あの時、浴衣は簡易な治癒で傷のほうは塞いで造血までしていたが――害なす魔の浄化には、九条の能力でも少々手間がかかる。まあ、逆に言えば手間をかければ癒せるということ。通常の治癒師には、かなり厳しい治癒行為であるのだが、そこは九条の流石。

だが、雫の侵蝕度は高過ぎた。

最初に静乃に救われた時にも同じ魔に蝕まれていたのがさらに悪かった。傷を癒しはしたが、一日二日で魔のほうは浄化できておらず――軽度の侵蝕なら基本的に無視して、自己治癒に任せておくものなのだ――今回の深手と相まって深刻な状態となったのだ。

深手――魔害物の魔の結晶たる小太刀が、骨にまで届いた。しかもその小太刀は、その場で構築された――おそらくこちらの強さにあわせて強化までされた――変な言い方、新鮮な刃であったのがまた悪かった。

ある程度は九条家当主の最高峰の治癒により浄化できたが、根深く侵蝕した部分はどうしても雫自身の抵抗力に頼らざるを得ない。時間をかけて、自然治癒を待つ他ない。

ただし、雫自身の耐性でなんとかなりそうならいいが、害なす魔が自己増殖をする場合もある。そうなったその時は――

「迷わず、また九条家にいらっしゃって下さい。痛みを和らげるにとくらはできますし、増殖したのなら時間をかけてわたくしが治癒します。

勿論、そんな用事などなくても、客人としていつでも歓迎いたしますけどね」

静乃は最後にそう言って笑い、雫を見送ってくれた。
その横で、

「しっしっ、もう二度と来んな、ばーか」

といった表情で――表情だけで何故か鮮明に言葉まで理解できた――羽織が親指を下向けていたが、雫は無視した。

というか、羽織。こういった小さなエピソードを思い出せばただ、小悪党であり嫌な奴である。

全く救いがたい。

「しかし――」

ふと、雫は思う。

よくも静乃はあそこまで全幅の信頼を寄せているもので、浴衣はあんな最悪男を好きだなんて言えたものである。

静乃は言うまでもなく、浴衣の性格も静乃寄りで善性だというのはわかっている。が、そうであったとしても、あの無防備な好意は

どういったわけなのだろうか。

不思議である。

いや、違うのか。

羽織の態度が。

静乃や浴衣の前では常に使用人モード、親切親身なのだろう。というか、主と認めているのだけか。

そりゃあ、雫とは受ける印象が百八十度違っても道理か。

……………。

……道理か？

盲目でもあるまいに、羽織の悪性が見えないなんてことはないだろう。自分たち以外に優しくない羽織のことも、ふたりは知っているはずだ。

それでもなお、あの信頼で、あの好意なのか？

もしそうであるとしたら——どうにも解せない。

どうして、あの最悪にそんなポジティブな感情を抱けるのか。雫にはわからない。

わからない。

わからないといえ——もうひとつある。

こちらはその最悪男の心境についてなのだが。

——何故、羽織のような悪党一步手前が、誰かを主と敬うのだろうか？

確かに九条 静乃、浴衣両名は心服するに足る人格者であると言えなくもないだろうが。

あの、羽織である。

目の前で命の危機に瀕した少女がいて、その助けを無碍にも断る、あの男がである。

「……………」

思考が逸れるような、嫌な記憶を思い出した。

雫は気付かないくらい少し、目線を下げた。なにを見ている、というわけではないが、気が落ちると視線も落ちるものなのだ。

雫は、羽織に対してもう怒ったりだとか積極的な感情は抱いていなかった。

そんな感情が意味をなすような相手ではないし、怒りとはそう長続きする感情でもないのだ。今ではもう、敵意もほとんど薄れている。

しかし赦してはいなかった。

決して。決して。

——死にゆく恐怖。

——見捨てられた絶望。

——過ぎた夜の寒さ。

絶対に、忘れたりはしない。絶対に、赦したりはしない。

別に殺したいだとか不幸になればいいだとかは思わない、恨みや憎悪を向ける怨敵とも思わない——ただ赦せない人間であると、雫はそう認識している。

その感情の根深さは、羽織に対してのみ二人称が未だに貴様としていることから見て取れる。

暗く澱んだ負の念というわけではない。これは冷たく硬い、純粋な感情——

なんか、気に喰わない。

幼稚といえば幼稚な、子供っぽいひとことで全てが集約できる気がした。

雫は赦さず、羽織も赦しを乞わない。互いが互いを気に入らず、

認め合うことなどない。けれども無関心ではなく、憎悪もない。そんな奇妙な関係。きっと雫と羽織にある関係性は一生涯、そのままなのだろう。雫はなんとなく、そう思った。

「なーに物思いにふけってんのさー、雫」
「……ん？ ああ、奈緒か」

ころころと変わる思考の濁流に沈んでいた意識を、間延びした声が拾い上げた。

視線を声の方向に定めると。
やはりというかなんというか、藤原 奈緒がそこにいた。

藤原 奈緒——腰元まで伸びたくせっけな茶髪が特徴的で、瞳にはやる気が見えず表情は緩んでいる。そんな、常に間延びした口調で話す欠伸の似合う少女である。

彼女は雫のクラスメイトであり、友人だ。

追記として、彼女もまたこちら側の人間——魔益師だ。

雫にとって数少ない魔益師の友人、それが奈緒だった。

「いや、最近はいろいろあってな」
「んー？」

思わず誤魔化すような言葉がでてしまい、奈緒はそれに疑問符を浮かべる。

いつも真っ直ぐに話す雫である。曖昧な言葉を選んだことが少しだけいぶかしい。

「ま、どーでもいいけどね」

とはいえ、あまり興味深いわけでもない。奈緒はすぐに疑問を捨

て去った。

今はそうではなく、話しかけた理由を思い起こす。

「そうそう、雫、なんでもあんたに用があるって後輩の娘が来てるよ」

「私にか？」

「九条 浴衣だってー……もしかして、あの九条だったりするの？」

教室の出入り口を指し、奈緒は心なし小声で付け加えた。

雫は指のほうに目をむけ、たたずむ浴衣と目があう。すぐににっこり笑顔を浮かべる少女は、間違いなく九条 浴衣だった。

微かに笑って返し、立ち上がりながら奈緒に答える。

「ああ、条家十門が一家だ」

「ほへー。どこでそんな娘と知り合ったんだか」

疑問な言葉とは裏腹、別に興味なさそうに奈緒は伝えたからー、と言って自分の席に戻っていった。

奔放な態度だが、雫はいつものことだと気にせず浴衣のほうに歩みだす。すぐに正面にまでたどり着き、声をかける。

「どうした、浴衣」

「いえ、その……怪我のほうは、大丈夫ですか？ わたしなんかの治癒じゃあ、怪我は治せても害のほうは……」

俯き気味に、けれど雫の顔色を窺うように時折視線を上げたり下げたりしながら、浴衣は言った。

どうにも、心配をかけてしまっているようである。常に人懐っこい感じかと思ったが、あまり打たれ強くはないらしい。いや、これもまた彼女の優しさなのか。その心根の優しさが、他者の不幸を許

容できない。それが自分の関与したことなら、なおさらに。

雫は苦笑した。思いつめすぎている少女に、大丈夫だと告げるように。

「無論だ。痛みもない。あの短時間でよくもここまでできたものだと感心するばかりだ。浴衣はすごいな」

「いえ！ わ、わたしなんてまだまだです！ 浄化のほうが全然ダメで、やっぱり母様任せになってしまいましたし……」

意図的に害ではなく怪我の治癒に話を持っていき褒める雫だったが、浴衣はすぐに悪いほうへと沈んでしまう。

しゅん、とうな垂れる浴衣がどうにもいたたまれず、雫は強めに語調を整える。

「そういうものは、比べるものじゃないさ。私は浴衣に助けられた。浴衣は私の期待した以上の力を発揮した。それで、私はすごいと思った。謙遜はいいが、否定はしないでくれ」

「あ……はい」

「魔のほうも、そんなに深刻ではない。確かに少し頭痛はするが、その程度だ」

実際は、魂からのなんとも言えない痛み——ともまた違うような気がするが、ともかくは不快で不要な嫌な感覚——が全身を駆けているが、雫は完全な強がりで、浴衣への心配を削ぐための笑顔を咲かせた。

それを見抜いたのか単に心配性なのか、浴衣は言い募る。

「本当ですか？ わたしに気を遣ったりしてないですか？」

「あっ、ああ、嘘じゃないぞ」

さつと目を逸らした。

雫もまた、嘘が果てしなく下手であった。

嘘を見抜く目――羽織の影響でなにげに肥えていた浴衣は、即座に見抜く。提案のように、その実は促すように言う。

「むう、でも一応、母様に頼んだ方がいいんじゃないですか？」

「いつ、いや、本当に大丈夫だ。昨日今日で……」

「今からわたしと一緒に九条家に行きましょう、加瀬先輩」

「あー」

いつになく強引な浴衣に、雫は困ったように視線だけで天を仰ぐ。こういう時に諫める羽織が必要だというのに。いてほしい時にいなくて、いらない時にばかりいる。本当にはた迷惑な奴だ。

完全に横にそれた思考で、さらには冤罪だったが、雫は心の中で羽織を攻め立てることで精神の安定を図っていた。

視線を下に戻すと、そこには浴衣の真剣そのものといった瞳が写る。心配だと、その瞳は叫ぶように見えて。

「わかった……わかったから」

いらぬお節介だ、と言って振り払うことなどできず、雫は観念したように頷いた。

実際、体調は万全とはいえず、数日以内に行く予定ではあったのだ。断ったのは、単に心配性な浴衣を見て、これ以上心配をかけるのが忍びなくなっただけだ。さきほどは色々と思考が逸れに逸れたが、学校で思案していたのは、そもそも帰るついでに寄ろうか迷っていたからだし。

浴衣はなにが嬉しいのか、にっこりと花咲く笑顔を浮かべる。

「ありがとうございますっ」

「あつ、ああ」

ここでありがとう、か——これが羽織の力説していたいい人パワーというやつらしい。雫は心底から痛感した。

——これはヤバイ。

なぜだか断れない。断れる気がしない。断ってはダメなのだと確信的なまでに、自己の良心が叫ぶ。

まあでも、純粹なる善意なのだから、最終的にはいい方向にいくのだろうと、雫はそう思うことでこの思考を打ち切った。

ちよっぴり敗北感があるのは、きつと気のせいだ。

雫と浴衣、ふたりで九条の屋敷へと向かう道程。

会話は絶えず、仲睦まじげに歩く姿は姉妹のようにも写ったかもしれない。

浴衣は身振り手振りを加えながら、楽しそうに様々なことを話す。雫はそれを受けて相槌をうち、時に切り返し、また興味深そうに唸る。

どうもこのふたり、相性がいい。浴衣が話題をあげ、雫が広げる。会話のテンポが上手いこと噛み合っているのだ。

とはいえいつまでも会話が続くわけでもなく、話題が尽きかけて、ふたりの口数が減ってきた頃。

不意に、雫は真剣さを仄かにチラつかせながら話題を放り投げた。先ほどから、訊いておきたかった話題を。

「そういえば、浴衣」

「なんですか？」

「浴衣は羽織が好き、なんだったな」

「はいっ、大好きです！」

「……………」

迷いの欠片も見当たらない眩い笑み。

その笑顔を壊してしまいそうで、一瞬だけ躊躇ったが、雫は先ほどから考えていた率直な意見を口にする。

「これは単純な疑問なのだが、あれのどこに好きになる要素があるのだ？」

言葉の通り、単純な疑問である。

さっきも考えたが、浴衣とて馬鹿ではない。雫や条への態度だって目にしているし、長いことともにあるのだ、もっと酷い羽織の姿だって知っていることだろう。単に自分にだけ優しいから、それで好きになるような——好きの形がどういうものであるかは定かでないが——狭い視野の少女でもあるまい。

つまり浴衣は、最悪な部分の羽織も含めて好きなのだろう。それが、どうしても雫には理解できないのだ。わからないなら、その当人に問うてみるのが手っ取り早い。

浴衣は微苦笑して、けれど別にうろたえた様子もなく返答する。

「羽織さまには好きになる要素はないと、そう思いますか、加瀬先輩は」

「あっ、ああ」

その返しは雫にとって予想外で、どうにか頷けただけ。本当はさらに続けるはずの言葉があったのに、詰まらせてしまう。

詰まった雫のかわりに、浴衣が言葉を続けた。

「羽織さまはなんというか、わたしや母様を別として……人を助けません」

「そうだな」

物凄く身に覚えがあった。

命の危機だというのに助けない。人類の敵との戦闘だというのに助けない。本当に、いい人とは対極な男だ。

浴衣は雫の即答になにも言わずに空を見上げる。

「人を助けない——それが羽織さまの信念のようなものです」
「人を助けないことが、信念だと？ そんなの、最悪じゃないか」
「そう思いますか？」

「思う」

断言できる。

そんなのは信念という綺麗な言葉に全くそぐわない。ふざけているとは思えない。

これが羽織の口から出た言葉なら、雫はその顔をぶん殴っていただろう。

そんな猛った様子に、浴衣はくすりと笑みを漏らす。場違いなまで童女のごとさあどけなさで。

「ふふ、羽織さまはそう思われたいようですけどね」
「なに？」

一体全体どういう意味だ。

まさか偽悪者だと言うつもりか。そんな言葉で正当化しようとしているのか。本心ではいい人間であるが、悪者を気取っているのだ

と、そんな戯言で誤魔化すつもりか。

言うと、浴衣は首を振る。とんでもないと。

「羽織さまのあの性格は、騙ったものなんかじゃありませんよ。心の底から、魂の芯から羽織さまは羽織さまです」

「じゃあ、どういう意味なんだ」

「……………。いえ、やっぱりやめておきます。わたしがなにを言っても、加瀬先輩にはたわ言にしか聞こえませんよ、きつと」

「むっ、むう」

「羽織さまが弁解しないなら、わたしもしません。わたしは羽織さまが好きです。加瀬先輩は嫌いなかもしれませんが、それでいいんです」

適当にあしらわれたような気がして、拗ねたように雫はそっぽを向く。閉ざされた口を開かせる法が思いつかない自分が恨めしく、負け惜しみのように口から声を発する。

「なんだか、慣れた口調だな」

「はい、慣れてます。羽織さまと会った人は、大体みんな同じことを訊いてきますから」

「それで全部、同じように返答しているということか……」

なんともそれは、大したものだ。

誰かから否定されながら、想いを曲げないでいるというのは、存外に難しい。

雫は結構ヒートしてしまっただが、それでも浴衣は委細熱くならずに、けれども少しも退かなかった。やんわりと、こちらの意見は無意味だと告げられた。

そう。浴衣の意志は既に完成し切っていた。誰かになにを言われなくても、浴衣は毛ほども気にならないのだろう。

どこことなく静乃に感じたのと同じ強さを、浴衣からも感じた。方向性は違うが、やはり親子なのだと改めて思う。
凄いい親子だな、と雫は呟こうとして。

——踏み出した一歩で、世界が変容した。

「え？」

「なんだ……？」

唐突に周囲の風景が色を失い、人の気配が絶無となる。吸い吐く空気まで入れ替わってしまったようにも感じ、一歩前と今ではそのものが世界が違うのだと、魂が言っている。

いきなり過ぎてふたりは驚愕したが、すぐに平静を戻す。魔益師なのだ、常識はずれの事態にはそれ相応に慣れている。

たとえばこの感じは——

「魔害物の、結界ですか」

「私か浴衣の魂に寄せられたのだろうか」

苦そうに雫は吐きながら、魂魄を具象化、日本刀と物質化し握り締める。

前方正面に、感じる澱んだ魂——害なす魔の物。

雫は腰を落とし、魔害物を鋭い眼光で睨みつける。

その魔害物は、鋭い眼光を受けて嬉しそうに嬉しそうに笑い出す。大口を広げ、歯を打ち鳴らし、愉悦を織り交ぜた——狂気の笑みを浮かべる。

「カタカタ」

「——え？」

それは――二度と聞かはずのない、笑い声だった。

第十一話 信頼

「嘘、だろ……」

雫の声はかすれていた。

信じられない情景に、喉が上手く機能しないせいだ。脳が拒んで認識しないせいだ。

目の前の敵。

それは見覚えのある、最悪の敵。

総身を黒いペンキにでも塗りたくられたような、漆黒の身体をした人型。ただし人ならば頭部がある箇所には、獅子を模した頭が鎮座していた。両の手に握るは短くも刃の威容をなくさない小太刀が二本。

ああ。

ああ、それは。

ああ、間違いようもなくそれは。

「武器を扱う、魔害物……?」

しかしそれはおかしい。

魔害物の姿かたち、形質、特徴は一個体ごとにまるきり違う。つまりところ同型の魔害物と偶然二日連続で遭遇するなどありえない。確立としてはゼロと言っていい範囲だ。それに武器を扱う魔害物という存在自体が、一体いたただけでも驚愕だったのに、そんなに多くいるわけがない。

万が一にも、それは考えられない。
だから、やはり。
考えたくはないが。

「倒し損ねた、ということか……?」
「そつ、そんはずありませんよ!」

浴衣がそう言うのももつともだ。

条の拳は確かに魔害物を叩きのめし、その身の消滅はあの場の全員で確認したのだ。

だが。

「だが、こうして目の前に奴はいる。私としても消滅をこの目で見た手前、信じられないが……いや、違うな。今はそんな瑣末なことはどうでもいい」

「それは……はい、そうですね」

理由がどうであれ。この魔害物が昨日の魔害物と別であれ同じであれ。

現状においてはどうでもいい。

この魔害物によって隔離された場に、雫と浴衣のたったふたりしかない。今はそこに焦点をあてるべきだ。

浴衣は魔害物を刺激しないようにポケットから携帯電話を取り出し、ディスプレイを確認する。

「ケータイも圏外です……羽織さまに連絡もできません」
「くっ、私たちふたりでどうにかするしかないということか」

増援も、以前のような都合のいい登場の期待もできない。
つまりは、この場はふたりで切り抜けるしかないということ。

魔害に侵された退魔師と、戦闘に向かない治癒師のたったふたりで。

「カタカタ」

渋面に染まる雫を嘲笑うかのごとく、武器を扱う魔害物――獅子頭は歯を鳴らす。

その仕草も、完全に昨日の魔害物と被る。

となると、強さも同じと考えるべきなのだろう。

それは不味い。不味すぎる。

獅子頭を相手に雫がサシで戦った場合、惨敗しているのだ。惨敗し、死に掛けたのだ。

今の状態では勝ち目がない。

それに加え、浴衣がいる。魔益師といっても、結局どこまでいつでも治癒師でしかなく、戦うことができるなどは到底思えない。少々、酷い言い方だが、足手まとい込みで雫は勝ち目のない敵と戦わなくてはならないということだ。

どうすれば……。

雫は思考力に優れてはいたが、決して発想力には秀でていない。つまり、戦況の分析はできても、逆境への対抗策は思いつかないのだ。

「わたしが囹になります」

「な……に？」

だから、そんな言葉が浴衣から発せられて、驚愕と期待が最初に沸きあがる。

「わたしが魔害物を引き付けておきますから、そこを先輩の風で討ってください」

前回の戦闘を見る限りにおいて、雫は近距離による剣術での戦闘は必ずしも得手とはしていない。

だが、中距離遠距離の風、あれは素晴らしい威力にして速度だった。二条の一撃に耐えられる魔害物に対して、一定以上の成果を發揮したのだから。

雫は剣術師としての腕は一流とは呼びがたいが、退魔師としては充分一流を名乗れる腕前ということだ。

なればこそ、雫には後方で十全に力を溜めてもらい、一撃を放ってもらおう。それで打倒しえる――とまではいわないが、大きな隙を作るくらいはできるのではないか。結界に割いた力を、減衰させられるのではないか。

そういう作戦だ。

「馬鹿なことを！」

だが、脳が浴衣の言を認識した途端に、雫は拒否を言っていた。

「そんな、そんな浴衣にばかり危険を負わせる作戦などできるはずがないだろう！」

その通りだ。

まず大前提として、雫が力を溜めなくてはならない。そして、その時間を稼ぐためには誰かが真っ向からあの魔害物と戦わなくてはならないということだ。

それを非戦闘的な条家にして、魔益師の中でも非戦闘的な治癒師である浴衣に強いるだと？

そんなの無理に決まっていた。

非力さは先刻承知、浴衣は俯く。

「わたしは……昨日なにもできませんでした」

その非力さのせいで、ついていくと無理を言っておきながらなにもできなかった。

雫や条が命懸けで戦っていた時。羽織が直接的ではないにしても、勝利に貢献してみせた時。

自分は、なにをしていたのだろうか。

「なにもしていません。わたしはなにも、できませんでした」

「！ そんなことは――！」

「ありますっ！」

雫が否定を言いかけるも、それを強く遮る。

それは自己の不甲斐無さを嘆く叫びであり、決意のための鼓舞であるのかもしれない。

「わたしが、引き付けます。先輩は、一撃をお願いします」

浴衣は持ち前の意志の強さでもって、自分の考えを曲げない。

その自己犠牲にも等しい考え方を、雫は痛々しく思う。どうしても、自分を大事にしないのだ。

「どうして……」

心底困り果て、どこか泣きそうにも見える雫の弱弱しい声音に、浴衣が慌ててしまう。

「あっ、あの、大丈夫です！ えと、これでも体術は羽織さまに仕込まれていますからっ」

「羽織に？」

いつでも傍にいてあげられるわけではない。どうしたって自分ひとりで危機に直面することはあるだろう。

だから。

羽織は浴衣に生き残る術を小さな頃から付きっ切りで指導してきた。

脅威を目の前にしても生き残れるように。絶望を敵にしても時間を稼げるように。

ゆるく息を吐き出し、浴衣は腰を落として構える。

「たぶんですが、時間を稼ぐくらいはできます——いえ、やってみせます」

決意のように、その白く小さな拳をグッと握り締めた。

その構えから、確かに冗談でもなくある程度は使えるようだが……雫は絶句してしまう。

既に浴衣は、自分が囧になることを確定していた。囧という自分に利はなくてただ危険極まる行為をなすと、身勝手と言ってもいいほどに決意していた。

我知らず震える唇で、雫はどうかこうにか言葉を紡ぎ出す。

「浴衣は……何故、出会って間もない私をこうも信用できるのだ？」

出会ってまだ二日。ちゃんとした会話など、今さっきのはじめてである。そんな相手のために、自ら囧を買って出るという。

命を預けあうような戦場にも共に出たとはいえ、浴衣の信用度は高すぎるように思えた。

猜疑の心はないのだろうか。

逃げるとは、思わないのか。浴衣を見捨て、雫だけが生き延びようと走り出さんと、思わないのだろうか。

たった二日の関係性だ。普通に考えて薄氷のように薄く、木綿のように弱く、泡のように脆い信頼しかないはずだ。

なのに浴衣は囿になると言う。

静乃が言ったなら、驚きはしない。あの善人ならば確かにそれくらいは言うだろうと思う。

だが、浴衣のこれは静乃のような――羽織に言わせれば人間を逸脱するほどの――善意というわけではあるまい。

確かに善性を宿す心優しい少女ではあるが、そこまで極まった、違った思考回路をしていない。それは先までの会話で充分知れる。言うなれば浴衣にあるのは、等身大の善意だけのはずだ。

そして、たった二日の信頼関係で、囿をするなんてのは等身大の善意を超越している。

ならばそれには理由があるはずで。

信頼には、原因があるはずだ。

静乃のように理由もなく人を――言ってしまうえば信じたがるような性質はもっていないのだろうか。

浴衣は少しだけ困ったように苦笑して、けれども澱みはなく口を開く。

「それは……羽織さまが、疑っていないからです」

九条の人間は、全員漏れなく間違いなく――お人よしだ。

直系ふたりは言うまでもなく、傍系の者も、あまつさえ使用人さえもどうにもこうにも善人揃いときている。

屋敷内に善性を付与する謎の空気でも充滿しているのではないかと、少々真剣に疑ってしまいそうな有様である。

だから羽織は、屋敷で唯一といっていい悪性だった。

そして悪意というものは、なにも根滅すればいいというほどに、

世界は綺麗ではなくて。

善意には悪意をかえすような、悪意が善意を押し殺すような、そんな世界だから。

だから、お人よし集団の九条家はきつと酷く弱くて脆い。

そうになると、羽織はこのお人よし集団の中でも汚れ役を自動的に引き受けざるを得ない状況となってくる。弱くて脆い九条が、弱くて脆いままでいるために。

とはいえ、それは善意で引き受けているわけでは無論なく、というか素で汚れ役な性格なので羽織にストレスはないのではまり役ではあった。

つまるところ、なにが言いたいのかというと。

「羽織さまが疑い、羽織さまが警戒し、羽織さまが告発します」

九条の人間が、信じるに足る人だけを信じられるように。

信頼に信頼が返ってくるような人だけを、信頼できるように。

善性に微かの悪意の刺激も混入させないように。

羽織が徹底的に疑心する。悪意の欠片も残さぬように疑いて怪しむ。

あの嘘の塊のような人格だ、嘘を見逃すような真似はしない。

これまで、幾度も数え切れぬほどに人助けを敢行し続け——実は雫を助けたことだって珍しくはない——それでも悪意が九条家を襲ったことは一度もない。

純粹にありがとう、そう言って別れる者たちばかりだった。何故ならそれ以外は、羽織が全て処理していたのだから。

「羽織さまが明確な敵意を示さない、わたしたちに警句を告げない——それだけで、加瀬先輩は信頼に値する人です」

浴衣は、信頼する羽織の判断を微塵も疑ってはいない。一切の疑

念の余地もなく、羽織を信じている。

だから、雫にも同じだけの信頼を寄せることができる。やはりどこまでもお人よしの思考だが、その論拠はどこか打算的なものに見える。

ベースは善性の化身たる静乃だが、育て上げたのは悪性の権化たる羽織である。九条 浴衣の人格、一筋縄ではいかないのかもしれない。

雫は深く深く首肯する。ああ、納得だといわんばかりに。

「……信じる者が疑わない、だから信じれる、か。疑うようなことを言ってすまなかった」

「では、行きます！」

「って、いやそれはダメだ！」

それとこれとは話が別。雫は制止を叫んだも、浴衣のほうが一歩速かった。

跳躍のような走法で、さらりと魔害物と隣接。動作は速くないが、軽やかで技巧的な所作といえた。

「！」

驚いたのは獅子頭。

視認はできていたが、自然な歩法ゆえに気にかからなかった。いきなり目前に現れたような印象だ。

咄嗟に振りおろす斬線。浴衣は脱力した体でその太刀を引きつけ、ゆらりと右斜め前方に踏み込み避ける。

獅子頭の左手が弾かれたように振りあがり、視線も向けずに横の浴衣へと太刀が迫る。

右足を軸に、浴衣は旋回。くると回りながらさらに前方へと踏み出すことで、小太刀を避ける。一回りすることで獅子頭の背後を

とることに成功。直後、背より生え来る第三の腕。

前回の戦闘で見た技——浴衣は驚くこともなく、また旋回。まるで舞踏のように、華やかに獅子頭を翻弄してみせる。

「カタ」

一度だけ齒を鳴らし、獅子頭は振り向き様に小太刀を振るう。

一步後退していた浴衣には、刀尖が目前で通り抜けるのみ。

だが獅子頭と正面で相対してしまった。獅子頭は、ここぞとばかりにギアを上げる。浴衣の細身を捉えきれぬ速度へと加速する。

——離れて見ていた雫には、銀閃だけしか見えなかった。

乱剣疾走。

牽制もなにもなく、全て命を狙う殺人剣。それが瞬く間に七撃——掛ける二！

計十四斬撃を、正面から避けて見せる。ゆらめく柳か、遊覧する雲のように、いやそれとも、ステップを踏む鮮やかなるダンスのように——避けて避けて避け倒す。

「まさか！」

雫は刀を手首で回しながら、その現実には驚倒を隠せない。

当たり前だ。速度が全然違うのに、高速に対抗して浴衣はいつそ緩やかだというに、浴衣は生きている。

なにが起こったというのか。なにをしたというのか。

——羽織は浴衣を鍛えた。

とはいえ、運動能力に特別優れているというわけではなく、精神性も戦闘に不向きな浴衣だ、真っ向から切った張ったの立ち回りはできない。

だから、浴衣は立ち向かえる者ではあっても、決して戦闘者では

ない。

そもそも羽織から教わったのは戦う術などではなく、生き残る術。敵を打ち倒すことなど元より思考外、とかく死なないこと、怪我しないこと、痛みを負わないこと——それにのみ専心する。

だから、攻め立てるようなことはしない。あくまでも回避に徹して、警戒観察を貫き、死から遠ざかることにのみ終始する。

簡潔一言で言うと、回避の方法である。

身体はまず、ひたすらに舞踊の動きを叩き込まれた。人間生物において無駄の少ない動きを叩き込まれた。

そして、念頭に置くべき基本的かつ重要なポイントのふたつを、無意識の条件反射となるまで頭に刷り込まれた。

ポイントのひとつは、攻撃の誘導。

自ら隙をさらけ出し、そこを狙うように仕向ける。視線や重心を操り、無駄な攻めを誘発して空回りさせる——相手の挙動の掌握。

またもうひとつは、回避の先だし。

稼働の始発を見て、自分に届く様を先読みする。視線や筋肉の動きで狙い目を察し、安全圏に身体を置く——自己の行動の調律。

そのふたつを可能にするのが、羽織により幼少より鍛え上げられた見定め、見極め、見切る目。

先ほどの斬撃乱舞——半数以上が無駄振りで、もう半数は太刀筋が平易だった。

いくら武器を持ち出しても、やはり獣。誘導が容易い。

鋭く尖る刃を作り出そうとも、剣を握る手を構築しようとも、高速で振るう臂力を擁しようとも、知能が低くては宝の持ち腐れに過ぎな——

「っ!？」

バックステップで距離をおいた途端に、滲む血色。

右手の甲、肩、頬——気付けば三箇所で浅い傷が描かれていた。

「完全に、避けきったと思ったんですが……」

「カタカタ」

「やっぱり、手ごわいですね」

浴衣の頬に、嫌な冷や汗が伝う。

喉が干からびて、緊張に膝が折れそうだ。

浴衣だって実戦経験はある。あるが、治癒師という役柄、サシなどというシチュエーションにはそうそう出くわさない。たったひとりで自分を容易に殺せる敵と正面切って相対した経験は、残念ながらこれをはじめてである。

震える手のひらを握り、手汗を感じる。

「恐がるな……！」

小声で、誰にも聞き取れないように呟く。

恐怖にあっては死するのみ。

わかっていても震えるこの身の弱さが情けなかった。

この脅威に、雫や条は怯えず怯まず向かっていったのか。それはどれほど勇ある行為なのか。

ならばやはり、ここは浴衣の戦場だ。

「わたしだけが、逃げたりはできませんっ」

声には力が宿り、魂には形が生じる。

魂魄の具象化。

浴衣の細く白い人差し指に、魂が物質として巻きつく。

それは指輪。雪を溶かしたような白銀の円環。魂で構成された唯一無二の金属の輪。

九条 浴衣の魂の具象武器。

優しく柔らかい——笑顔のように朗らかな微光を指輪から発すること、速やかに浴衣は自身の傷、それに裂かれた衣服をも癒す。浴衣は戦闘者ではないので、痛みへの耐性がかなり低い。だからどんな軽傷でも所作の障害となる可能性があった。

そのため、処置は手早く過剰なほど。

九条の能力“存在の治癒”は強力だが、万能では無論にない。下手に攻撃を受ければ、発動の間もなく意識を失う恐れもある。

どうしたって、浴衣は戦闘向きではないのだ。

だけどそんなことはどうでもよく。

「まだ、わたしは戦えますっ」

「カタカタ！」

歡喜に歯を見せ付ける獅子頭は、決意の声に応えて浴衣へと駆け出した。

「……っ。……っ！」

その戦闘風景を、ただ眺めることしかできない雫は唇を噛み切るほどに噛み締めていた。

こんな。

こんなにも手出しができないという状況は辛いのか。ただ見ているだけの状況は痛いのか。

どこまでも歯痒く、果てしなくもどかしく、どうしたって心配だ。戦っている者は、そういう意味では気楽だ。戦闘に全神経を集中しているのだから。自己の身なのだから。

自分じゃないからこそ、辛くて痛い。なにもできない自分が不甲斐無くてしょうがない。

どうしようもなく不安で、胸が破けてしまいそうだった。

以前の戦闘――浴衣はこんな心情の中で耐えていたのかと思うと、雫は愕然とする。

自分は今すぐにでも走り出し、加勢したくてたまらないというのに。待ってなんていられそうにないというのに。

浴衣は堪えたのだ。

その事実が、ギリギリのところで雫の足を止めていた。

雫は目を逸らしたい気持ちを抑えつけ、現状を俯瞰する。

浴衣の卓越した回避動作にのみ特化した体捌きは踊るように軽やかで、一切の掠り傷も受けやしない。

それでいて魔害物の意識を引きつけ、引き受け、時間を稼ぐ。

しかし、一歩間違えばそこに死はある。

雫は踏み出しそうになる自分を叱咤し、自分の役割を果たせばそれで終わると言い聞かせる。

この現状を打破するために、雫は自分の仕事を遂行しなくてはならない。

浴衣の作戦通りに、魔害物を打ち倒すだけの一撃を用意する。それが遅れば遅れるほどに、浴衣を危険に晒すことになるのだ。

――先ほどから、雫は刀を手首でくると回している。

これは、刀で空気を掻き乱すことで僅かな風を作り出し、それを拡大、集束しているのだ。同時に周囲の風も集め、刀へと宿す。

時間をかけていいのなら、これが雫にとって最大の攻撃力を生む戦技だった。

それが今の雫にはじれったくて仕方がない。焦って上手く制御できない。

その上、魂がブレて能力がいつもより鈍い。綺麗にまとまらない。害なす魔が魂の活動を邪魔しているせいだ。もとより焦っているのにそれでさらに焦って、また時間がかかるという悪循環。

「早く、早く、早くっ」

思っても思っても、それは逆効果。

雫は自身が焦っていることにさえ気付かず、常時より遙かに溜めに時間をかける羽目となる。

「はぁ……はぁ……はぁ……っ！」

数分間にも及ぶ一方的なこの戦闘で、驚くべきことに浴衣に傷はない。高速の刀を繰る魔害物相手に、浴衣は確かに善戦していた。

だが、呼吸が荒れ、発汗は激しく、制服はところどころが裂かれていた——常に動き回り、能力を何度も何度も行使したせいだ。体力と気力が疲弊し切っていて、制服がそのままなのも、服まで再生する余力がないのだ。

見かけからして劣勢だった。

魔害物には疲労などないのだから、このままいけば敗北は必至といえる。

また直接には戦闘に関係しないが——もうひとつ驚愕すべき事実として、浴衣は一度も振り返っていなかった。

一度も、である。

それは雫への信頼の証で、一切の疑念もなかった。

それがまた雫の焦りを助長しているのだが、そんなところまで思考を回せる余裕はない。

「カタッ、カタッ」

リズムカルに振るわれる銀刃。魔害物は自分の攻撃が全て無為となっているこの状況ですら楽しんでた。

避けられ、それでも攻め立てる。距離をおかれ、それでも向かう。すり抜けられ、それでも振り回す。

ここは知恵なきモノの長所がでた。

人間ならば苛立ち腹をたて、無闇に太刀が大振りになり、遂には疲労が訪れ剣速は勢いを失うだろう。

だが魔害物には苛立ちなどというそんな高尚な思考はなく、ただ戦闘行為を楽しんでいるだけ。勝つことが目的ではないからだ。戦うこと自体が目的だからだ。単に戦っているのが楽しいからだ。

そのため剣は常と変わらぬ振り捌きで、乱れなどない。常態と同じか——戦闘への興奮からますます斬撃は研ぎ澄まされている気さえる。

その上、魔害物には疲れというものがない。

何故なら奴らは害なす魔だけで構成されているために、肉体よりも精神が優先されている異形なのだから。特に今回の魔害物はかなり高揚していて、戦闘という愉悦以外は心象に存在しないだろう。そう、自分が動けなくなるなどと、そんなことを一刹那でさえ及びもつかない。それが故に、駆動に限界は存在しない。体力は真実の無尽蔵。

楽しみ過ぎて、斬撃に遊びが入り混じり避けやすくなっているのはせめてもの救いか。

「っう！」

避けたと確信したのに、右肩を裂く一閃。動きが鈍ってきているのか、動きが速くなってきているのか、判断はつかない。

浅い傷。だが痛みは走った。ほんの僅かな隙が生じる。右の小太刀が横薙ぎに浴衣の首を狙う。頭だけ逸らしたのでは回避は不能、ならばと上半身でスウェーバック。

「カタ――リ」

そのまま刃が通り抜ける――と思われたが、停止。

「！」

小太刀の向きを変え、刃は下向く。

上体を逸らしきっているがために、浴衣は動けない。刃は首の真上で、あとは落下すればそのまま命を絶つ。

咄嗟に、浴衣はそのまま後ろに倒れこんだ。

背から着地し、そのまま転がる、

無様なほどの生き足掻く意志は美しく、死への逃避は尊いもの――とかく死ぬなと羽織にはきつく言われてきた。

だから足掻く。転がりながら魔害物から遠退こうとする。

「カタ」

ズン、と脚の一步が進路を踏み締め、回転はぶつかって停止する。魔害物は小揺るぎもせずには笑う。

そこで交じり合う視線。

視線の交錯により、溢れ出す恐怖。掻き立つ畏怖。その狂気に彩られた魔害物の瞳は、それを直視しただけで死すらも幻視する。

諦めるなと心は叫んでも、身体はついてこない。魔害物の瞳に射抜かれた絶望に、脳は諦観し身体の停止を命じたらしい。

そして振り下ろされる銀剣。

絶対に敵から目を逸らすな、死ぬまで目を閉ざすなと言われている

た——恐怖には勝てずに目を閉じて。

「そのまま伏せてろ、浴衣！」

声が、聞こえた。

「っ——はい！」

瞬間、なにかが浴衣の上を通り過ぎた。不可視ではあったが、その力の強大さ故に駆け抜けるなにかを感じた。

それは強力鋭意なる刃を模した、荒れ狂う暴風だった。大型の台風ほどの巨大風力を斬撃サイズにまで体積だけを縮め、密度を極限まで突き詰めた至高の一撃。

攻撃動作をとっていた獅子頭には身じろぎすらできずに直撃し、爆風が破裂した。風の刃が身体の深部まで食い込み、そこで風力の限りを解放したのだ。それは、言ってみれば内側に台風が発生するようなものだ。

外部を斬り砕く刃風と、内部を掻き乱す剛風。二段構えの雫の最大技だ。

膨れ上がり、外へと吹き出さんとする風の乱流に、内から食い潰されてもがく魔害物。やがて風圧の暴威に耐え切れず——魔害物は、消滅した。

「なっ——馬鹿な……！」

そのことに、斬撃を放った本人が一番の衝撃をうける。

この程度の一撃なら、耐えると思った。魔害物は笑い、向かってくると思った。

雫の全力は、条の一撃と天秤にかけて、どちらが強いかとなると質が違うので一概には言い切れないが、そこまでの違いはないはず

だ。だから条の拳を耐え抜いた魔害物を、これで倒せるなどとは思っていなかった。

だというのに、消滅しただと？

思えば浴衣を斬りつける動きも、昨日と比べるとキレがなかった気がする。

「昨日の魔害物よりも、弱い？」

そうになると、腑に落ちる仮説がひとつたつ。

やはり、こいつは倒し損ねた昨日の魔害物で、ダメージが残っていたのではないか？

最初是否定した仮説だが、今なら頷ける気がした。
と、思考を回していた雫だったが、ふと浴衣が起き上がってこないことに気付く。

「！ 浴衣っ！」

急いで駆け寄り、膝をついてその顔色を窺う。

浴衣は疲労の滲む様子で、それでも弱弱しく笑んだ。

「えへへ、すみません。ちょっと、動けません」

「いや、よくがんばった。」

「……すまない、こんなになるまで戦わせて。私がもっと早く――」
「勝ったんですよ？ 喜びましょうよ」

雫に自責を言わせず、浴衣は先回りした。疲れから頭が常時よりも回らないだろうに、気遣いばかりの少女だ。

雫はそれに応えて作り笑いを浮かべ、力強く頷く。

「そうだな。私たちふたりの勝利だ」

言葉に、浴衣は満足そうに微笑した。

気付けば周囲は元に戻っており、魔害物の結界は消滅したらしい。ならばやはり、今度こそ魔害物も消滅したのだろうか――？

確定はできずに、雫は立ち上がる。

「ともあれ九条家に向かおう。報告と浴衣の療養だ」

「はいっ」

雫は動けない浴衣をあっさりと抱きかかえ、それに驚く浴衣を無視して急ぎ九条家へと走り出した。

どうやら、厄介ごとはまだまだ終わらないようだ、と思いながら。

第十二話 ゲーム

浴衣を抱えた雫が九条の屋敷まで辿り着くと、その後は迅速だった。

浴衣を門の前で待っていた羽織が、その浴衣の様子に動じずも急いで部屋まで運び、布団を敷いて寝かせ、他の九条を呼んだ。当主の娘である浴衣の大事とあって、慌ててやってきた九条が治癒を施し、充分と判断して去っていき。

そうして、ようやくひと段落して。

「で——なにがあったって？」

視線はあくまで浴衣に向けたまま、羽織は雫に声だけで問うた。その声音は恐いくらいに迫力を伴っていて、雫は茶化すこともできずに返答する。

「昨日の、昨日と同じ魔害物に襲われた」

「……もう一回言ってみろ」

信じられないのか、羽織は理解不能を顔に押し出しつつも冷静さを忘れずに言った。

雫は繰り返し、同じことを告げる。そうすることしかできなかった。

「昨日と同じ魔害物に襲われた」

「寝ぼけてんじゃないやねえよ、てめえで倒しただろうが。消滅まで確認した、馬鹿なことやってんじゃないやねえよ」

ふざけんなとばかりに怒鳴られた。こちらの言葉の一切を信じてないようである。

それも当然といえば当然だが――雫も負けずに声を荒げる。

「私だって信じがたいさ！　だが、事実現れたんだ。昨日よりかは幾分弱かったが、戦法、外見、笑い方、全部同じだった」

「けっ、他人の空似だよ！　消滅した魔害物が復活するわけがねえ。それとも、似たような奴が連日お前を襲ったってのか？」

「同じ奴だった！　完全に、同じ魔害物だった！」

「眼科行ってこい！　もしくは精神科だな」

「っ。浴衣からと言ってやってくれ」

埒があかない。雫は判断し、浴衣に加勢を頼む。

浴衣は寝そべっており見上げる形なので、自然と上目遣いで嘆願のように告げる。

「本当なんです、羽織さま。信じてくださいっ」

「そうですか……倒し損ねたとも思えませんし、しかし似た奴でもなかったのですよね？」

「はい」

「ふむ、じゃあ――」

「私と浴衣の証言に対する信用度が全然違う！」

雫は真剣な羽織の態度に我慢できずに突っ込んでいた。

いや、真剣なのはいいのだが、いいのだが……なんだこの不条理は！

羽織はやっぱり雫の声を無視して、ギラついた笑みを浮かべる。

「まあ、なんにせよ、浴衣様をこんなに傷つけたんだ――そいつはぶっ殺す」

「もう倒したぞ」

「ああ!？」

なんじゃそりゃあ、と言わんばかりに目を白黒させる羽織。

雫はこれもどうせ信じないんだろうな、と思いながらも同じ言葉を続けた。

「だから、倒したぞ。消滅は確認した」

「お前と浴衣様のふたりで、あれを倒しただ？　ますます嘘じゃねえーか！　んなことできるかつ！」

乱暴な物言いだが、冷静に彼我の実力差を考慮した上での発言である。

雫は呆れたように肩を竦める。

「いや、昨日のと比べると弱かったと言っただろう、私の話は全然聞いてないな、貴様」

「弱かっただあ？」

また不可解な発言に羽織は顎に手をおき、ようやく真っ当にうけとめてくれたらしく長考する。

……………。

……………。

……………と。

「おーい、羽織。浴衣ちゃんの部屋にいるって聞いたけど、なにやってんだ？」

「む、条」

ガラッ、と遠慮もなくフスマを開いて現れた男は、二条　条だっ

た。

すぐに名を呼んできた雫に目をやる。

「ん？ 雫か。どうした遊びに来たのか？」

「あ、いや、それが……！」

「って、うわ！ 浴衣ちゃん、風邪か？」

遅れて浴衣が寝込んでいることに気づき、話を遮断してまで驚く。
マイペースである。

呆れたように羽織が割り込む。

「お前、聞いてないのか？」

「なにを」

「浴衣様が怪我して雫に担がれてきた。屋敷中、騒然となったんだぞ」

「マジ？ そうなん？」

部屋で寝ていたため、そんな騒ぎは耳に入ってこなかった。いや、それでも普通聞こえるものだが、彼には聞こえなかったらしい。深刻さを理解したのか条は少々眉を寄せ詰め寄る。

「なにがあつたんだよ」

「うわー、うっぜえ。また話が最初に戻るのかよ」

話の進行が行ったり来たりで面倒臭い、羽織は額に手を添えた。
そんな態度に、条はあっけらかんと口を回す。

「なんだ、長くなるのか。だったら俺の用事から話していいか？」

「あん、そういやおれに用があんのか？」

「ああ。なんでも六条家当主が総会の要請をしたらしくてな。九条

様が補佐にお前を呼んでるぞ」

「……………」

「……………」

間。

間。

間——をとっている場合ではなくて！

「そういうことは早く言え、ボケエエ！」

「あつ、わり」

「てめえ、全く悪びれてねえーなあ！　って、こんなことしてる時間ハねえ！」

さつと怒りを仕舞い込んで、それをおくびにもださずに浴衣に向き直る。

怒りたいし急ぎたいが、主に向かってその全ては非礼に値する。恭しく頭を下げ、謝罪のポーズ。

「浴衣様すみません、私は総会に出てまいりますので、その話は後ほど」

「はい、そちらの方がずっと優先すべきです」

浴衣もいつものように朗らかな笑みでもって羽織を見送るのだった。

その横で。

「じゃあ、その間に俺にも事情教えてくれ」

「わかった」

条と雫は膝を突き合わせていた。

そういうマイペースがまた苛立たしい羽織だったが、突っ込みをどうにか飲み込んで部屋をでた。

後で覚えてやがれと、三下ご用達の台詞を胸に抱いて。

「それで、なにがあったというのだ、六条」

流石に遅刻者はひとりもなく総会は開かれ、二条が第一声を発した。

今回は別件の用務があり一条は欠席。それに付き従う形で十条も席を外している。それと前回と同じく五条と八条も不在のため、六条での総会となる。

一条がいないことは別段に珍しいことでもないの——それでも総会是一条の屋敷だが——かわりに二条が取り仕切りのも日常的にある風景だ。

ただ。

「たくっ、おれまで呼んでつまんねェことだったらブツ飛ばすぞ」

乱雑な口調で頬杖をつく、風貌はまるでガキ大将をそのまま成長させたような男——四条家当主が総会に参加するのは、非常に珍しい。

四条はあまり総会には出席しない。何故かと問われても特に理由はない。単に不真面目を絵に描いたような男である四条家当主に、サボり癖があるだけだ。

それを今回は、六条が参加を無理にでも呼びかけた。そう強く呼びかけられては、どうせ暇な四条も応じざるを得なかった。不承不

承ではあったが。

六条は頷き、深刻さを帯びる低音で告げる。

「それが……信じがたいのですが——完全に同一の魂魄の気配を發する魔害物が、町中に複数——正確には十七、確認されました」

「——？」

驚くことなのだろうが、よく理解できずにそれより先に疑問がたつ。

同時に魔害物が発生したことは確かに切迫感を煽るが、同じ気配の魔害物？ それは一体全体どういうことか。意味がわからない。

一同が意味を取りかね驚くに驚けず斟酌している中、羽織はひとり最大の驚愕に襲われていた。

おいおい、まさか……。

「それは……どういう意味だ？」

「そのままの意味です」

意味を図りかねる皆を代表して問う二条に、六条も六条でどう言えбайいかと戸惑っているようにさえ見えた。

「いつものように、我ら六条は町中を巡視しておりました。魔害物の出現をいち早く捕捉するためです」

「それはわかっている」

三条は煩わしそうに切って捨てる。

六条はその能力“遠方の知覚”により警戒網を町中に張り、魔害物を発見した場合は即座に適任と思しき条家に報告、その条家が打倒する。

そういった一連の流れが、過去数百年も条家では確固として成立

している。

だからこそ、六条が総会を要請するのはよほどの事態で、よほどの異変ということだ。

三条はそんな当然の説明など無駄話だと、だから核心を手早く語れと言っている。

それに対し六条は答えのない問いに、どうにか説明をつけてみせる。

「武器を扱う魔害物……先日、討伐したはずの魔害物が再び現れ、それが複数存在しているのです」

確定だ。羽織は頭を抱えなくなった。無論、自重したが、どーにも。

雫の話は本当だったらしい。

なんてこったい。

羽織の内情などとは無関係に、話し合いはエンジンがかかったように加速していく。

三条が懐疑的に言う。

「同じ魔害物が複数？　なにかの間違いでは……」

「総会を要請したのです、間違いはありません」

六条は確実と言い切れるほどに確認したのだ。一番現実を疑ったのは、他でもない六条なのだから。それでも、いくら疑っても魂魄は完璧に一致していたのだ。だからこそ、総会を開くこととしたのである。

とはいえ二条も即座には納得できず、一般論を述べてみる。

「だが、それはありえないのではないか？」

「今までの常識で考えては、ありえませんか」

ありえないことの現出——それは凶事か、はたまた勘違いか。誰も前者とは信じたくはない。意識せずに、二条は口を開く。

「む。では……武器を扱いだすまで進化した魔害物は全て同じ外見、魂魄となるのではないか？」

「そこまで進化した個体の情報などないのだから、それも考えられる、かしら？」

どんなことでも、初見では珍しく感じるものだ。だが、それが本当に珍しいことなのかは、断定できない。ただ知らないことを始めて知っただけで、他の視点からでは常識なのかもしれない。

そんな二条の推論に七条も賛意を示し、六条が首を振る。

「いえ、記録ではやはり姿は一個体ごとに全く違っていたと、記されています」

六条家は情報収集を司っているために、その情報を書物として古くから残している。

その書物には魔害物の進化についての記載が豊富であり、だからそれは違うと否定できる。

当主たちもそれがわかっているので、六条に追求したりはしない。

二条はまた現状を説明しうる別の意見を述べる。

「ではまさか……魔害物が人に近付いたことで魂魄能力に酷似した“なにか”を、発現したのではないか？　それで自己の複製をなしたの、では」

それもそうであつたら凶事といえるほどに恐るべき事態だが、やはり六条は首を振る。

「それもありえま——」

六条が首を振り、否定を口にしようとした。
その時。

突如唐突突然に。

『ふむ、なかなか面白い見識じゃないか』
「！」

全く違う声が、総会に割って入った。

『だが、君たち条家ならば知っているはずだろう？ 武器型でいどではまだまだ足りない。人を模し、近付き続け、遂には魂魄能力のようなものを魔害物が扱いだすのは、最大の位階になってからだとなにせ、条家は世界で唯一、全ての位階の魔害物を討伐したことのある集団なのだから——そう、最上位階たる“魂魄能力に類似した力を揮う人型の魔害物”までも、ね』

瞬間、弾かれたように羽織は静乃を庇い前にでて、戦闘しうる当主や他の補佐たちも腰を浮かす。

「誰だ」

「どこにいる！」

貫くように三条が誰何の声を発し、二条が周囲の警戒心を強め視界を回す。

しかし、この部屋にあるのは当主たちとその付き添いのみ。

とはいえ声がまやかしであるはずもない——無礼を承知しつつも、混乱に乗じて羽織は声をはさむ。

「おい、六条」

「……ここにはいません。おそらくは遠くの場所——つまり現状ではここに、声を届ける能力かと」

六条は即座に受け答え、冷静に分析して結論する。周囲に敵たる者は存在しないと。

他家当主たちもそれで警戒を薄め、浮かせた腰をおろす。六条への信頼と、奇襲の可能性の激減による安定だ。羽織も静乃の後ろに戻り、胡坐をかく。ただし羽織に限っては警戒だけは一分も緩めていないが。

声だけの男は特段隠し立てもせず、六条の言葉を肯定する。

『その通り、これは私の子供たちの能力さ。能力名は“彼我の対話”という。能力のお陰でこうして条家当主諸君と対話ができるのだから、便利とは思わないかい？

ただ——姿を現せなくてすまないね、なにせ私の姿が露見しては六条の能力で居場所まで探られてしまうからねえ、くく』

確かに声だけではいかに六条の能力を駆使しても、探し出すことは不可能。

それを踏まえた上でのこの接触だとしたら、この声の主は条家について調べつくしているのかもしれない。

一体、なんの目的での接触かは、わからないが……。

まあともかく、能力であるなら得心がいく——動揺もなく二条が、代表してまずは口を開く。

「お前さん、何者だ」

『おっと名乗っていなかったかな？ 失礼失礼。』

私は、そうだねえ——マッドサイエンティスト。きっと私のこと

を、世界はそう呼ぶのだろう。気軽にマッド先生とでも呼ぶといい。いやマッド博士でもよいがね』

「完全に偽名だな、まあ本名を名乗るほどの馬鹿ではないということか」

『狂信的科学者——ゆえにもとより名など必要ないのだよ。単に識別名としてマッドサイエンティストと、マッドと呼びたまえ。いやマッド博士でもよいがね』

微妙にマッド博士を押してくるな。羽織はそんな思考を浮かべながらも、とりあえず自分へのお咎めはないようだと言堵する。

自称マッドサイエンティストは言う。

『それにしても……冷静だなあ、条家十門。突然の闖入者に対して、よくもここまで取り乱さずに私の話を聞けるものだ』

「この程度で取り乱すような若輩は条家にはいないわ」

「情報を得るには、話を聞くのが一番ですから」

『くく、流石だ。本当に流石だよ』

七条と六条の平然とした答えに、マッドは対話の最中だというのは笑ってしまいそうだった。とはいえそれは礼儀に反するので、マッドは我慢する。

「ただ、オレたちも不躰な闖入者に好意的ではない。なにか用があるなら言うといい」

「内容によっちゃあ、個人的には歓迎してやるぜエ？」

三条が嫌そうながらも促すように言って、四条が喧嘩腰で言う。そういうのならばとばかりに、マッドは本題へと入る。危険を冒し、こんな風にしてまで条家の総会に参入をしてきた理由——本題へ。

『くく。では、お言葉に甘えようかな。』

私はね、条家十門——君たちにゲームを挑もうと思い、こうして声を送っているのだよ』

「ゲーム、だと？」

「はっ、条家の総会に割り込んできただけでも面白エが、その上、喧嘩を売ろうってか。面白エ、面白エじゃねえか、歓迎してやるよマッドサイエンティストお！」

「四条は少し黙ってなさいな」

喧嘩っ早い四条が高らかに声を喜色に染め、七条がたしなめる。情報を得るにはこちらは語らず、相手に存分に語ってもらうべきだ。楽しそうに笑う四条以外の全員が心得ていた。だからこそ相槌だけをうつ。四条は聞いた風もなく笑っていたが。

マッドだって理解しておきながらも、その軽口を閉ざしはしない。語るという行為自体が楽しくてしょうがないとばかりに、嬉々として語る。

『先ほどから君たちが困っている同質複数の魔害物の件だがね、あれは私の仕業だよ』

「!？」

あっさりと、至極あっさりとマッドはとんでもないことを自白した。彼にとってはそんなことは前提で、演出の下準備にすぎない。驚かせるための催し物は、まだまだ会話の先だ。

早く語りたい——うずうずしながらマッドは丹念に順序を踏んだ解説を続ける。

『私には沢山の子供たちがいる——その子らのひとりに、“魔の複製”という能力をもつ魔益師がいてねえ。名前の通りに、その能力

は魔害物を複製し操る、簡単に言えば魔害物の紛い物を造る能力さ』
「な……っ！」

絶句。

警戒心が置き去りになるほどの驚愕。ひとつ前の自白など比較にならないほどの、途轍もない驚愕。そんな、そんな能力が存在するという事実、条家の当主として動揺を隠せない。

それもやはりマッドにとって重要度が低い告白で、大した風もなく言っただけだが、余人には爆撃級の衝撃だ。

魔害物の紛い物を造る能力――！

それは脅威だ、それは恐怖だ、それは最悪だ。

それは害なす魔の物を、幾らでも量産できるということ。幾らでも、世界に敵対できるということ。幾らでも、破壊をばら撒けるということ。

今回のように！

その危険性にピンとこないのか。

「魔害物の紛い物をつくる能力だと？ 冗句としては笑えねえな」

言葉に反して、四条は笑って言った。

確かに冗句としても笑えないが、それ以上に脅威としても笑えない。そのことをこの男は理解できないのか。

周囲から白い目が集まるも、それに気付いた様子はなく、ただ四条の発言により当主たちは平静を取り返していたのだから、彼もいい仕事をしているといえるのかもしれない。

四条の茶々は無視して、マッドはすらすらと朗読のように言葉を羅列する。

『それで、町中にその魔害物の複製をばら撒いた――その数十七』

六条の報告通りの数——マッドの言葉が嘘ではない裏づけ。

先の論議の解答が奇しくも明示されたわけだが、それを喜べる状況ではなくなった。状況は悪化の一途を辿る。

「……そんなことを、何故わしらに言う？」

二条が探りをいれる。誰にもバラさずに行えば、それは言ってみれば完全犯罪。破壊を目的とするならば、この対話は有害でしかないはずだ。なのに、何故わざわざ声を送り、バラすというのだ。

この男の目的は、一体なんだ……？

『さっき言っただろう？ ゲームだよ、これは』

返答は、酷く狂的な笑みだった。マッドの名にも、その見せびらかすような精神性にもよくよく似合う、常軌を逸した笑い方だった。

『その十七の中に、本物の武器を扱う魔害物がいるのさ。君たちの勝利条件は、複製たちを倒しつつも、その中からボスキャラとなる本物を探し出し打倒する、といったところかな？

ちなみに、そいつはずっと拘束しておいたのでね、戦闘衝動に限界がきているよ。その上でコピーしたのだから、複製どもも同じさ』
「なっ!？」

魔害物には戦闘衝動がある。

戦闘を好み、戦闘を望み、戦闘を奉ずる。闘争に狂った、戦うことのみの本能——それが魔害物。

そのため普通は一般人を襲うことはありえない。なぜなら一般人は敵となりえないほどに弱いからだから、戦いにならないのだから。だから奴らの狙いは戦いとなりうる存在、魂を活性化しその力を繰る人間——魔益師だけだ。

魔害物のこの性質のお陰で、魔益師たちはこちら側の事情を知れることなく幾年月も戦い続けてこられた。しかも奴らはご丁寧に戦いの邪魔を嫌って、一般人払いの結界まで張るのだ。そうそうは一般人にバレたりはしない。一般人が危険に晒される心配はない。しかし、なにごとにも例外はある。

魔害物は、稀に一般人を襲うことがあるのだ。

それは戦闘衝動が限界に達した時、魔害物の戦闘衝動がはち切れた時、僅かの戦闘行為も行えずに数日間を過ごした時——なんでもいいから手当たり次第に殺して、自分の衝動の手慰みにするのだ。

魔益師全員の共通意識として、それが最も忌避すべき状況だ。魔益師たちは、そうなる前に魔害物を倒さねばならない——裏側から、表側を護るために。

六条は苦い表情でマッドに言葉を向ける。

「つまりは、ゲームの参加者として、我々を選んだというわけですか？」

『その通り。これも演出の一環さ。ゲームを展開したのだから、ゲームマスターの気分だね。攻略してくれるプレイヤーがいなければなんにもならないだろう？』

まあ、どうせ条家とはいずれ敵対するのだから、ここで実力の数割でも知れば儲けものだしねえ』

それは狂気と打算の織り交ぜられた選択。

思想発想自体はイカレている。魔害物を使ってゲームなどとは、正気とは思えない意味不明極まる発想だ。その上で、陰ながら遂行していた計画を気取られてすらないのに、自ら呆気なくバラす。どうにも黒幕には向かない、自己顕示欲の高いイカレた愉快犯といった。

だが、そこにある全てが狂気ではない。ついでのように放たれた言葉には、計略の意図が見える。わざわざ計画をバラしたのは、パ

ニツクの誘発。そして手札を晒すことで、条家の対処能力を測っている。自分のような存在を敵とした場合、一体どういう風に動くのだろうか、予行演習している。それをわかっていても避けられない――ある程度以上の能力を明かさざるを得ない状況を作り出しているのだ。

しっかりと自身の狂気を理由付けし、あたかも真つ当な打算の元に巡らされた謀略と思わせる。

はたして、この男は言葉の通りの狂つた計略者か、それとも狂つた皮を装い被つただけの計略者か。マッドサイエンティスト

この場においては、誰にも理解できやしない。狂気に理解とは、かくも縁遠いものであるからして。

『おお、そうだ。これを教えておかないと、難易度がわかりづらいなあ』

ふと、マッドは今思い出したかのようにわざとらしく言った。

『昨日君たちが倒した武器型の魔害物がいただろう。あれも勿論のように複製だが……強かつただろう？ あれで本物の強さの六割とあったところだよ。』

どうかね？ これで本物がどれくらいの強さか検討がつくのではないかね？ どれほどの危険度か、判断ついたのではないかい？』

あれが十六と、それ以上のボスが一匹か。

この場で唯一、六割の複製を直視した羽織だけが、深いため息をついた。他のメンツは、直感的には危険性を感じ取ったかもしれないが、それだけだ。現場と事務では情報に齟齬がでるものなのだ。というか、そんな十七の魔害物を使つてのゲームとは、羽織としてはおいおいと言えない。

――ふいと、羽織の視界の先で主が動いた。

今まで黙っていた分、こんなところで動くとは羽織にさえ予想外であり、無論に当主たちやマッドでさえ軽く瞠目する。

「どうして……あなたはこのようなことをするのですか？ あなた
の目的は、一体なんですか？」

悪意に対し、悪意で返すようなことはせず、善意でもって受け止めようとする、静乃の問い。
それを受け。

くく、と含むように笑い声を殺し、けれども殺し切れずにやがて大口を開けた馬鹿笑いへと発展する。

その問いに答える。明確なまでに目的を宣する。誰にも聞かせてやるような、耳をひっぱり叫び散らすような、はたまた自分への誓いの言葉のような。

「――私は“生”を支配するっ!!」

主なき一条の屋敷に雷鳴がごとく響き轟く。

それは、きつと全世界への宣告であり、自己への誓約であった。必ず叶えると、絶対に諦めないと、なにがなんでもやってみせると、世界に自分に向けた宣誓。

言葉の意味するところは、聞いた誰にもわからない。本人だけにしか理解不能の夢物語。しかし、そのただひとりのマッドサイエンティストにとっては、おそらくなにを置いても、なにを切り捨ててもなすべき理想なのだろうと、そう感じさせた。

条家十門当主一同が気圧されるほどの迫力に、誰も押し黙る。問うた静乃も、ここまで全霊でかえってくるとは思わなかった。

しかし発言した当の本人は一瞬でテンションをおさめ、また皮肉っぽく笑みを刻む。

『では、私は君たちの活躍を観客として眺めることにするよ——が
んぱりたまえ』

それだけ言って、本当に余韻もなにもなく綺麗さっぱりと、マッドは声を閉ざした。対話を、終了した。おそらく、もうどんな大声も届かないし伝わらないだろう。

「……………」

それでも、その確信はなく。

一同の間に深く重い沈黙だけが埋め尽くした。

沈黙にもそれ相応の意味は存在し、それは警戒と、それと情報整理。あと、なにを言うべきなのかわからなかったり、単に雰囲気におされて黙っているだけの者もいたけれど。

そのような意味ある沈黙を経て、幾ばくか。ようやく二条が沈黙の空気を破って口火を切る。

「一条様の不在にこういったことがおこるとはな……」

「いや、タイミングがよすぎる。それを狙ったのかもしれないな」

三条はさらに悪い方向に推測を述べておく。

現実的には、そのほうが可能性としては高い。

「だとしたら、厄介な相手かもしれんな」

「なんにせよ、ここまで明確に敵対したのだ、相応の報いをくれてやる」

条家を妬むもの、嫌うものは多くいる——無論、それ以上に多く畏敬するものや憧憬するものだっているが——こういう手合いを放っておくと、そういった奴らを増長させるかもしれない。

三条は牙をむく獣のように断言した。条家に敵するものは討つべきである。

それを否定するわけではないが、六条はそれよりも話を修正する。

「ですがともかく、奴に対する詮索や対処は一先ず置きましょう。それよりも、今は——」

「ゲーム、だろ？　へっ、楽しくなってきたぜ」

「そうね、早急に編成を考えましょう。十七の魔害物を倒すために」

次々と発言していく当主たちは、既にいつもの通りだった。

条家十門の長い歴史の中でもおよそ初となる総会への介入でさえ、彼らは受け止め飲み込み、前へと進む。

彼らは知っているのだ、なにが重要で、なにをすべきかを。ここを取り乱している場合ではないということ。

六条はふむ、と顎に手を置く。

「ただ――奴は我らの実力が知りたいと言いました。ならばこれは我らの手の内を探るための陽動とみて間違いないでしょう」

「つまり、こちらの全てを晒すのは愚策ということか」

「ええ、ですから編成に当主は組み込まないほうが賢明かと」

冷静な言葉だった。現実的で頷ける提案だった。だが、それは現場にない者の発想ともいえた。

静乃は言う。

「ですが、本物の魔害物に対してどう対処するのでしょうか。二条 条さん――二条家直系ですら傷を負い、苦戦したと聞いています」

「その二条が戦った魔害物が六割の複製だとするならば、確かに本物は当主レベルでないと被害が著しいことになりそうだな。まあ、二条家直系の程度がいかほどかは知らないが」

ちよくちよく棘を混ぜ込む三条。

を気にせず四条は不敵に笑みを刻む。

「だったらおれがいくぜ！ てか、そのつもりでおれを出席させたんじゃないのかよ、未来視でもしてよお。なあ、六条」

“完全予知”の六条。未来という情報でさえも知りうる賢人。

四条は無理に呼び出された理由が、このイザコザを六条が予見したがためと考えたのだが。

「いえ、そんなことはしていませんよ。ただ単純に、敵の数が多いので速度において条家でも随一の四条に任せようと思っていたのです。その際に当主から伝えてくれたほうが命令系統としては簡潔でしょう？」

たまに頭を使っても、的外れであるのだから悲しいものである。
子供っぽくそっぽを向いて、四条は舌打つ。

「なんだ、そうかよ。まあ、今回に限っては面白エことになったし、いい判断だったぜ六条」

「しかし確かに四条の脚ならば、奴に情報を与えずに魔害物の討伐が可能といえるのではないか？」

「でも、この単細胞のバトルマニアよ？ そんな綺麗に倒してくれるとは思えないわ」

「ああん？ 喧嘩売ってんのか七条！」

どうどう、とばかりに四条の補佐に止められる四条家当主。
という風景は別段珍しくもなんともないので、総会は続く。

「ここにおける戦闘特化の条家——我ら二条、それに三条、四条。あとは戦闘できる条家——七条。その四家で今すぐに出撃できる数を聞かせてくれ。無論、自身を除いてだ。」

二条は七名ほどだ」

「三条は四名」

「四条は……あー、どうだろ三人くらいは暇してたかな」

「七条は基本的に忙しい。暇な者なんてひとりもないわ」

「総計して十四名か。足りんな」

さくさく答える三人に、二条は少しだけ渋面を晒す。
足りないのなら補えばいい、七条は提言する。

「当主は不在でも、五条や十条の手透きの者はいるでしょうから、聞いてみればいいんじゃないかしら」

「一人一殺といったところか？」

「それは危険ではないですか？ 複製でも条さん——二条家直系を梃子搦らせる相手ですよ？ 下手をすれば本物とあたる可能性もあることですし」

「それに、屋敷から戦える者全員が出払うのは不味いんじゃない？ まさかとは思いますが、それが狙いともわからねエしな」

「むう、ではふたり一組で出撃。そしてひとりかふたりほどは屋敷に残るということはどうだ」

まあ、妥当だ。全会一致で肯定。

「で、あとの問題は本物か……」

「だからおれが出るって。おれなら複製なんざ即行でブツ倒して、本物もぶちのめしてやるからよお」

しつこいほどに言い募る四条に、二条は腕を組んで思案する。それから周囲を見回し、他の当主たちに無言で是非を確認し、確たる否定も見当たらない。

仕方ないと、とうとう折れた。

「……わかった。四条、お前が出る。ただし複製には本気をださることだ。そして本物には本気で、できれば最速で倒して欲しい。分析されないほど速く動いて、速く叩け」

「任せておけて！ じゃ、いつてくるわ！」

「なっ！ 待ちなさい、四条！ あなた、敵の位置わかるのっ！？」

即座に立ち上がり、駆け出そうとする四条を七条がどうにか呼び止める。

四条の脅威の素早さ——危なく退室する寸前で停止できた。

「おお、そうだったそうだった」

「位置については六条、わかるな」

「ええ、十七全てを把握しております。また動いているでしょうが、すぐに特定できます」

「では六条家総出で出撃する者たちを導いてやってくれ」

「はい。出撃する者の名前さえ教えていただければ、こちらから個別に連絡をいれ、伝令役をひとりずつあてがいましょう」

通信手段は現代的に携帯電話だ。六条家には、条家全員の携帯番号が知れていて、すぐに情報を伝えられるようにしてあるのだ。

そうして携帯で連絡を取り合い、魔害物へと導くのが六条の主な仕事といえた。

二条は頷き、視線を静乃へ。

「九条はいつでも治癒できるように複数人の治癒師を待機させておいてくれ」

「わかりました」

「ああ、それと九条、あんたの所にいるうちのせがれ、あいつをだしちゃあもらえんか？」

「はい？」

突然の話に、疑問が先行してしまう。それでも微笑みは失っていないのは、静乃という人間性を現していた。

二条は気恥ずかしげで、しかし誇らしげな微笑を浮かべる。その顔は当主のものではなく、きっと父親のそれだった。

「あの馬鹿のことだ、倒した奴が偽物だったと聞けば自分でケリをつけたがるだろう。今日だけ別の奴をあんたの所に護衛として回すから、頼む」

「ふふ、それは勿論構いませんよ。きっと条さんも喜ぶでしょうから」

「すまんな」

二条は自分のせがれ——条の性格を父親ゆえに知り尽くしている。そして、少々甘い父親であった。

すぐに引き締めなおし、二条は全員に向かって号令する。

「これで、今回の総会は閉じる——全員、がんばってくれよ」

そうして、ゲームは開始された。

第十三話 使用人

「と、いうことになりました」

「ほらみろ」

「ち」

説明があまり得意ではない静乃に任され、羽織は総会の一連の事情を浴衣に説明していた。のだが、それを横で聞いていた雫にふふん、と鼻で笑われた。

あくまで浴衣に対しての説明だというのに、勝手に聞いてんじやねえよ、という気持ちだったが追求はやめておいた。浴衣がなにか言いたげな表情をしていたからだ。羽織はそこら辺の気配りも忘れない使用人なのである。

少しは体力を取り戻したのか、浴衣は布団で上体を起こしながら憂うように呟く。

「大変なことになりましたね、羽織さま」

「そうですね。九条家も、これから慌しくなるでしょう」

「何故、こんなことになったのでしょうか……」

考え込むようにして、浴衣は顔を俯かせた。

脅威なる進化を果たした魔害物、それを複製してばら撒く人間。浴衣には理解し難い思想であり、理解できないことは恐れにも繋がる。魔害物自体の脅威も加味すれば、それは怖気を誘う現状といえた。

雫はもはや呆れたように嘆息する。

「しかし、“魔の複製”とはな……人間の魂の可能性の奥深さを感じる」

「は。奥深さ、ね。もともと魂魄能力なんてもんからして常軌を逸してるんだ、予測はできなかったとはいえ、そこまで驚く話でもねえよ」

「いや、驚くだろう。しかもそれが悪意をもって敵対したんだ、非常に厄介だろうな」

「そりゃそうだが、自然発生よりは人為的の方がマシだ。原因がわかってんだからな。それを叩けばいい」

「それは……まあ、確かに」

「そう考えると、その能力者を保持してたのが派手好き臭いマッドで運がよかったのかもな」

雫に言っているようで、その実は浴衣に向けて語る羽織。浴衣に直接言えば、気を遣っていることがバレバレなので、間接的に現状は必ずしも悪くないとポジティブに語ることで伝えたのだ。

しかし、別に言葉は嘘ではない。

たとえば今回の件。もしマッドと名乗る黒幕が出張ってこなかった場合、人為的な事件とは思ってもよらなかっただろう。

そして自然発生的ななにがしかのこじ付けをして、あらぬ方向に思考が跳躍していた。見当外れの推測しかできなかった。

本当の黒幕に、気付くことすらせずに。

その展開にならなかったのは、だから幸運と言える。マッドという男の自己顕示欲が高くてよかったと、そう言える。

まあ、マッドという男は黒幕というよりは演出家だったが……。当惑しながら、雫はぼやく。

「マッド、か。彼は……その、なんなのだろうな」

言葉は不明瞭で要領を得ない。実直な雫でさえもそうならざるを仕方のない、徹底的に意味不明な、名前さえ不詳の男。誰もが感じる疑問に、羽織は肩を竦めてはぐらかす。

「さあな、んなこと考えるより先にやることあんだろ。考えんのは、それを終わらせてからでも遅くねえよ」

「そう、だな」

「じゃ、がんばってこい」

臆面もなく他人頼りな発言、やっぱり全力で他人任せな男である。だが、その後ろには輝ける笑みの静乃が疑問符を浮かべていた。

「あら？ 羽織もいくのでしょうか？」

「……………いえ、私は遠慮させていただこうかと——」

「いってらしゃい、羽織。がんばってくださいね」

「いえ、あの、その……………はい、がんばります」

笑顔の圧力には敵わず、羽織はもう死にそうなほどゲンナリしながら頷いた。

他所では傲慢に振舞おうとも、主にはメチャクチャ弱い使用人である。横で雫は笑いを堪えるのに必死だった。

笑うなどばかりに恨みがましく視線に殺意をこめながら、羽織は嫌々ながらも話を先に進める。

「とりあえず一体打倒したことは六条に言っているし、あとは十六体だな。……………多っ」

ため息を吐きたい気分である。

そういう感じを一切気にせず、話の流れをぶつちぎり、条はひとりごちる。本当に空気を讀まない。

「にしても、親父もいいところあるなあ、俺すっげえ行きかけたから助かるわ」

軽そうに笑うも、その瞳は燃えている。

条としては、勝ちきれなかった自分が不甲斐無く、また目算でも自分より強い魔害物が存在することが許せない。

常が適当な性格だからとて、戦時は回路ごと思考は切り替えるもので――二条 条の戦闘時の思考は、強さへの信仰という面をもつ別に戦いが楽しいわけではない。あんな卑賤な行為は単なる仕事だ。強さの証明のための行為だ。

そうではなく、単純に強くないといけないと、強迫観念にも近い義務感を持っているのだ。

強くなくてはならない。強くあらねばならない。強くならねばならない。

条家に泥を塗るような実力ではないけない。それは個人の弱小だけでなく、家ごと弱小と見做されるから。

条家の血をその身に流し魔益師と名乗った時点で、強くなくてはならない。それは条家の暗黙の掟。言うまでもないほどの常識。

特に、条は直系なのだ。

その通ってきた道にある重圧、責務、鍛錬、どれもが想像を絶する。

そんな道を通った人間だからこそ、自己の能力の高さを認識し、それが一種の信仰といえるほどの寄る辺となる。

だから、条は参戦が嬉しい。父親に、最高に感謝している。

「では、事が事だ、急ごうか」

「おう。……って、雫も来るのか？」

「無論だ。こんな話を聞いて黙ってなどいられない。なにより、私の依頼は完遂されていないとわかったのだ、完遂させなければ」

「連戦になるんじゃないのか？」

雫はほんのついさっき、浴衣とともに武器を扱う魔害物の複製と交戦、打倒している。

そこで体力や気力、益なす魔を消費してしまったのではないのか。続けての戦闘が可能なのか。

雫は自嘲のように、力なく笑う。

「先の戦闘では、私はほとんど戦っていないさ」

ほとんどを、浴衣に押し付けてしまった。浴衣にばかり、戦いの代償を負わせてしまった。

そのため幸か不幸か、雫に消耗はほとんどない。トドメとなった風の斬撃も、あれは周囲の風を集めて放ったもの、自身の魔益の消費は軽微だ。

それだけでなく、魂の底にまで食い込んだ害なす魔があったが――それはついだとばかりに、静乃が押さえ込んでくれた。

応急処置であり、侵蝕した魔害を根絶したわけではないが、数日間魂の活動を阻害されることはないだろうと、静乃は言っていた。その数日間が終わったらまた押さえ込んで、という処置を繰り返し、その間に根本は自身の抵抗力で自然治癒を待つという療法をとることにしたのだ。

「だから、私は大丈夫だ、戦える」

「まあ、俺は助かるがよ。どうせ羽織は戦ってくれなさそうだし」

尤もだ、雫は深く頷きそうになったが、静乃が大丈夫ですよと笑う。

「前は護衛をしていて、戦闘に参加できなかったのでしょうか？」

今回はその役目がありませんから、羽織も戦いますよ。そうですね、羽織」

「勿論です」

「……………」

静乃はどうやら羽織の言い分を字面通りに受け止めているようであるが、雫にはそうとは絶対に思えない。あれは単に戦闘が面倒だっただけに違いないと、そう確信していた。

面倒臭がり、という点では条も同類だが、まあ戦闘行為についてのみは積極的なので、こちらは大丈夫だろう。

雫はひとり納得し、さあ行くかと相成った時に、浴衣が慌てて声を上げる。

「あっ、あの！」

「浴衣？」

「浴衣様……」

「あ、いえ、大丈夫です。今回はついていくなんて言いません。もう力を使い果たしましたし、本当に足手まといにしかありません」

わたしがいると、羽織さまも全力がだせませんしね、と苦笑する。どっちにしても戦わないんじゃないのか、この男は。雫に言わせればやっぱり疑問であるが、口ははさまない。対話しているのは羽織と浴衣だ。

下向く浴衣に、羽織はにっこりと笑う。それこそ、浴衣にしか見せないよう、別人のように爽やかな笑みだった。

「浴衣様、自分を足手まといだなんて言わないでください。前回の戦いだって、浴衣様がいなければ勝ちはありませんでしたよ？」

「そんなこと……ありませんよ」

「いえ、あります。」

浴衣様がいたから、私はあの作戦を思いつき実行できました。

浴衣様がいたから、雫は傷ついてもすぐに癒してもらうことができました。

浴衣様がいたから、条は最後の交差で負傷を気にせずに突貫することができました。

全部、浴衣様がいたからです」

「羽織さま……」

雫は少し感心してしまった。

自分では言えなかった、けれど言いたかった言葉をそのものズバリ言い放って見せたからだ。

浴衣のお陰で勝てたと、根拠をもって言い切りたかった。だが、雫には上手く説明できずいて、浴衣が落ち込む姿を見ているしかできなかった。

そこにくると、羽織は流石に口達者である。

ゆっくりと、浴衣は顔を上げ、羽織と視線を交わす。

ふたりは一体、それでなにを感じ、なにを思ったのかはわからない。もしかしたら、当のふたりにさえわからないのかもしれないかった。

羽織は浴衣の頭を手をおき、そのままどこまでも優しく撫ぜる。

「ですから、今回は浴衣様がない分、私が尽力します。後は私に任せて、休んでいてください」

「あ……うんっ」

どうにも、傍で聞いていると羽織は羽織で浴衣のことを案じているようだが。

浴衣も浴衣で、羽織には甘えているようだ。

雫に対しては、うんだなんて言うことはありえない。はい、と言葉遣いの端々まで名家ゆえの躰がいき届いた受け答えをする。おそ

らくは、羽織以外――母親である静乃にさえ、敬語が崩れることはないだろう。

それほどまでに羽織への感情は強いのだと、それがこんな形でも理解させられる。

雫は、少しだけ眉を曲げた。

浴衣との対話中ゆえに、そんな雫への余所見など欠片もせず、羽織はさらに最後に言う。

「それでは、行って参ります、浴衣様」

「……あ」

思わず漏れてしまった声は、撫でる手が離れていくことへの名残惜しさか、それとも戦いへと身を投じる者への不安か。

どちらにせよ浴衣は酷く悲しげな表情をして、それでも言いたいことを全て飲み込んで、ただひとことだけ、戦地へとゆく三人に向かって告げた。

「はい、いつてらっしゃいませ、羽織さま、加瀬先輩、条さん」

それは、心配のせいでぐしゃぐしゃな笑顔だった。

ぐしゃぐしゃでも、それでも絶対にその表情は、笑顔だった。

戦地に赴く皆が心配でたまらない。自分がなんの役にも立てなくて悔しい。

雫もほんの少し前に感じた、そのなんともいえない感情の奔流の中で、それでも浴衣は笑って見送った。

第十四話 紛い物

「さてと、伝令役に位置を聞かないとな」

「そろそろ着信くんじゃねえか？」

任務がある時、六条の伝令役とコンタクトをとるのは多く、任務ごとにその伝令役をひとりあてがわれる。条も度々、六条の支援は受けており、幾度も伝令役から敵の所在を伝えてもらい、叩きに行った。

と、タイミングよく条の携帯電話が震える。待ってましたとばかりに素早く電話にでる。

「おう、六条の……誰だ？」

『ごきげんよう、二条 条さん』

「っ！？ むっ、六条様！」

その声は低く唸るようで、謎めいた雰囲気満ちた声音。声の主は間違いようもなく六条家当主、六条 時久その人であった。

そんな人にすぐく軽いため口をきいてしまった、と焦る条に六条は怪しく笑う。

『ええ、あなたへの伝令役は私が担当します』

「なっ、なんですか」

いきなりのことに、条はテンパる。現状を把握しきれていない。

六条は変わらず薄く笑う。そんな反応を楽しむように。

『ふふ、あなたとともに羽織殿が行くでしょう？』

「はっ、はあ、なんで知ってんですか」

『九条の性格を鑑みれば当然でしょう。それで、羽織殿がいるならば、おそらくはあたりを引き易いと、そう考えました』

「……なんて不吉なことを」

しかも“完全予知”を掲げる六条家当主の言葉だ。なんとも予言的で嫌過ぎる話である。

いやそういう勘もいいけど六条家当主なのだから、他の六条と比べて最も探查能力が高いだろう。それが、自分などの担当でいいのか。条は訊ねる。

「しっ、四条様も出るんですね？ だったら六条様は四条様を担当なさったほうがよいのでは……？」

『四条に電話しても繋がりません』

「ま、あいつにケータイ持ち歩く習慣はなさそうだもんな」

けらけらと横で笑う羽織がかなり腹立たしい。

だが、その通りだと条も思う。となると、もうこの決定は覆せそうになかった。当主との会話だなんて緊張しまくるというのに、それが伝令役とは。もう電話が嫌いになりそうな勢いである。

思考に黙っていると、六条は了承と捉えたらしく事務的な言葉を紡ぎ始める。

『我ら六条で討伐すべき魔害物を選定しました。そしてあなた方に倒してもらおう魔害物の位置をお伝えします。まずは一番近いものからですが――』

「流石に、三度目となると見慣れてきたな……」

「そうだな、俺は二度目だけど」

「だる」

六条の言った通りの場所にて、雫と条、それに羽織は魔害物を発見、つまらなさそうに感想した。

目の前には、獅子頭を被った人型——武器を扱う魔害物。おそらくはその複製体と遭遇していた。雫や条の言う通り、出張りすぎな感が強い魔害物である。

運よくこの複製に関しては一般人への被害はないようで、雫は安堵する。

そういった感情とは無縁の羽織は、びしっと魔害物を力強く指差し不自然な歯切れ良さで宣する。

「じゃ、前衛は条、後衛に雫、んで場外におれってフォーメーションで——」

「「待て待て待て」」

言うがいなや後ろを向いて駆け出そうとする羽織の両肩を、雫と条のふたりがそれぞれ掴む。力強く、碎かんばかりに。

「「お前（貴様）も戦え！」」

羽織はえー、と不満げに言葉を返す。

「三対一だぜ？ 三体一つて卑怯じゃね？ せめて二対一にしよう、おれは見てるから」

「「戦え！」」

「ちえ」

わざとらしく舌打ちするも、今回はそこまで嫌がってはいないようで――単に抵抗が面倒だっただけかもしれないが――すぐに目を細めた。

それだけで、雫は少しだけ身構えてしまう。

雰囲気、僅かに変質したような気がするのだ。

「――ふん」

何時の間に、羽織はナイフを指で弄んでいた。

一瞬前にはなかったはずのそのナイフ、形状はまるで針のように異様に細長く――形状からスローイングナイフと見て取れた。

用途は勿論、

「ふっ」

投擲のみ。

軽い呼気とともに、スローイングナイフは投げ放たれ、

――そして、刹那後には狙い過たず獅子頭の眉間に突き刺さる。

「カ？」

投擲から刺さるまでに、一瞬さえも無い。因果ははっきりとしているが、過程は一切が省略されているかのありえない速度。

まさか、あまりの速度に、誰にも知覚されずに一瞬もなくナイフ

が投擲された――わけではない。

これが、これこそが、羽織の魂魄能力だというだけだ。

魂魄能力“軽器の転移”。

自己が軽器と認識しうるものを転移する。言ってしまうえば一言それだけの能力。空間に干渉するという点では、様々な魂魄能力のなかでも上位強力なる能力だが、その中では下位に位置している。

先の現象で言えば、投擲したナイフを運動量ごと獅子頭の眉間の直前に転移、そのまま突き刺さったというわけだ。距離に速度を殺されることがない分、威力はそのまま。そして空間を飛んだのだから、予測でもしていない限りは回避などできようはずもない。

ニヤリと口角を吊り上げ、羽織は手品師のように両手を閉じ、開く。それだけで同形のスローイングナイフが、合計八本片手四本ずつが両手の内に。

次瞬。

「おらおら！」

投げ放つ。

そして転移。転移。転移。転移。転移。転移。転移。

獅子頭の四肢と顔面に避けようもなく投擲した八本のナイフが狙い通りに突き刺さる。怯む魔害物。

それから羽織は叫ぶ。

「おれの能力は牽制だ、致命には全然届かねえ！ 隙は作ってやったんだ、あとはてめえらが働けや！」

そもそも羽織の能力は決して戦闘向きではない。攻撃にも使える、というだけでその能力単体では傷すら与えられない。

だから、刃が通らない程度の常識外れで、既に勝機が失せる。羽

織はそれほどの實力しかもっていない。

というところまで、実は以前から聞き及んでいたふたりは、声に応じて前と駆ける。

牽制の一撃に、続くは本命の一撃。

「カタ」

向かってくる二名に気づき、突き刺さるナイフも気にせず獅子頭は両手の小太刀を構えようとして――

「はっはー！」

それより速くナイフが飛来。転移。直撃。

ナイフが腕にブツ刺さることで構えが遅れ――そこに押し寄せる拳と刀。

「破！」

「刃！」

寸分の違いもなく真実同時に叩き込まれる、打撃と刺撃。貫き穿つ、真っ直ぐな突撃。

なんとも見事な連携一点同時攻撃は威力を二倍といわず、三倍ほどにまで高めて獅子頭を吹き飛ばす。

そして。

二条の血統に宿る魂魄能力“一撃の強化”は、その同時攻撃を一撃と見做し、強化する。

“一撃”という単位は、決して条の拳ではない。まずもって二条の能力は、拳を強化する能力では――ない。

“一撃の強化”が強化する一撃とは、条の認識する“一撃”を単位とするのだ。それ故に、条が“一撃”と認識しさえすれば、ふた

りの同時攻撃は“一撃”となり、強化される。

つまるところ、条の拳撃。雫の刺突。それはその両方をわけた単体を一撃と呼ばず、直撃の瞬間においてのみは、両方同時に放たれてこそ“一撃”となったのだ。その“一撃”は、能力に則って強化された。

そういう風に、条が考えた。条が思った。強く、信じた。

そして魂は条の認識に従ったのだ。

もとより魂などという曖昧極まりないものを頼っている魂魄能力、これくらいの拡大解釈は当然のように起こりうる。

結果。

最終的なダメージを計算すると。

条のパンチに雫の風を乗せた刺突、それが絶妙な重ねがけであったために三倍となった――ものを、さらに“一撃の強化”が超強化した無類の一撃。

二条の能力を表から裏まで活用し尽した、魂の曖昧さを上手く利用した戦法である。

当然のように雫のような一直線や、条のような戦いに策を弄さないタイプでは逆立ちしても思いつかない戦法――発案は羽織である。先回の戦いで羽織が考案し、ちよつと試してみると言われたのだ。見ての通り大成功の大威力に、獅子頭は壁に激突するとともに肉体が崩壊し、果ては消滅した。

思わず、雫は間拔けな声を零す。

「うわ、なんて楽勝……」

「最初っから羽織みたいな支援できる奴が真面目に働けばな。それでなくとも羽織は戦上手だから、真っ当に作戦を練ってくれば、こんなもんだ」

怒涛のような連続攻撃で隙をつくり、敵に攻撃させない。的確な投擲で筋肉の稼働部分を阻害し、行動の阻止をする。羽織のそんなせこくも有用な能力、そしてそのずる賢さをそのまま全て勝利のために費やしてみれば、こうなる。

とはいえ、できるのにやらない男という、羽織はまた最悪度を上げたような気がする。

なので、こんな楽勝しても雫としては面白くない。

嫌な奴が有能で強ければ、そりゃあムカつく。認めたくないのに、その点においてのみは認めざるを得なくなるからだ。

口調は自然と棘を交えて、雫はぼやく。

「羽織、強かったんだな」

「あ？ 強かねえよ、おれは。ただ単にちよろつとマシな能力もってるだけだよ」

「？」

おや？

ここぞとばかりに自慢してくると思ったが、あまり興味なさげで、有り体に言えば冷めた表情ですらあった。

少しだけ、意外な反応である。

羽織は鬱陶しそうに話を切り替える。

「んなことより、おかしい。流石に楽勝過ぎだ」

「そうか？ 今の一撃なら倒してもおかしくはないだろう」

まあ、そんな顔されては蒸し返すこともできない。雫は相槌を打つ。

羽織はそんな気遣いも無視して、勝手に自分で結論付ける。

「……たぶん、六割って話は嘘だな」

「なに!？」

「いや、昨日おれたちが倒した奴は六割だったのかもしれないが、今回のこれはそこまで上等の複製じゃねえってことだ」

「む」

それなら確かに、浴衣とともに戦った魔害物を倒し切れた話にも説明がつく。

今の魔害物は瞬殺だったせいで性能がわかりはしなかったが、羽織としては昨日よりかは弱く映ったらしいし。

ならば説得力は決して低くはない。

「はっ。そういえば、確かにあの男は“昨日の魔害物”は六割と言ったが、“今回の魔害物”が六割だとは、言っていなかったな」

細やかにうざい奴だな。

おそらく、というか間違いなくこれも計略の内。

強さの誤解をさせることで、条家から戦力を過剰に出撃させた。確かに、これは条家の内情偵察だ。それも随分と派手な。

ち、と羽織が思案に暮れてる内に、条は六条へと連絡をいれる。

「六条様ですか？　こちら、二条　条です。一匹倒しました」

『おや、早いですね』

「ああ、まあ、羽織がちゃんと働いてくれましたから」

『ほう、それは珍しい』

「それで、次の魔害物はどこですか？」

『次は——』

順調にゲームは進む。

順調のように、ゲームは進む。

急転落がないことだけを、誰もが祈っていた。

第十五話 喧嘩

「うわっ、誰だよ、運わりいのは」

「貴様じゃないのか」

「羽織だろ」

「なんでだよっ！」

六条の予言は、はからずも的中してしまったらしい。

さあ二戦目だと飛び込んだ結界の中で、三人を待ち構えていたのは尋常ではない殺気を放つ獅子頭の魔害物だった。

既に地面には死体が幾つも転がり、衝動の発散をしたらしいが――それでもこの狂氣的な殺意、そして絶望的なまでのプレッシャー。間違いない。間違いないもなく、本物だ。本物の、武器を扱う魔害物だ。

しかし――

「どーすんよ、これ」

「どうすればいいのだろうな、これは」

「どうするんだ、これ」

三人は困ったように呟いて、視線を前へと向ける。

[illegible]

「カタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタ！」

！」

壮絶な戦いを繰り広げる、四条家当主と獅子頭がいた。

高速機動で翻弄する四条に、獅子頭は両手の小太刀に加えて増幅する腕を複数はやして応戦する。

両者共通として、笑っていた。戦いを心の底から楽しんでいた。命がけの行為を、戯れとして遊んでいた。

つまるところ、先を越されたのだ。四条には連絡が届いておらず——彼が携帯を携帯していないからだ——自由きままに魔害物を遊撃していた所にあたってしまった。

こういう場合を想定しておらず、条たちはどうしようか困ってしまつて、とりあえず観戦しているのだった。

雫は解説役っぽく、口を開いた。

「あれが四条の血統に宿る能力“物体の加速”か。確かに、疾い」

雫が目を凝らしても、遠くで眺める分にはその姿はほとんど見えない。掠れてかすかに人の影が映るていどである。相対する獅子頭ですら、精確には知覚できていないようで、広範囲攻撃で対応していた。しかし少しも当たっていないようで、四条の笑い声は続いていた。

本当に速い——条家最速の号は、伊達ではない。
だが。

「速いは速いが……“瞬殺舞踏”？ あれが？」

雫は困惑のように眉をへの字にした。

四条の理想、極致。

『踊るように舞うように、足運びは美しく。ただしその足捌き、誰にも知覚できやしない。光を視認できないように、気付けず気付か

ず瞬殺する』——“瞬殺舞踏”。
なのだが。

「全然、瞬殺してないぞ。本当に理想を目指しているのか？」

「というか、理念だけ聞けば華麗なる舞踏家か、暗殺術的な感じかと思ったのだが、その当主は大笑いしながら戦っている。華麗というか苛烈。隠れるどころか、自己主張しながら戦っている。完全にイメージと真逆である。」

条は一応、同じ条家十門という義理的な感じで弁明しておく。

「いや、あれは四条様の悪い癖だ。あーいう戦い方をするのは四条家でも当主のあの人だけで、普通の四条は不意打ちか、それかヒット&アウェイが基本だ」

「癖？」

雫が首を傾げて問うと、条が苦笑で口を濁す。

「現行の四条家当主、つまりあの方は……その、なんというか——」
「喧嘩好き」

濁したのに、羽織がさらりと言ってしまふ。

とはいえ事実、四条は喧嘩好きで、戦闘狂なのだ。

戦いを娯楽とし、戦闘を遊戯とし、闘争を愉悦とする——魔害物によく似た思考回路をもつ男、それが四条である。

「というか、総会で言われたことをまるごと無視してやがる。いや、四条が言うことを聞くなどとは、誰も考えていなかったが……。」

羽織は肩を竦めた。

「遊んでんだよ、あれは。全力も最高速もまだまだ出してねえ」

「そつ、そうなのか……」

受け応えた雫の表情は、少し引きつる。

確かに全力ではなさそうだなと思っていた雫だが、やっぱりあれより速くなるのか。風により機動力を上昇させることのできる雫をして、その速度は尋常ではない。

まさか光速くらいいくのか？ 雫は馬鹿な妄想だと、内から沸いたその疑問を切って捨てることができなかった。条家最速の当主だ、どれほどの実力——速さかなど、予測できるはずもない。

そんな驚異の戦闘シーンを眺めているというのに、感心なさげに羽織は天を仰いで、無気力そうに呟いた。

「どーする？ 割り込んだら怒るぞ、ああいうタイプは」

「だよな」

「というわけで、おれらはゆっくり観戦でもしとこーぜ。よかったじゃねえか、条家当主の戦いを見れるんだぜ？」

「む、確かに」

「あーあ、戦いたかったのにな」

雫は素直に頷き、観戦に徹する。条は唸ったが、それでも四条の邪魔をするほうが恐い、黙って見守る他にはなかった。

三人の視線の先で、観客が観客のままに選んだことなど……いやそもそも存在すらも意識の端にも捉えず、四条と獅子頭の戦いは激化の一途を辿る。

に比してあまりにも遅い。腕が四条のいた空間を叩く頃には、その四条は吹き飛んだ獅子頭の正面に。

「カカ？」

「ノロマが！」

罵り、突き刺すような蹴撃。

獅子頭は反射的にギリギリ両手の小太刀を重ねて受け止め——た瞬間には、四条の脚は引き戻っている。そして蹴りの乱打。乱打。乱打。

蹴りは細心の注意を払って手加減し、受け止める小太刀が碎けないようにする。もっと抵抗しろよと手を抜いて反応を楽しむ、四条の悪い癖。

——とはいえ、流石に高速の足裏を数瞬の内に四十二度も連続されては、魔害を形にした武器とはいえ碎ける。

いとも容易く、碎け散る。

碎いた勢い余って、四十二撃目をそのまま四条は獅子頭のがら空きの腹部に蹴りこんでしまった。

「あちゃ……」

直撃したというのに、四条は失敗を感じる。

四条の蹴りがジャストミートしてしまっただけは、通常の魔害物では消滅必至。こいつでも倒れてしまうかもしれない。

これは終わりかもしれない……。いやいや、終わらせないでくれよ。

もっともっと喧嘩したい——純粹無垢にして血みどろな四条の祈り、それが通じたのか。

「カタカタ！」

獅子頭は笑って見せた。

即座に蹴り飛ばされる勢いのままに、自らも後方に跳び退き威力を極力殺す。そして、その手に再び小太刀を作製、握り締める。

そんな臨戦態勢の魔害物の姿に、四条は我慢ならず大口開けて、歯を見せつけて、腹を抱えて笑い出す。

[illegible]

よく耐えた！　こりや楽しくなってきたぜ！　楽しいなア、おい
お前もそう思うだろう？　ええ、魔害モン！」

[illegible]

獅子頭も応えるように齒を鳴らし、狂笑を轟かす。

楽しいのだと、高揚感を笑い声にかえて世界に放出する。

両者の笑い声が響き、重なり、世界を揺るがす。世界を嘲笑っているかのように、笑い止らない。

ああ。それは、その光景は、まるで魔害物同士の殺し合いのよう。
ああ。そこは、その場所は、まるで戦闘に狂ったモノどもの最高の遊戯場になってしまったよう。

いち早く笑いをおさめたのは、四条。早く戦いたくて、笑いをが
んばって収めたのだ。

右足を後ろへ、駆ける準備をなす。

「いく」

言うがいなや瞬間移動のような唐突さで、

「ぜ！」

四条は獅子頭の直前まで踏破していた。

脚が振りあがり、膝を曲げ——構えた獅子頭を高速の最中で認識、四条は笑みを刻む——瞬間、思い切り軸足を折り曲げた。

上段にフェイントをいれガードを誘い、下段に本命を叩き込む。それは完全に無警戒の脚部への脚払い。雫では小揺るぎもしなかった攻めだが、四条の技は獅子頭の足を容易く刈り取る。獅子頭が中空に浮かび上がる。

四条の脚は軽やかにうねり、浮いて死に体の獅子頭を狙い打つ。獅子頭は咄嗟に腕を生やして両足の代わりに腕で立つ。死に体から脱する。そして、なんと退かずに前進。

四条の蹴りに、自分から向かう。

小太刀を煌かせ、首を狙いながら突貫する。

肉を斬らせて骨を絶つ——そんな難しい言葉を魔害物が知る由もないだろうが、確かにその言葉の通りの戦法だ。

「ひは！」

思わず四条の口から笑みが漏れる。

楽しい愉しい命懸けの勝負に、感情が膨れ上がってしまった。

四条は喜色のせいで、無意識の内にさらに加速していた。獅子頭に合わせて抑えていた分が、少しだけ表に出た。

加速した脚は、三度決まっていた。

一度目——獅子頭の右の小太刀を蹴り碎き。

二度目——獅子頭の左の小太刀を蹴り碎き。

三度目——獅子頭の腹部を蹴り叩いた。

肉を斬らせず、骨を絶つ——それほどの速度。条家十門最速、四条家当主の最速の蹴り。

「まだだ！ まだ死ぬんじゃあねエ！」

獅子頭が蹴りの勢いで吹き飛ぶ——それよりも尚速く追撃、蹴りを叩き込む。こもうとした。その直前で、

「カタリ」

獅子頭から腕が爆発のように生えた。

その身体中一部も余すところなく、黒の腕が生えて生えて、そして伸びた。

それはそう、針千本がその身を護るように、身体中の端から端まで区別なく、腕が生えまくる防衛本能。

ただし千本などという極小の数など置き去りに、数え切れない膨大数にまで増殖。爆伸。世界を黒く押し潰す。

しかも、その腕の一本一本全てが小太刀を握り、刺突のように構えあまねく裂き貫こうとしている。

それは周囲全域への攻撃という名の防御。

腕を棘として、触れんとする四条を阻む攻性防壁。

しかし四条は放った蹴りを制止することもなく、そのまま腕の一群を碎き、第二陣が迫る直後にバックステップで距離をとる。

ただの後方跳躍でも、四条の能力“物体の加速”により高速となる。腕などよりもずっと速く、四条は後退した。

……後退。真っ向勝負を信条とする四条が退いたのは、非常に珍しく、性質的には死んでもありえなさそうな行為であるが、何故そんなことをしたのか。それは黒き腕の奔流、その全容が見たかったからだ。

全貌が見える位置まで、四条は文字通り瞬く間に退く。

急増と伸張を繰り返し押し寄せる腕は、しなるように走る黒の蛇の群れのよう。そんな直接的な死を想起させる、全人類に等しく畏怖と戦慄を植え付けるような情景だったけれど、四条には笑みしかなかった。

「面白れエ。全部蹴り碎いてやんよ！」

加速。再び前方へ。黒い腕が密集してできた針の壁へ。

一足跳びで音の域を乗り越え、迫る壁のまん前に四条は陣取る。そこには膨大なる腕の奔流に吞まれ、裂かれ、碎かれてしまうことがわかりきっているだろうに。

それでも、四条は一切臆さず焦らず。

いつそゆるやかに腰を落とし、膝を軽く曲げ、右足を一歩だけ退き、構えを整える。深呼吸する。

「すう——はあ」

息を吐き出すと同時に——四条は蹴り放った。

なんの工夫も細工もなく、真っ直ぐ前方に足を突き出した。蹴りという行為の内、最もスタンダードと言えるほどの型どおりの蹴り。その蹴撃は小太刀を碎き、腕を薙ぎ、黒を蹴散らす。そして蹴った反動を活かして、足は引き戻り、再び構えをとる。

そして、再び全く同じ動作で足を突き出す。

蹴りを、また放つ。まだまだ放つ。幾らでも放つ。速く多く、蹴りを放つ。

速さは数にも直結する。速いが故に莫大な蹴り数となって、膨大な量の腕を蹴破り、蹴り抜き、蹴り碎く。

膝を使い、カカトを使い、足裏、足の甲、つま先まで、脚のあらゆる箇所を用いてただただ蹴って蹴って蹴りまくった。

それは、増殖速度よりも自身の脚のほうが速いと——四条の確信ゆえの回りくどい選択。

実際は、四条が全力全霊全開で、助走込みの突撃キックをかませば、おそらく腕の群などものともせずに吹き飛ばし、魔害物を消滅せしめていただろう。一撃で、勝敗を決せれるだろう。

だが、四条はそれをしなかった。

相手に全力を出させておいて、真っ向から捻じ伏せる。自分の力を信じて真正面から打ち砕く。

しかも自分は全力をださずに、相手に実力をあわせて、さらには最も面倒な方法で。ともかく自分を不利に追い込む。

そして、勝つ。

それは誇り高い戦士を相手取った場合は、最高峰の侮辱にも等しい行為。

だが、戦闘を楽しむための行動。

四条が楽しみたいがためだけの、相手の自我を完璧に無視してともかく我に走る、四条の精神性からくる暴挙。

そうして、確かに四条の盲信の通りに、増殖よりも蹴りのほうが速かった。

千を累乗し続ける増殖速度に対し、ただ単純に百ずつ引き算していくような絶望的な一過程の差を、速度だけで覆した。

やがて黒の全ては蹴散らされ、しかし四条は止まらない。あまりの速さに制御が効かない――わけではない。ちゃんと制御した上で、四条の意志でもって止めないだけである。

「カタ？」

「おれの、勝っちィ！」

ドガン、と大砲の炸裂音と聞き違うほどの打撃音を響かせ、獅子頭を蹴り飛ばした。

それこそ蹴りと同速ほどの勢いで獅子頭は吹き飛び、弾け飛び、最終的には壁が陥没するほどに叩きつけられ、ずるりと落下。

獅子頭は倒れ、もうピクリとも動かなかった。獅子頭は、動かなかった。

あっけなく、決着である。

喧嘩の終了すらも、四条の気分次第なのであった。

「ありえんな……」

雫は決着を見て取り、表情を引きつらせながら思わず零していた。なんという戦い方をするのだろう。無駄ばかりで乱暴粗暴に過ぎる。力任せで、戦術作戦などの知の欠片も見当たらない稚児の気ままのような戦い方だ。

それは遊戯であって、戦いとはいいがたいものだ。楽しむことに専心し、勝利は二の次で、打倒はさらにその後にはか考えていない。

究極的に言ってしまうえば、

「なんて馬鹿まるだしの戦い方だ、あんなだけ強いくせしてアホ過ぎる」

「……………」

四条家当主に向かっての酷い暴言だったが、羽織のその発言には、雫も条も肯定して頷くことを止められなかった。黙して小さめに頷いたのは、せめてもの礼儀である。

と、

「ん、なんだ、てめェら見てたのか……お？ 九条ンとこの補佐に、

確かお前は二条ンとこのガキか」

「っ!？」

「うわっ」

「ンだよ、驚くなよ」

忽然と三人の正面に四条が現れた。

瞬間移動のレベルの唐突さに、接近にも気付けなかったので驚きもひとしおである。

そんなこともお構いなしに、四条は馴れ馴れしくも話かけてくる。

「お前ら、なにやってンだよ、こんなトコだよ」

「え、いえ、俺たちはここの魔害物を討伐しに来た、んですけど」

二条はしどろもどろになりながらも、なんとか敬語を使って正確に事情を告げる。

四条は意外そうに目を広げる。

「なに、そうなん?　じゃ、よかったじゃねエか。おれが倒しておいたぜ?」

「はい、そのよう、ですね」

それはそれで残念。条は肩を落とした。

そんな機微にも四条は反応し、軽く笑い飛ばす。

「はっは、なんだ?　お前も戦いたかったか?　そりゃ悪いことしたな——あ、ん?　嬢ちゃん、誰よ」

「えっ、は?　私?」

話が飛び回る人だ——いきなり振られて、雫は慌てる。

「えっと、えーと、私は……九条の客人、です？」

条以上にしどろもどろになりながらどうにか口を動かすも、そういえば自分でもどう説明すればいいのかわからず、疑問系となってしまう。

四条は露骨に不機嫌をあらわにし、再度問う。

「あ？　ンなこと訊いてねエ、名前を言えよ」

「しっ、雫です。加瀬　雫」

「雫。はアん、強エのか？」

「え？　……いえ、全然強くありません」

「そうかい」

まさかとは思うが、頷けば即戦闘となっていたかもしれない。雫は肝を冷やした。

というか初対面の挨拶が「強エのか？」って、どんだけ戦闘狂だ、この人は。

やかましい会話、その傍で。

羽織は、なにかどこか違和感を覚えていた。

「――？」

どこに違和感があるのだろうか。自分でもわからない。だが、決定的になにかが――

「！」

そうか。

魔害物が消滅していない、のだ。

確かに魔害物は倒れ伏し、微かも動かない。完全なる敗北を喫した様だ。

しかしならば――なぜ消滅しない？

なぜ、その身が残っている？

ドクン――と、なにかが脈動、否、胎動した。

それは急転落を告げる、誰も望まぬ足音なのかもしれない。なかった。

幕間(2)

遠く高いどこか。いつかと同じく一切の気配もなく、魔害物との戦闘を監視していた少女なのだが――事態は急変した。

「……っ」

金髪の少女は己が目を疑う。

目を見開いて、驚愕を表情全体で表す――とはいえ無表情な少女だ、常人には些細な表情表記にしか見えなかったが。それでもそれは、彼女の常を知る者なら驚愕に値するほどの表情変化。

現実が、酷く非常識なものにしか写らない。自分の眼球が、正常に機能しているのか。彼女自身にも疑問だった。

それほどまでに、世界は逸脱していた。無表情な少女の、人形のような少女の、そのあるかもわからない心を揺り動かすほどに。

今回は超小型の映像転送機でもって、遠くの父親――件の人物、マッドにもその映像は届いており。

『素晴らしい!』

マッドは、狂喜していた。その逸脱ぶりに、魂の底から喜びにうち震えていた。

十七の魔害物全てを子供たちに映像転送機を持たせて監視しており、それを画面に映し出していたのだが、全てを消す。ただ、羽織たちの写るこのたったひとつの映像だけを凝視する。釘付けになる。

マッドの思考と同じように、魔害物の変化も続く。

黒の液体は一度飛び散ったが、すぐに集中し、集合し、集積し、集約し、集結する。

そうして集まった黒の液体は、真っ黒の球体へとその姿を固定する。

飛び散った黒い液体と、その球体の体積は全く釣り合っていないかったけれど、そんな瑣末な異常は誰も疑問に思う余地もない。思考に、そんな猶予はありえない。異様にして脅威、驚異にして異常。不気味な変化を遂げていくその光景が、誰もの意識を思考に回させない。

対峙する魔益師たちは無論、高くで監視する金髪の少女でさえも、ことのなりゆきをただ傍観するしかできなかった。

ただ、距離が随分と離れた映像を眺めているだけだからか——いや、その心性からだろう——マッドだけは比較的冷静に言う。

『ロールはどこへ行ったかな？』

「調整中」

少女は無意識の脊髓反射で問いには答えを返す。思考の余裕などないのだから、その介在はない。

『ああ、調整中かい。残念だ、残念だなあ、それは。調整中とは残念至極だよ。まあ、こんなことになるなんて、流石の私でも予測はできなかったからねえ、仕方ないか……』

マッドの残念そうな声音の頃には、その黒の球体にはヒビが走っていた。亀裂が、ゆっくりとひらいていた。

なんだろう、これは。なんなのだろう、これは。

これは——なにがおころうとしているのだろうか？

少女は不明の中でも、本能的な恐怖に震えていた。意味がわから

ないものへの恐怖ではなく、わからずともこれは恐怖の対象のだと魂が理解している。

そうして。

——くすくす。

声が、響く。笑い声が、響く。おぞましくて、怖気が走って、大泣きたくなるような——侮辱的な笑い声が、世界を嘲笑う。

『来る、来る！ 武器を扱う魔害物が——』

マッドの興奮も最高潮のようで、高らかに、大らかに、煌びやかに、絶叫する。

『——進化する！』

第十六話 進化（前書き）

出る奴出る奴笑ってばっか。

第十六話 進化

黒い球形があった。

魔害物はいきなり膨れ上がり、弾けとび、集まって、何故か真つ黒な球形となったのだ。

それを喩えるとしたならば、氷が溶けて水と化し、また凍って固形へと至ったかのような現象だった。急速な状態変化は不自然さを象徴するかのようで、その存在の黒さは禍々しさを発している。結果に生じた黒い球形——これは言うなれば、そう……卵か。

「……………」

魔益師たちは異様な状況に閉口してしまふ。

なんだろう、これは。なにが起こっているのか、否、なにが起ころうとしているのか。さっぱりわからない。

世界は一体、どうなっている？

無論に、その問いに答えをもたらすような存在はなく、

——やがて、パキリというなにかが割れる音が響き渡る。

まるでひな鳥が誕生する時のような、存在ひとつが孵る時のような、通常の喜ぶべき事柄が嫌悪すべき禍事へと変質してしまってい

る異常。

卵のような球形は少しずつヒビ割れ、砕け——それが卵だというのなら、なにかが生まれる。

生まれてはいけないモノが、人に害なすモノが、世界を否定するモノが——誕生してしまう。

世界が軋みをあげる。世界が悲鳴をあげる。世界が竦みあがる。まるで誕生を恐れるように。誕生を、忌避するように。

そんな恐れなど気にもせず、忌避などは振り切って。

黒の卵は完全に砕け散る。

そうして。

「くすくす」

そうして生まれ誕生せしは——害なす魔。

外見は成人ほどの人型だが、全身丸焦げにでもなったような黒くヒビ割れた肌であり、だから人間ではありえない。また奇怪は他にも。右腕だけが異様に長く、通常の倍ほどもあるのだ。左腕は通常の長さなので、よけいにアンバランスで奇妙。球形の顔には口以外なにもなく、口だけは凄惨に笑い続けている。

「くすくす」

黒塗りの魔害物——その魔害は甚大で、相対しているだけで魂を汚染されてしまいそんな錯覚に陥る。叩きつけるような殺意は本能的恐怖を呼び起こし、人に近付いてきた外装は強烈な違和感と薄気味悪さをかもし出す。

見ただけでわかる。感じただけでわかる。知っただけでわかる。

——これは、敵だ。

「こりゃあ……」

「うそ、だろ……」

「っ……！」

「――」

四条は感嘆を呟き、条は現実を直視できずにうろたえ、雫は声すら死に、羽織は目を細める。

圧迫感に軋む喉を震わせて、雫は続けてどうにか声を零す。

「進化……したのか？ 武器を扱う魔害物が進化、したのか？」
「のようだな。たく、笑い方も随分と人に近付いたもんだ」

誰もの疑問を言葉とし、それを羽織が軽く肯定する。肯定してしまふ。

否定のしようもない事実だが、それを内心ではまだ否定できたというのに。精神の均衡を保つために、本能が違うと叫んで誤魔化そうとしているというのに。

羽織は容易くそれを砕く。

わかつているのだ。それが正しいのだと。事実を心が否定する。そんな防衛機制は弱さで、脆さなのだと。だから現実を直視するのは正し過ぎるほどに正しい。

だが、こうまで圧倒的な存在を相手に、正しさなど、なんの役にとつた？

雫と条は無意識に一步後ずさっていた。敵から、身体が遠ざかっていた。

「はは！」

かわりとばかりに、四条が前に出た。

魔害物に向かって、臆することなく襲い掛っていた。飛びあがり、蹴りを放つ。

「くすくす」

黒塗りの魔害物は、やはり笑って四条に対する。いくらどう変わり果てようとも、魔害物は戦いを好む。

右の腕。

異様に細長く、リーチの読みづらい右の腕が動く、跳ね上がる。

「おせエ！」

伸ばした手は、跳び掛る四条とすれ違い虚空だけを掴んだ。

一方で四条の足はしっかりと魔害物を捉え、その胴に突き刺さる。鋼鉄にも足跡を刻み込むほどの強力な一撃――けれど魔害物は吹き飛びはせずにその場で堪えてみせた。

「あん？」

外見に反した案外に重い感覚に、四条は眉を顰めた。

ところを。

腕が。

通り過ぎたはずの腕が、跳び蹴りをかました四条を後ろから掴んだ。関節がふたつあるかのように腕は二箇所折れ曲がって、死角から四条を掴んだ。

「ぐっ」

掴まれて、捕まえられて、四条の足は地に着かない。それは、自由の全てを失ったということとまったく同義。

そのままひよい、とどこまでも軽々しく、ゴミを放り捨てるようになんの感慨もなく、魔害物は四条を壁面に向けて投げ放った。

そんな適当杜撰な仕草であっても、魔害物の膂力は埒外。その投擲物体である四条は空間を貫くような速度で飛行し――

ドガン、とその身は壁に叩きつけられ、“壁が崩落する”。

それは異常。

通常世界とは異なる魔害物の結界、その領域内で器物が破損することは、異常だ。

何故ならそこは通常の世界とは違うのだから。風景は模写していても、その存在の本質は元のものとは全く違う。たとえば以前、条の拳に殴り飛ばされた魔害物は壁に叩きつけられ、それで停止したじゃないか。ただの壁ならそれで貫通していないと逆に不自然という状況で、凹んだだけじゃないか。不自然が自然というのが結界の中での条理。

だというのに、壁は崩落した。固定されたはずの模写物が崩壊するなど、ありえない。

ありえないことの顕現。それすなわち、また別のありえない要因の存在――それほどの勢いで四条が壁にぶつかったということ！

壁が砕けたことで瓦礫が積まれ、土煙が舞い上がり、視界が遮られる。四条の安否が、確認できない。

「……………っ」

絶句。

誰も声が紡げない。誰も彼もが声を忘れてしまっていた。

ただ、ひとつを除いては。

「くすくす」

ああ、急転落はここにある。

「油断しやがって……」

羽織は思わず吐き捨てる。

油断——完全に四条の悪癖が、最悪の方向に傾いてしまった。

初撃の、あの一撃を全力で叩き込んでいれば倒せた、とはいわないまでも反撃されることはなかっただろう。だというのに、四条はこの期におよんで——それが彼にとっての戦流儀なのだが——殺さないように手心を加えた。慈悲ではなく、悦楽のために。

蹴りが全力ではなかったから魔害物は耐え、反撃に転ぜられた。攻撃の機会を、与えてしまった。

その結果がこれである。だからこの状況は、この急転落は、四条の油断が招いた。

「ち」

四条の油断で四条が痛手をこうむる。それはいい。それは自業自得というものだ。

だが、そのツケをこちらに回してもらっては困る。

この現状を、どうしろというのだ。四条は死んだというわけではないだろうが——

「くすくす」

「！」

魔害物は四条を倒したと思ったのか、次の獲物を探して視線を回す。

キョロキョロと周囲を見渡し——こちらを見た。目視した。視認

した。

目という器官がないため判然とはしないが、おそらくは、視線は交錯した。すると、唯一顔にある人間的部位たる三日月型の口がにいいと、歪な笑みを深めた。

やば――

瞬時に羽織は撤退選択。無心で後方に向かってバックステップ。次には無意識が解け、思考がどうしようかと走ると、気付く。元いた場所を見て、次手の構想よりも先に、簡素な思考がおこる。

あ……ありゃ死んだな。

ごくごく自然に脳は確信していた。雫と条が、その場に硬直していたのだ。

戦場では咄嗟の瞬発判断の差が、明確な死を招く。危機感知能力が研がれていない奴ほど、簡単に死んでしまう。

黒塗りの魔害物が無造作に短い左手を伸ばした。その手のひらに黒い球形が生じる。魔害物は固まるふたりに向かって飛び掛り、その黒い球形を放った。

――そして炸裂し爆破した。

爆音と、爆光と、爆炎と、爆熱と、爆撃――その全てが一瞬で駆け抜け、結界内を焼き払った。

それはもう、広域爆撃。

万物等しく焼き尽くす黒い烈火炎。

その死ばかりを呼び起こす炎の渦中で、生命の生き残る術なし。

「っ」

羽織だけ。

羽織だけが。

離れた位置にいた羽織だけが。

その短い瞬間におこった複数の出来事全てを、俯瞰することができた。

――結局は身動きひとつできなかった雫と条の間抜けも。

――離れた羽織すら焼き殺しかねない猛爆を発生させた魔害物も。

――それがどういう原理のどういった種類の技であるのかも。

――瞬く間に現れ出でた四条の凄絶な笑みも。

――その四条が盾となって間抜けも羽織自身も生存したという事実も。

――つまりは膨大な熱波と激しい爆風を四条はその背だけで受け止めたという驚愕も。

全て、その目で見取った。

見取ったことで、羽織の思考が電流のように疾走する。

魔とは存在を構成する、言ってしまうえばエネルギーだ。魂から精製し、活性化すれば身体能力は増すし、攻性に転換すれば刃にも弾丸にもなる。

少なからず魔益師たちも魂から魔益を精製し、明確化することでそのようなことは可能だ。身体能力の向上でいえば、基本的過ぎて意識せずにやっている者も少なくはない。

それは知性ある人間だからこそその技で、その身が魔害で構成されているとはいえ、本能でいどしかもたぬ魔害物では魔を操るなどあ

りえない。

しかし。

魔害物の果て無き進化は、そのありえないを凌駕する。

核より魔を活性化し身体能力の向上にあて、魔害を攻性に転じ爆撃さえもおこしてみせた——自己を構成する魔害を、操ることのできる魔害物！

武器の次は、魔を操る魔害物！

それが、次なる進化の段階だったのだ。

「ち、いてエなァ……」

羽織の思考が、乱雑な声により中断される。その背で爆轟の全てを請け負い、硬直しっぱなしの若き芽を守り切った四条の声だ。

「おう、生きてるかい、小僧ども」

四条は笑いながらそれだけ言って、ふらついて倒れ込む。固まったままの条に向かつて、くずおれる。笑んだままに、ぶっ倒れる。

その倒れ切る直前に。

最後に後ろ、魔害物に向かつて蹴りをいれた。どこにそんな力が残っていたのか、その一撃は痛烈で、魔害物を蹴り飛ばす程の威力を見せた。

だが、それが本当の意味での最後の底力だったのだろう。四条は今度こそ力なく意識を落とした。

条は無意識で倒れこんできた四条の身体を受け止め——その時にようやく静止が解ける。まるで再生ボタンを押されたように、アタフタとしだす。

「しっ、四条さま……っ」

どういった理由でも硬直がほどけたことに、羽織は指示が届くと判断。号令を発する。

「今更慌ててる場合か！ 全員、撤退だ。無様に背中見せて逃げろ！ 条は四条を担いでけ！」

四条は速力にのみ特化し過ぎていたために、防御力やら耐久力やらは最低クラス。あんな魔害の爆発を直撃してしまえば大ダメージは免れない。早急に治癒する必要がある。

冗談ではなかった。

こんなところで条家当主にリタイアされては羽織的に、というかこれからの非常に困る。それでなくても条家で死人がでてしまえば、九条 静乃が悲しむ。

九条 静乃は条家で誰かが死ぬ、いや傷つくと——それが傍系であれ使用人であれ誰であれ——自らの責だと、なじり責め立て貶める。

悲しげに表情を歪め、下手をすると子供のように泣きじゃくる時さえある。

条家の命は、自分が支えているというある種の傲慢さからくる、けれどももやっぱり優しさだ。

そんな主の姿が見たいわけもなく——絶対に、死なせるわけにはいかない。

「なっ、少しも戦わずにか！？」

条は意外そうに口を開いた。

前回の戦闘を経て、少しは思考硬直が薄れているようで、闘争的な感情が表にでているようだ。

それは進歩だが、今は煩わしいだけだ。

「四条家当主が負けたんだぞ！ てめえで敵うか！」

「だが！ あれは四条様の油断が原因だぞ！ 敵の力量が一切わからないのに、勝ち目があるかもしれないのに、確かめもせず逃げるのか！」

それは正論。

唐突な進化を見せ付けられて、相手の強さを勝手に強大と思い違うということもありえる。一方的に強さを見せ付けられて、その鮮烈さに惑わされるということもありえる。

進化での成長度合いは不明だし、四条は結局は油断での敗北だ。だから、もしかしたらそこまで成長はしていないかもしれない。もしかしたら、四条の油断が大きすぎただけかもしれない。自分たちでも、戦いうるかもしれない。

自分の強さを信仰する条には、敵の真の実力も知らずに逃げるのは早計だと、そう思う。それはちよつとした思い上がりも混じってはいるが、先入観やインパクトを取り払った事実を見ているとも考えられる思考。

それでも、羽織は取り合ってくれない。

「ああ、そうだ！ たとえおれたち全員でかかって倒し切れる確信があったとしても、この場は退く」

「なんでだよ！」

「四条のことを考えろ！ このままだと確実に死ぬぞ！」

「っ！ だっ、だが！」

「うるせえ！ とつとと四条を九条家までつれてけ！ 間に合わないぞ！」

うだうだしているだけでも、時間が四条の命の火を消してしまう。それに、魔害物があれで死んだとは到底思えない。いつ立ち上がりこちらを敵と認識するか、わからないのだ。

「だが！ 逃げても追いかけるだけだ！」

雫も硬直解凍直後にしては平静な言葉を発する。こちらも前回の経験で、少しは威圧への対抗ができたのかもしれない。

羽織は、そんなこと承知だとばかりにさも当然といった風体で、言う。

「だから、誰かが囧役だ」

「なっ、誰が——！」

条の驚愕の声。

に、即答で凜然とした雫の声が被さる。

「私が——」

「ち、わーったよ、浴衣様ならここで頷くだろうしな。おれがやる」
「！」

それすらも遮ったのは羽織のため息。

言葉の通りであれば、どうやら羽織が今回積極的なのは出立の際に交わした浴衣との会話のせいらしい。

そういえば羽織は言っていた——「浴衣のかわりに尽力する」と。だからこそ、先の戦いでも作戦を提示し、嫌がっていた能力も行使したのであろう。

そして今も、普段なら無言で回れ右していて当然な状況でも前を向いている。

嘘つきのくせして、変なところで言葉に嘘がない奴である。

いや、主には、嘘をつきたくないのか。

「お前らは四条つれて逃げろ。おれが引き付けといてやる。たぶん

結界は条がぶん殴れば穴くらい開くだろ」

一步前に出て、いつものように頬を吊り上げ強気に笑う。
そんな正直いって全く似合わない行動にでる羽織を眺めていて、
思わず雫は告げだしていた。

「私も残ろう」

「あ？」

羽織はなにを言ってるんだ、という顔をし、条はそれはずるいと
声を張る。

「なっ……だったら俺ものこ——」

「それはダメだ！」

「っ！」

声を合わせてダメだしされた。

そしてふたりのダメだしは、見事な息の合いようで続く。

「こん中で結界を破れそうなのはお前だけだし！」

「応援を呼ぶのも条家直系である条のほうが適している！」

「おれや雫じゃあ、お前と言葉の信用度が違うからな！」

「最悪でも条だけは四条家当主をつれて出なければ話にならない！」

「「わかったかつ!？」」

「は……はい」

いつもいがみ合っていたふたりの連携は言いようのない迫力が滲
み出ており、条には首肯以外の選択は不可能だった。

頷くのを確認するや否や、先ほどもまでの息の合いようはどこへや
ら。ふたりはぶん殴るような勢いで言葉をぶつけ合う。

「お前も邪魔だ、出ろ！」

「嫌だ！ 私も残る！」

「うぜえ奴だな！ てめえがいたんじゃ足手まといだ！ ひとりのほうが身軽でいいんだよ、そこんとこ理解しろ！」

「貴様の能力で、どう時間稼ぎをするつもりだ。あんなチャチでせこせこしい能力、牽制が精々だろう！」

「っ。てめえこそ！ そんな震えた手でどうやって刀を握るんだよ、アア？」

「なっ、これは……そう、武者震いだ！」

「カツ！ 阿呆なこと言ってるじゃあ——」

「くすくす」

「「！」」

声に、弾かれたように顔を向ける。

そこには、四条の蹴りを受けてもどうということもなく立ち上がる魔害物の姿。死を体現したかのような黒塗りの魔害物の姿。

もう、本当に時間がない。

羽織は齒を砕かんばかりに齒噛みして、ヤケクソに言い放つ。

「……くそっ。あーもー、勝手にしろ！」

「わかった、勝手にさせてもらう」

「俺は、行くからな……ふたりとも、死ぬなよ」

流石にここでゴネるわけにはいかないので、素直に条は走り出した。

四条を担いで、後ろを向いて、結界の外を目指して。

条は、感情を殺して駆け出した。

急ぎ走る条を見送りながら、

「さーて、あーあ」

なんであんなこと言ったんだろうな、おれは。羽織は今更ながらかなり後悔していた。すぐくすぐ悔いていた。

「くすぐす」

目の前の黒塗り。驚異の進化を果たした、魔気を操る魔害物。

「――――」

横の雫。目を閉じ、なにやら瞑想中な退魔師の少女。

「はあ」

はつきり言って、最悪な状況だ。

とつてもとつても最悪だ。最悪の下、そのまた最悪だ。

別に魔気を扱う魔害物はいい。それ単体ならそこまで大きな問題ではない。“軽器の転移”では倒せない相手が目の前に立っているだけならば、最悪などとは程遠い。

だが。

問題は、そこに追加で隣にあんまり仲が良くない少女がいることだ。

あんまり仲が良くない――というのは羽織の主観で、その少女自

身はそこに大いなる異論を挟みたがるだろうが、それもどうでもいい。

どうしてもよくないのは、その少女が味方だということだ。殺してはいけない――死んだら主が悲しむ存在だということだ。

そのふたつの要素――“軽器の転移”では倒せない敵とあんまり仲が良くない味方の少女――が、同時にまとめてその場に居るのは、最悪だ。

それにおそらくこの戦いもあのマッドサイエンティストに観客よろしく観戦されているのだろう。

羽織はため息を吐きたい気分だった。だから吐いた。

少しも気分は晴れず、またため息を吐こうかとも思ったが、やめた。

敵が笑みを止め。

味方が目を開いたからだ。

もう、考える時間すらなくなった。後悔する暇もなくなった。

それでもやっぱり洩る自分がいて、どうにか自分を納得させる言葉を探る。

……………。

……………。

……………。

まあ、条家に知られるよりはマシか…………。

なにせ口止めに殺せない。脅しも効かない。

それに比べれば、今の状況はまだまだマシに違いない。そうだ、そうに決まっている。羽織はそうやって自分を納得させた。

雫には口止め――脅しとも言おう――すれば、ちゃんと口を閉じるだろう。それは短い期間だが、雫の心根をしっかりと観察していたからこそその判断。

マッドは…………殺せばいいか。

そこまで考え至ると、なんとも晴れやかな心持ちになった。それを人は開き直りと言うのだが、まあ開き直りで構わない。

うん、とひとつ頷いて結論すると

「ま、久々に――遠慮なくやらせてもらうぜ」

羽織は、隠蔽をといった。

幕間（条）

二条 条は走っていた。

四条を背負って、九条の屋敷を目指し走っていた。

後ろには様々な心残りがあるけれど、それには一切振り返ることはせずに走り続けていた。

大丈夫だ。条の楽観的な部分が叫ぶ。大丈夫だと、自身を誤魔化すようにして、言いくるめるようにして叫ぶ。

羽織が残るといった。それなりになにか考えがあるのだろう。勝算もなしに危険に歩む男ではない。

だから、不安はない。心配は、もとよりその必要がない。

四条もこのままでは危ない。黒こげで、血を流し、苦しげに唸っている。早く九条の屋敷にまで行って治癒してもらわなければ、死んでしまうかもしれない。

だから、あの場から背中を向けて離れ、こうして走っているのは最善の選択に違いない。四条の命がかかっているのだから。

自分は間違っていない。この行動は正しい。ここは我慢の場面だ。これは戦略的撤退なのだ。

言い聞かせるようにして、条は走る。

走って、走って、走って。

唐突に――

そんな自分が惨めに思えてきた。

いくらどんな何事をほざいたとしても、これは逃避だ。正論のよ
うな戯言をほざいたとしても、これはまぎれもない敗走だ！

敗走……なのだ。

魔害物に気圧され、四条に庇われ、仲間を捨て置き走る自分――
なんて、なんて情けない。

これではただの敗残兵ではないか。

怯えて竦み、そのせいで足手まといになって、結局は恐怖に逃避
する。

それは、自分の最もなりたくない姿ではなかったか。そうならな
いように、研鑽していたのではなかったか。

もしも自分があんな黒塗りの魔害物なんて瞬殺できるだけ強けれ
ば、こんな後悔はしなくて済んだのではないか。

自分が、もっと強ければ……。

「ああ、ちくしょう」

思わず、声だけが漏れていた。

泣き声みたいに弱い声が、せき止めてもあふれ出た。

「ちく……しょお」

条は常日頃から、強くあれと言われてきた。

その名に相応しい強き男になれと、名付け親でもある父親から耳
にタコができるほど言い聞かされていた。

そもそも条という名前も、父のそんな願いからつけられたものだ。
二つの条を背負う者――二条家当主にはぴったりの名だ。

しかし、条家においてその名は不遜といえる。

条家という一族の、そのもの象徴たるあざな――条という名の重

み。

その名は、ある意味で自分は最強だと言っているようなものだ。条家の最強と宣言しているようなものだ。

そんな名を背負い、条は生き続けてきた。

強くないといけない——条の日常はそうだった。

そう、自分は強くなければならないのに。二条家直系は強くなければならないのに。二条 条は、強くなければならないのに。

何故、自分はこんなにも弱い——！

弱くて情けなくて逃げ出している現実。せつかく父に期待してもらったのに応えられなかった不甲斐無さ。

酷く無様で、悔しくて、もういつそ泣いてしまいそうだったけれど。

涙だけは我慢してみせた。それだけは、流すわけにはいかなかった。

だって、それは弱さの証だから。泣かないくらいの強さは、こんな自分でも残っているはずだから。

だから条は、意地でも泣かないと決めた。

そして、もう二度とこんな後悔をしないほどに強くなると、そう決めた。

第十七話 本気（前書き）

十七話目にしてようやく主人公の見せ場。

第十七話 本気

隠蔽。

魂魄の力と魔益の総量を隠し、他者に自分の実力の程を教えないための技法である。

ある程度以上、魂の力を操縦できるような者ならば——魔益師と呼ばれる程度の者ならば——誰でもやっている。

条家の人間は無論、雫だってそうだ。

なぜならこれができないような魔益師は、常時魔害物に付狙われることになるのだから。

必然的に、隠蔽が苦手な輩ほど魔害物に狙われ、早死にすることが多い。例外として向かってきた全てを打倒し、成長していく猛者もないことはないだろうけど、そんな強者は極稀だ。

だからこそ、隠蔽とは魔益師にとっての必修基礎技法なのである。また、この隠蔽という技術は対魔害物用に考案されたのであったが、対人的にも作用する。

自分が強いことを、他者に隠すことができるのだ。それは戦闘において重要な事柄である。相手の油断を誘ったり、遠距離からの攻撃や知覚から逃れたり、不意打ちなど、諸々のメリットがある。

とはいえ、隠蔽も完璧ではない。

たとえば雫と浴衣は、つい先ほど魔害物に見つかってしまった。魂魄の気配を遮断しきれていなかったせいで、これは単なる未熟と言える。

またたとえば、条家当主ほどの実力者ならば見ただけで“強さを隠している”ことに気付ける。強すぎて隠しきれていなかったり、

不自然に隠し過ぎてしまうのだ。だから逆説的に、強いことがわかってしまう。まあ、漠然的な感覚だが。

弱くては未熟でバレ、強くては強さでバレる。完璧な隠蔽など、ほとんど不可能の技能だ。

——という。

雫の中にあつた常識は、今をもって完膚なきまで打ち破られることとなった。

「お前は下がってろ、足手まといだ」

「え？ あっ、ああ」

羽織の言葉に、反論が思いつかない。否、反論しようという気がおこらない。雫の脳髓は反論してはいけないと、そう断言していた。それは、自己よりも圧倒的に上に立つ存在への敬意と畏怖による結論。雫の心が、完全に羽織に敗北していたがための結論。

羽織から発せられる、世界が萎縮してしまうほど絶大な魂魄の威圧に怯えての結論。

そんな。

そこまでの。

ここまでの実力を、ああも完璧に隠し通していたなんて——ありえない。

雫の見立てでは、羽織の実力は精々が一流だった。自分とそう離れてはおらず、全力をもって戦えばどうにか勝てるだろうと思っていた。

だが真実は違った。違い過ぎた。

なんだこのプレッシャーは。なんだこの魂魄の波動は。なんだこの、腰が抜けそうになるほどの恐怖は。

きつと結界がなければ、条家十門ならびに町中の魔益師は誰もが

気づき騒然となる。混乱し、とにかく警戒、あるいは恐慌しだす。今頃になって思い出す――羽織との初邂逅の時を。震えて逃げ出した、魔害物のことを。それは当然の行動だったのだ。生存するためならば、真っ当至極の判断だったのだ。

羽織は別段普通に言葉を紡ぐ。肩肘張った様子もなく、自慢するでもなく、平静当然とばかりに。

「どうせ、後でうるさいくらいに訊いてくるだろうから……まずはおれの魂魄能力の説明からだな」

雫はもう震える身体は仕方ないと諦めて、せめて受け答えくらいは毅然としようと声を整える。

「きつ、貴様の魂魄能力は“軽器の転移”、なのだろう？ それ以上、なにを説明するというのは」

そう羽織は語った。そのはずだ。なのに、なにをこれ以上語るというのだ。

「……ああ、あれ嘘」

「え？」

「本当のおれの魂魄能力は“万象の転移”。前に説明したのは嘘……というか縮小解釈って奴だな。本当は軽器だけでなく、万象なんでも転移できる」

隠したかったからこそ、ここはひとりで戦いたかったというのに。羽織はまたため息をついた。

雫は不可解に問う。思考が上手く回らないために、単調な言葉しか湧き上がらないのは仕方がないだろう。

「なっ、何故嘘をついていた」

「んー、おれの能力が知られると、アホがアホなこと考え出すからだ」

「どういう……意味だ？」

「さあな。」

で、だ。おれの本気はこれなわけだが――」

「そっ、そうだ、なんだそれは！　ありえないだろう！」

気を取り直して、雫は自身の怯えを誤魔化すように声を荒げる。
あくまでいつも通りに、羽織は肩を竦めるだけ。

「まあ、なんだ、隠蔽は得意分野だからな。それにアイツは実力隠して倒せるレベルじゃねえ。正直いつて逃げててもよかったが……ま、個人的にアイツはブチのめしておきたいし」

「いや、そうじゃなくてだな！」

「流れるにひとりになれそうだったから、おれが直々にぶっ飛ばしてやろうと思ったんだが……それをお前は」

「なっ！　私が悪いのか！？」

「邪魔ばっかしやがってよお。誰にも隠しておきたかったのに」
「おい！」

「まったく参るな。誰にも言わねえって思ってたのに、これで三人目だぜ」

「……いや、無視って一番ツライんだが」

「まあ、とにかくこっちのことも内緒ってことでよろしく」

「だから、何故隠すのだ！？」

「わかんなくていい。とりあえず、他言すんなよ。したら――殺すぞ」

「っ！」

殺す――羽織の口から聞くのははじめてではないが、今回のそれ

よ笑えとばかりに、黒塗りの魔害物は満悦の笑い声を響かせる。

「ふん、来ねえなら、こっちからいくぞ」

いい加減に耳がだるい。

笑うことに忙しそうな魔害物に変わって、羽織は先制をとらせてもらうことにする。

「ふうー」

羽織は肺から全ての空気を吐き出す。

それと同時に腰を落とし、足を引いて、ぐるりと全身を捻り回し、腕を振り被って。

そうしてゆっくりゆったりと構えて――転瞬。

ズドン、と爆碎音を響かせ大地を踏み潰す。

地震が如き震脚により地面からエネルギーをくみ上げ、それを足から腰へ、腰から肩へ、肩から肘へ、肘から拳へ――余すことなく弾けさせ。

「――破！」

全身かけて、全霊乗せて、全力込めて――放たれる拳！

だがどうして。

どうして届くはずのない間合いからの拳打を放つ？

答えは即座に明示される。

笑い続ける黒塗りの魔害物が、忽然に掻き消えたのだ。

どこにいったというのか。

いや、それは欺瞞か。決まっている。決まっているではないか。ここだ。

どこでもなくここだここだ。

羽織の拳の——見事直撃する位置だ！

魔害物は、まるで自ら殴られにいったが如く、一寸も一瞬も抵抗を許さず拳の間に合いに転移させられたのだ。

羽織の魂魄能力、“万象の転移”によって！ 軽器ではない——万なる事象、現象、心象、具象、抽象区別なく、あらゆるあまねく転移させる、羽織の魂の力によって！

無論、拳は魔害物の顔面に勢いよく突き刺さる。

ズガン、と重々しい打撃音が響き、満身を乗せた全力の拳は魔害物を叩きのめし、殴り飛ばす。

「まず一発！」

「——っ！？　っっ！？」

わけがわからない。魔害物には、現状の把握が碌にできていない。意味もわからず吹き飛ばされて、壁に激突す——

しない！

その身は再び羽織の目前に転移。

「おっかえりいい！」

今度は上段蹴り。魔害物の後頭部を蹴り抜く。

先の攻撃は前方から、今回の蹴りは後方から。故に、

「！　ッ！　っ——っ——！！」

衝撃の、挟み撃ち。

その真っ黒な痩身の内部で衝撃が存分に弾け、身体が砕けそうに

なる。蹴りはそのまま振りぬかれ、吹き飛ぶ黒塗りの魔害物――は、羽織の足元に転移し、背中から地面に激突。勢い余って魔害物の身は跳ね上がり、這い蹲れとばかりに羽織に潰す勢いで思い切り踏みつけられる。

「――ッ！」

落雷のような衝撃に、黒塗りの魔害物はた打ち回る。

それが鬱陶しく、羽織は足に力を込めて、動きを強制的に止める。ぐりぐり、と魔害物の胸部を体重全てで踏みこむ。ゲシゲシ、と何度も何度も足を振り上げ振り下ろす。魔害物を地面のように踏みこむ。

「な――っ」

雫の驚きが声とでたのは、ようやくこの時点だった。速すぎる。

転移し殴り吹き飛ばす、その一連の工程を瞬間で行っている。

まるで――お手玉だ。

言葉通り、文字通り――手玉にっている。

「なんて、奴だ……」

そんな雫の声は聞こえない。羽織はサディスティックに笑い、苛立ちを発散するように笑う。

「さあさ、まだまだストレス解消に付き合えよ——我が主を悲しませた罪、末端の責任は頭がとるべきだよなア」

実は言うと羽織は現在、かなり怒っていた。

怒髪天を衝く勢いで、激怒していた。爆発してしまいそうなほどに、憤怒していた。その怒りがあってこそ、魔害物を自分の手で叩くことを決定したほどである。

——どうして……あなたはこのようなことをするのですか？

静乃の、総会の時の悲しげで、ともすれば泣いてしまいそうな声音。

——いつてらっしゃいませ。

浴衣の、出立の時の心配のせいでぐしゃぐしゃな笑顔。

あの時の声音が、あの時の表情が——脳裏に刻まれ忘れることができそうもない。

己が主をああも悲しませた——

「てめえは赦さねえ」

不意に足を上げ、次にはボールを相手にするように魔害物の横っ腹を蹴っ飛ばした。

容赦の欠片もない。

蹴り飛ばされた黒塗りの魔害物をすぐさま転移、浮いた状態——死に体で羽織の間合いに。

右拳が魔害物の腹に刺さり——転移、運動量ごと反転して、羽織に向かって吹き飛んでくる——続けて左拳を背中に叩き込む。木葉のように吹き飛ぶ魔害物。

羽織は体勢を立て直し、構えをとって拳を振り被り——飛来中の

魔害物を再びもとの位置へ転移——振り下ろし、振りぬく。全体重を乗せて、殴打する。錐揉み吹き飛ぶ魔害物。

次には二千メートル上空に転移、重力の鎖につかまれ落下。無論身体の向きは変更したので、吹き飛ぶ運動エネルギーは下向きとなり自由落下の倍速以上で羽織のもとに墜落する。

跳躍と同時に跳ね上がる羽織の足。落ちる魔害物が高速で目の前を通り抜け――羽織はカカト落としの要領で足を振り下ろす。落下速度に加えて、足を叩き込む。そうして加速に加速を重ねて、ドガンと魔害物は大地に思い切り激突する。反作用で跳ね返ることも許さずに、羽織は踏み潰す。

「またも足元から魔害物は消失——転移。羽織は拳を握った。」

一切その場を動かずに、ただただ全力で乱打するだけ。

それだけで、羽織は魔害を扱う魔害物を滅多打ちしていた。抵抗など一切させずに、身じろぎさえ許さず、地に着くこともなく、魔害物は打ちのめされる。

それはただの暴力。純粹で純然な、力任せの暴力。羽織は、魔氣を扱う魔害物を委細の小細工もないただの暴力で叩きのめしていた。殴って転移。殴って転移。殴って転移。殴って転移。殴って転移。

毆つて転移。毆つて転移。毆つて転移。毆つて転移。毆つて転移。毆つて転移。
 毆つて転移。毆つて転移。毆つて転移。毆つて転移。毆つて転移。毆つて転移。
 毆つて転移。毆つて転移。毆つて転移。毆つて転移。毆つて転移。毆つて転移。
 毆つて転移。毆つて転移。毆つて転移。毆つて転移。毆つて転移。毆つて転移。
 毆つて——

七十四発目の拳——蹴りをあわせると九十五撃目——を振り切つた時。

唐突に。

「……ふ、疲れたな」

羽織はその手を止めた。永遠に続くかとすら思われた暴虐は、あ
っけなく停止した。

いくら殴っても、決定打にはならないのだ。羽織の拳は、結局は
生身の拳なのだから。人の極限まで鍛えてあっても、魔害物の耐久
力では地面を殴っているようなもの。

それでも、まあ殺せないわけではないが——というかもう少しで
消滅しそうであるのだが——疲れた、のだ。

「だいたい気も晴れたし——終わりにすつか」

どこまでも気楽に、羽織は言っただけのける。

ストレスの大体は吐き出したようである。

しかし、どうするというのか。

いかに強力無比であろうとも、転移は直接的な攻撃能力ではない。
だからこそ、羽織はその拳で攻撃を続けていたというのに。

どう、終わらせるといえるのか。

「——」

羽織は静かに目を閉じ、前方に右手を翳す。
転移。

黒塗りの頭をちょうどその右手が掴む。
がしりと、しっかり握り締める。

「——さて雫」

些かの疲れに肩を落しながら、ゆっくりと振り返る。
雫はコメカミに指を押しあてながら答える。

「なんだ、今ちょっと今日の出来事を整理してて忙しいんだが……」
どう終わらせるのか――

「こいつにトドメ刺せ」

答え。他人任せ。

「え、は？ 私がか？」

「てめえわざわざ残ったんだ、このくらいしやがれ。……それに、おれの能力じゃ破壊はできねえんだよ。

――ほれ」

メチャクチャ軽い風に、ぐったりとした魔害物を雫へと放り投げた。

物凄く慌てる雫。

「うわっ、わっ、わわ！」

ほとんど反射で具象化、緊張しつつも刀を一閃。

既に身体を構成する魔すらも脆く弱い――魔害物は容易く真つ二つに叩き斬られた。

――こうして魔害を扱う魔害物は、なんとも軽い感じに消滅したのだった。

「そういえば、魔害物ごと別の場所に転移させていれば、マッドとやらに見られることなく戦えたんじゃないのか？」

「あ？　しゃーねえだろ、この能力は自分は転移できねえんだからよ」

「なに、そうなのか」

「ああ。だからおれの能力は筒抜けだろうよ。手早く口封じしとかないとな」

「……物騒な」

「下手すりゃお前も対象だがな」

「ちょっ……！？」

「はっはっは、他言すんなよ？」

幕間(3)

「消滅確認——どうしますか、博士」

金髪の少女は戦闘——いや、一方的な蹂躪の終息を見届け、マツドへと声を伝える。

先ほどの驚愕は既になく、その表情にあるのは無表情だけだ。ただし、その無表情のなかにどこか緊張のようなものが浮かんでいたのは、見間違いないだろう。

羽織の暴威。距離などは慰めにもならず、少女の膝は微かに震え、痛いほどに手を握り締めていた。

『どう、か。』

いや。まさかあれが倒されるとは予想の外の外でね、考えていなかった。どうしようか……』

肃々と、マツドは呟く。先ほどまでの高揚加減が嘘であったかのような有様である。

少女はそんな父親の声に、少なからず驚きを覚えていた。

困惑、しているのだろうか。少女は考え、まさかと自分で打ち消す。

自分の父は、困惑を与える側であり、決して困惑を受け取るような常人ではない。

マツドは、少しだけ元気を取り戻して、考察を開始する。

『まあ、なんにしても面白そうな能力を観察できた。察するに、物体を転移する能力、かな？ いや、どうだろうか』

ふーむ、と顎に手をあてて思案を進め、少し経ってああと思い出したように声を上げる。

『あの魔益師は能力名やその内容について語っていたかな？』

マッドは少女へと問う。少女ならば、それを知っていると確信しているからだ。

期待通りに、少女は頷く。

「能力名“万象の転移”」

声が聞こえたわけではない。口の動きを見て、おおよその会話を見取っていたのだ。金髪の少女は羽織が雫へと説明した言葉を、全てマッドへとそのまま伝達する。

その伝聞で、マッドは再び興奮が灯る。だが決して声を張り上げたり、馬鹿笑いを発散したりはしなかった。冷静に平静に、静かな興奮をその声の底から滲ませている。それはサイエンティストとしての側面だから。興奮の色が、違ったから。

『万象、万象だって？ まさか、万象？ “万象の転移”？』

そんな、万象などという広域的な言葉では、どうしても捉えられてしまうのではないか……。

そう、どういう解釈の仕方でも、可能ではないか。どんな拡大解釈でも、認識できるではないか。

魂の拡大解釈——無意識でも関係なく起こる現象であるし、ならばまさか可能か？ 本当に本当の意味で万なる象を転移することが、

可能なのか？

しかし、そんな馬鹿げた能力があっていいのか？　もしも可能ならば、あの魔益師は……』

ぶつぶつと、マッドは思考を口走りながら整理する。

それはまさに羽織の恐れたことであつたが、マッドがそんなことを知るよしもなく、仮の結論を構築する。

それが正しいのかはわからない――どころか、正しくあつてほしい妄想であると言われても仕方のない結論ではあつたが、ともかく結論する。

でもやっぱりそれは仮で、想定でしかない。
だから。

『ふむ。あの魔益師を、お茶にでも誘おうかな？』

当人に訊いてみよう。マッドは当然の帰結とばかりに、そう思った。

第十八話 処理

「えーとだな」

羽織は電話口に向かって、適当な言葉を探す。

ほんの少しの言語搜索——創作でもいい——のち、まるで本当にその事実を目の当たりにした証言者のように軽やかに口を滑らせる。

「そうそう。四条が進化した魔害物に一発蹴りいれててよ、決死の底力だったんだろうな、傍目にゃわかりづらかったけどその一撃で魔害物は一気に大ダメージ受けたんだ。それに進化したってっつんだし、上手く力を制御できなかったんだろうなあ、うん。で、ダメージと大き過ぎる魔害に耐えられなかったらしく、暴走しだしたんだよ、そいつ。無駄に魔害を放出しまくってよ、ばかばか周囲を壊してまわってたぜ。

あ？ この間どうしてたかって？ 逃げ回ってたに決まってるんだろうが。おれの華麗な逃げ足を見れなかったのは残念だったなあ。ま、そんなおれの必死の遁走中も相も変わらず魔害物は力を放出してたんだ。んなこと続けてれば必然的に弱まる。どれだけか経って力が格段に落ちたんだ。どんくらい力が落ちてたかって言うと、武器を扱う魔害物より弱かったくらいだぜ？

で、そんなチャンスを見逃さずにおれがそこはかとかなく地味に補助しつつ、雫がもう命懸けで魂燃やして戦って、なんとか打倒した、

って感じ」

『……というシナリオを私の口から報告しろ、と?』

六条は低くて感情のわかりづらい声音で要求を先回りした。やはり感情はわかりづらいし、気のせいかもしれないが、沈痛そうである。

判別ついているのかいないのか、おうと羽織は頷く。

「わかってんじゃねえか」

『……はあ。わかりました、私が上手く報告しておきましょう』

呆れてものも言えない。それでも六条は羽織の頼みを断れはしなかった。苦労は目に見えて、ため息を吐き出すくらいは勘弁してほしい。

「頼むわ、時久。お前の報告なら疑われることはねえだろうしな」

用件だけ告げ終えると、羽織は満足げに携帯電話を閉じ、羽織りの袂に仕舞う。

とりあえず、九条の屋敷に入る前に話をつけることはできた。

これで当面の問題はない。

これで、羽織の隠したいことを隠していただけるだろう。

条と四条が生存しているのも、魔害を操る魔害物への進化は条家に露見することになる。まさかその両者の口封じをするわけにもいかず、これは止めようもない前提だ。となると、疑問が生じる。

その魔害物は、一体誰が倒したのか?

油断とか慢心とか、まあ諸々あったけれど、それでも曲がりなりにも四条家当主を負かしたほどの魔害物である。それを倒すような

強者は、一体誰か。

まあ、羽織なわけだが……それを知られるわけにはいかない。羽織は徹底的に自分の力を隠蔽しておきたいようである。

倒した瞬間を目撃したのは当の羽織と雫、それにマッドのみ。この中で条家にことの次第を報告することができるのは羽織だけ。

他の人間の発言がない以上——条家とは無関係の上に口止めされた雫、又は敵の立場なマッドのふたりでは、発言できようはずもない——羽織の報告が嘘だなどと、誰にも気付かれることはない。……まあ六条は把握しているようだが、それは例外だ。

それで、上の報告内容である。

その報告は、六条の口から条家十門全てに渡り、文書までそのように記され、そして事実となる。たとえばそれがそれっぽいだけの真っ赤な嘘だとしても、だ。それほどに、六条の発言への信用度は高い。六条の言葉は、嘘でも事実となりえるのだ。羽織のことがそこから気取られることは、まずありえない。

問題は、あのマッドサイエンティストがどこまで知ったか。

サイエンティストを自称するくらいだし、頭の回転はそこまで鈍くないだろうから、もうだいたいバレているかもしれない。いやもしかしたら、全て杞憂でさっぱりバレてないのかもしれないが……どちらにせよ、他言される前に殺さなければ。

と、そんな邪悪な思案をする羽織を、雫は先ほどからずっとジト目で睨めつけており、その表情のまま口を開く。

「貴様と六条家当主は一体どんな関係なのだ……」

敬意も払わず、名字呼びもせず丸きり呼び捨てで、一体なにを頼み込んでいるのだ、この男は。しかも、それを承諾する六条家当主も当主だ。

気付いていながら、嘘の報告を呑み込むなんて、情報部としては最もやってはならない行為ではないのか。

羽織は芝居っぽく肩をすくめて見せる。

「はっ。お友達だよ」

「貴様の口からそんな単語が出てくるとは、冗談でも気味が悪いぞ」

また話す気がないことか、雫はやれやれと額に手をおいて首を振った。

話す気のない——秘匿しておきたいことが山のようにある。そのせいで、嘘の塗り固めの人格となっている。本心は、一体全体どうなっているのか、さっぱりな存在。

雫は、現在において羽織という人物をそう評価しなおした。

「……………」

ああ、それにしても。

こいつは……羽織は本当に強かったのか？

雫は戦いを終えた直後から、そんなことばかりを考えてしまう。

どういう視点で見ても、どんな角度から見ても、羽織は強者を臭わせることはない。強いと、全然到底これっぽちも思えない。

あんなにも鮮烈な強さを見せ付けられたというのに、それが終わればもうどこにでもいそうな嫌味な男に戻っている——別人のような豹変である。

もしやあれは錯覚だったのではないか。夢でも見ていたんじゃないのか。羽織は今感じる通りにあんまり強くないのではないか。雫はつい先ほどの記憶さえも疑えてしまう。

——今なら勝てそうだと、半ば本気で考えている自分がいる。

そんな馬鹿げた妄想が、即座に否定できないほどの強度の隠蔽。いや、これはすでに偽装の域ではないだろうか。強さが強さである

と、認識できない。どんな制御力だ、ありえない。

こんなの誰にもわかるはずがないではないか。

となると……そういえば浴衣や静乃は、羽織の本当の实力を知っているのだろうか？

主に隠し立てするような男ではなさそうだが、ここまで秘匿に執心していると、もしかしたら主にすら隠している可能性も否定できない。

だが――なぜそうまでして自分の力を、能力を隠したいのだろうか？

雫には、わからなかった。

そうこう思索に耽っているうちに、九条家の屋敷にまで辿り着く。羽織はいつもながら大仰な門をくぐりながら、独り言のように呟く。

「じゃ、とりあえず条をどう騙すかな……」

騙すことが前提かつ、雫は突っ込みたかったが、それより早く鈴の音のような声が響く。

「――羽織さまっ！」

「っ!？ ゆ、浴衣様!？」

息を切らせながら、浴衣が庭を突っ切ってこちらに向かって勢いよく走ってきていた。

焦って慌てて、何度か転びそうになりながらも、浴衣は羽織の前にまで辿り着く。それからざっと羽織の身体を見回し怪我がなさそうだと確認してから、胸に手をおいて安堵に息を吐き出した。

ああ、よかったといった風情の浴衣に、ようやく状況を認識した羽織が焦りまくって捲くし立てる。

「ちょ、いや、なんでお休みになられていないんですか！ ていうか、大丈夫ですか！？ さっきまで起き上がるのも辛そうだったじゃないですか！」

「あ……」

羽織に猛烈なまでの配慮を並べ立てられ、浴衣は今そのことに気付いたような顔をした。それから、どうにか説明しようと懸命に言葉をついでいく。

「その、条さんが帰ってきて、羽織さまが囧になるって聞いて……それで、あの――」

「……………」

「しっ、心配になって……疲れは残ってたけど、やっぱりいてもたってもいられなくて、それでその、あの――ごっ、ごめんなさい！」

なんやかんやとしどろもどろになりながらも、途中で悪いと思ったのか最終的には全力で頭を下げた。

経緯がどうあれ、安静にしていなければならぬ身体で無理に動き回る――それは羽織に余計な心配を与えてしまっただろう。しゅん、と浴衣は凄まじい速度でしおれていく。落ち込んで、怒られる準備のように身を縮める。

とはいえ、これでは怒ろうに怒れない。いや、雫とか他の誰それだったら嬉々として責め立てていただろうが、羽織は主限定でとにかく甘かった。

羽織はため息をこれ見よがしに吐き出してから、俯いてちようどよい位置にあった浴衣の頭に手をおいた。

「ご心配をおかけしました。この通り、息災ですよ」
「っ。……うん、よかった」

一瞬だけ驚いて、それでもその一言で、浴衣は言葉を失くしてしまつて目を閉じた。その前の落ち込みはどこへやら、まどろみのような満足感と心地よさがその小さな胸一杯に満たしていた。

と。

和んだ空気を、切迫した声が貫く。

「！ 羽織、雫！ 無事だったのか！？」

遅れて、条が駆け寄ってきたのだった。

おそらくは四条を預けて、報告を済ませ、そのまま現場に戻るつもりだったのだろう。焦りは額の玉のような汗が物語っていた。

「おう、無事だ無事。んな大声あげんって」

浴衣の頭を撫でながら羽織は、これ見よがしに気楽さを見せつけた。大丈夫である、問題ないからそんなに深刻な表情はするな。事を、荒立てるな——そんな意味が含まれていた。

条を騙す——それは既に始まっていた。

「どっ、どうなった、それでどうなったんだ！？」

それでも間近であの魔害物と向き合ったせいだろう、条の深刻さは少しも衰えることはなかった。

その深刻さを、ゆっくりとそぎ落とす。羽織は嘘を塗りたて、六条に話したのと同じ作り話を告げる。できるだけ陽気に、あくまで軽く、シリアスの色をとことん薄めて。

「それがなあ——」

かくかくしかじか。

目に見えて、条の氣勢は衰えた。疑うようなこともなく、納得し安堵しているようだった。単純に振り上げた拳のおろしどころ失くしたように、ドッと疲れが押し寄せてきて条は肩を落とす。

「マジかよ……あんだだけ必死だったのに、そんなオチかよ」

「わりい、わりい。いきなり進化されちゃあ、おれだって見誤るところくらいあるってことで、勘弁してくれ」

「む」

そこは確かに責めることはできない。自分も、冷静ではいられなかったわけだし。条は口を閉ざす。

傍で雫だけが、騙されているぞと言いたくて、けれど言えるはずもなかった。

殺すぞ——強さは全てが雲散霧消していて、少しも負けるとは思わないのに、あの時に刻まれた恐怖だけは寸分も減少せず雫の心を縛り付けていた。強くないのに、恐い。なんとも矛盾した感覚に、雫は覚えたことのない戸惑いの中にあった。

全て羽織の思惑通りである。思わずほくそ笑んでしまう。勿論、誰にも気付かれないように、だが。

——ヴヴ。

不意に、携帯電話が空気を揺らして自己主張を始めた。

どうやら、羽織の携帯電話だ。

話もついたところなので、まあ無視する理由もない。手馴れた仕事で袂から振動を続ける電話を取り出す。

六条が先の話について不明瞭部分を問うてきたか。思い、デイスプレイも見ずに電話にでる。

なんだ——羽織が口を開くよりも先に、電光石火の先制攻撃が鼓膜を突き刺す。

『やあ、九条 羽織だね?』

「――っ!」

不意打ちだった。

素晴らしいくらい見事な不意打ちだった。

これ以上ないほどに最高のタイミングの不意打ちだった。

事件に一旦の折り合いがつき、六条に報告を任せ、浴衣をなだめ、条も騙しおおせた。

そういう、とりあえずやっておくべきことの全てを完了し、ふうと気を抜いたその瞬間。物理的に身体から緊張感が解けたその瞬間。そんな小さく僅かな間隙を鮮やかなほどに見事、男はついてみせた。

驚愕は、驚倒は、衝撃は、だからひとしお。

それでも羽織は一切その動揺を外に漏らさずに、電話を少し離す。「――すみません。少々大事な電話がかかってしまいました、浴衣様は先にお戻りになっていてください。雫と条、お前らも一応は誰かに治癒してもらっとけ」

酷く事務的にそれだけ言って、羽織は返事もまたず足早にその場から立ち去る。

突然のことに一同、引き止めることすら忘れてきょとんとしてしまふ。そして我にかえった頃には、すでに羽織の姿は消えていた。

どれほどか歩み、そこはいつかの裏路地だった。羽織が雫と初邂逅した、ある意味での事件の発端の場所。

その無駄に広い裏路地に一切の気配がないことを確認し、羽織は電話を耳に寄せる。

すぐに、いやらしい声が耳朶を打つ。

『おいおい、聞こえているかい、羽織。あんまり無視されるのは好きじゃないんだがなあ』

そう、聞き覚えのあるこのふざけたニヤケ声は――

「マッド……」

『ほう！ 私の声がわかるのかね！ ということは、君はあの総会の場にいたのだね？』

どうやら、“彼我の対話”とかいう魂魄能力は本当に声だけしか通信しないようだ。マッドはあの場に羽織がいたことを知らないようである。まあ、バレたが。

どんな些細なことでも情報を与えるのはいい気分ではない。羽織は舌打ちした。

気にせずマッドは世間話のように口を回す。

『いやあ、だったら子供の能力を使ってもよかったかな。驚かれると思って、携帯電話の番号を調べ上げた苦労は徒労だったというわけかい。時間の無駄は人生の無駄。そういうことは早く言ってもらわないと困るじゃないか』

メチャクチャ驚いたけどな――羽織は思うだけにとどめ、馴れ馴

れしい態度には応えず無言しておく。

魔害物を倒してから――羽織が能力を披露してから、まだ一時間ていどだ。

その短時間でもって、名前とケー番が割り出されたか。

隠していたわけでもないの、そこまで驚くところでもないが、その行動の拙速さは驚嘆に値する。

羽織はもう一度舌打ちしてから、

「……なんの用だ」

余談はいらないと、ドスのきいた険しい声で告げる。

いきなり過ぎる接触。意図をはかりかねる。いや、そもそも最初からマッドの行動に意味があるのか不明だ。こいつは、一体どういう原理で思考し、行動しているのだろうか。

いや、理解の外の者を理解しようとしても無駄だ。そんなことよりも、建設的に会話を展開していこう。

マッドは特に怯えた様子もなく、いやね、とどこか嬉しそうに語る。

『お茶でもどうかと思ってねえ』

「……は？」

第十九話 対談（前書き）

このふたりの対談、書いてて楽しくなってきたり長くなってしまった……。

第十九話 対談

「悪いが、店は私の趣味で選ばせてもらったよ。ここの紅茶は私の
お気に入りだね」

電話から三日後の、とあるオープンカフェのテラス。

そこに、白衣の男と金髪の少女が座っていた。雰囲気をぶち壊し、
まったく風景に馴染んでいないが、当人たちは気にした様子の欠片
もない。

正直、羽織は近付きたくもなかったが、そうするわけにもいかな
い。座る二名の外見を注視しながらそのテーブルへと歩む。

白というべき銀髪を目にかかるほど伸ばし、その身は白衣で覆っ
ている。印象的な髪色だけでなく、日本人にはありえない白亜の肌、
彫りの深い顔。ともかく白人であることは確実だった。だからか、
見た感じでは年齢の判別がつかず、ともすれば二十歳とも五十歳と
もとれるという顔立ち。

優雅にティーカップを掲げたりなんかしやがって、紳士風味を装
っているやがる。なんとも胡散臭い男。

こいつが、マッド。マッドサイエンティストか。

魔害物の複製をばら撒き、条家十門にゲームを仕掛け、そして羽
織の抹殺対象である男。

外人さんだったのは意外——声だけ聞いた時は流暢な日本語で、

異邦人だったのはかなり予想外——だったが、羽織は対処法を特別変更することもない。

それよりも気になるのは、マッドの横に背筋伸ばして座る少女。

これまた日本人にはありえないような美しい金色長髪に陶磁器のような白肌をもつ少女で、やはり同じく白人であろう。年齢は雫と同じくらいだろうが機械のような無表情さは、その年齢には不釣合いだ。たとえるなら、美しい西洋人形だろうか。

で。一体、誰だこれ。何気なさを装って、羽織は口を開く。

「なんだ、その金髪の嬢ちゃんは」

「ん？ ああ、この子は私の娘だよ」

マッドは足りないと感じたのか紅茶に砂糖を混入しながら、隠し立てするでもなく簡潔明瞭に答えた。

それを受け、羽織は顎に手を置きながら、ふたりの向かいに座る。反対の腕は行儀悪く背もたれに腕を引っ掛けて。

「ん、そういえば子供がどーの言ってたな、お前」

「そうさ、この娘は長女のリクスという。今回はボディガードとして随伴してもらったのさ」

「へえ、ボディ——」

羽織は言いながら、何気なくプラプラと遊ばせていた右手にナイフを二本転移させる。

そして、明後日の方向に狙いもつけずに投擲。

もう一度転移、マッドとリクスという少女の眉間に——

「——ガードねえ。確かに、そうらしいな」

突き刺さる直前で、リクスが両方のナイフを掴んで見せた。

そのまま、リクスは握った両のナイフを握力で砕く。マッドは一切気にした素振りもなく、平然と紅茶を啜る。

「くく、手荒いなあ」

「条家の総会に乱入したどっかの誰かよりはまだまだ手ぬるいがな」

軽く流すようなことを言いつつ、気付かれないように羽織は目を細めた。まさかあの特別製のナイフを素手で砕くような輩がいるとは、少々驚く。

なにか強化系の能力者だろうか。

詮索を開始して――まあいいとやっぱり中断。

羽織は店員を呼びとめ、緑茶を注文――ないらしいので水だけ要求して、マッドに向き直った。向き直ったマッドの顔には、意外と書いてあった。

「おや、私が手の届く位置にいるというのに、もう諦めるのかね？」

「はっ、おれはお前の外見なんぞ知らねえんだ。今話してるお前が全然似てない替え玉でも気付けねえよ」

「ふふ、本当の私は遠くでこの対話を眺めている、と？」

「そうだとしたら、少しでもお前に手の内を明かしたくないからな」

「くく。ではリクスはリアリティのため、ということか。頭が回ることだ」

「はん、可能性の話だが、無視できる可能性でもないんでな」

とは言ったものの、羽織は案外にこの男がマッド本人ではないかと、ほとんど確信していたのだけれど。これまでの性格を考慮すれば、マッドの大胆さは一目瞭然で、きつとこういう場面では本当に出張ってくるだろう。

だがまあ、万が一、だ。

「殺してもいいが、めんどいしな。それより話があんだろ？ 殺すのはその後でも遅くない」

「おいおい、こんなところで人死になんておこったら、大変なんじゃないのかい？」

「別に。おれとしては邪魔が減って嬉しいだけだが。それともなか、もしかしてお前が死んだらおれの情報が公開されるようになってるのだ、とかそんな馬鹿くさいセリフでも用意されてるのか？」

「くく、そんな馬鹿なことを私が言うはずがないだろう。私を殺せば、それで君の情報は守られるよ。……おっと、私と私の子供たち、だったね」

「……子供たち」

視線だけが、リクスへと向く。少女はすまし顔で、一切こちらに注意を払っていなかった。面の皮の厚いこって。

そんな羽織の反応に、マッドは片方の眉を吊り上げた。

「んん？ ああ、そういえば説明していなかったね。君の能力ばかり知ってでは不公平なものな。私の魂魄能力について教えてあげよう」

「……………」

えー。

いや、願ったり叶ったりなのだが……なんでこいつはこんな簡単に情報を開示するんだ。秘密主義の自分が馬鹿みたいじゃないか。些かゲンナリしてしまう。

呆れ目は、次には掻き消える。

「私の魂魄能力は——“人形ヒトガタの創成”だよ」
「……………」

思わず素で、羽織は聞き返していた。計略とか演技とかも抜きにして、間の抜けた声を漏らしてしまった。

今この男は、なんと言った？

マッドはそんな羽織の表情がさもおかしいかのように、薄ら笑いを浮かべ再び同じ言葉を囁く。

「“人形の創成”さ」

「それ、は——」

「人の形をした存在を、生み出す。一言で言えば、そんなところかな」

羽織は限りなく瞠目し、マッドの横に鎮座する少女を凝視しながらまさかを口にする。

「まさか子供たちってのは、」

「察しがいいねえ。その通り。私の子供たちとは、私が創成したヒトガタさ。ただね、単なる人の形をした存在ではないんだよ？ それではただのお人形だろう？ 違うよ、人の形をした存在だ。人にあらゆる意味で接近し近接し漸近した存在さ。限りなく人である人の形——それが私の子供たち」

「それは、そんなのは紛い物——魔害物だ。人は神にはなれやしねえ」

考える前に、言葉は発されていた。それは陳腐な文句で、それで羽織は自分かなり動揺していることを自覚できた。

だって、そうでなくてはならない。そうでないというならば、人の枠から超越していることになる。

無——ささやかな魔益だけで、有——人に似たモノを創り出す。魂が曖昧で様々な可能性を秘めているからといって、流石にそれはもはや神の御業ではないか。

だが、マッドは首を振る。

「神？ ああ、そんなはずがないじゃないか。流石に無から有を創り出すわけじゃあないよ。」

私の魂魄能力は特殊でね、普通は魂魄から精製される魔益を消費して能力を行使するものだが――私は魂魄自体を使う」

ピンとくる。

「……それは、自分の命を子供に割いているということか」

「その通りさ。だから、そうだね。私のクローンという考え方もありかもしれない。まだしも、その言い方のほうがありえそうだとは思えないかい？」

「ち」

確かに。そのほうがずっと“ありえそう”な気がしてくる。それは魂の力の使用においては、途轍もなく重要なこと。“ありえない”と“ありえそう”では、天と地ほどの違いがあるのだ。

マッドは変わらず、一向に変調をきたさずに言葉を並べ立てる。

「先ほど魔害物と言ったね、そちらの考え方のほうがいいなら、それでもいい。私も魔害物によく似た存在構造だと思う。いや、違うのかもしれない。魔害物という前知識があったからこそ、私の認識がこうなってしまったのかも、しれない。」

根源は、もはやいくら思索しても辿り着くことはできない。ただ結果は確かにこうしてあるのだから、そのままありのまま語ることしかできないのさ」

理屈のようなことを、断言する。そのせいですぐには否定を思いつけない。

いや、思いつく必要もない。羽織はまたさりげなくリクスに視線をやりつつ、できる限りの情報収集をしておく。

「……外見は、おそらく人間と寸分ほどしか変わらねえんだろうが、それで中身はどうなってるんだ？ 人の形は模しても、人の魂^{なにかみ}まで創りだすなんてねえだろうな」

「まあ、確かに完璧なものは創り出せなかったよ。困ったことに私の脳内でも、流石にそれはできないとどこかで考えているのだろうね。だが――」

一旦区切り、マッドは紅茶を啜って喉を潤す。
それから続ける。

「だが、擬似的な魂魄は備わっているよ――魂魄能力に類似した“それらしいもの”を発揮する子たちは幾人もいた」

「クローン……お前と同じ能力か？」

「違うよ。私とは全く違う能力だった。“彼我の対話”だって、私の子の能力だと言っただろう？」

「ありえねえ……」

同じ能力だと言うならば、まだ納得はできないまでも、聞き分けることはできた。だが、違うなとすると――魂が独立している、別個ということになる。

魂が分離して、分離した衝撃で変化をきたしたとか、そういう感じだろうか。断定はできない、ただの仮説だ。

だがやはり、クローンを創り出す能力ではなく――ヒトガタの、創成。

「君の認識ではありえないのかもしれないね。それでも、私は君じゃあない」

「ち。そういう意味でも、お前は狂ってるよ、マッドサイエンティスト」

健常者とはまた違った価値観の世界を生き、異なった視点を信仰し進行する――端的に言って狂人だった。

見ている世界が、感じている世界が違うのだ。だから、常人とは決定的に思考回路が違い、認識の仕方も違う。さらに言えばイカレているから、自身の認識に疑いをもつこともない。

羽織は思考をカチリと切り替え、それがありえることであると納得する。自分はないと思うが、それは自分勝手。マッドには、マッドの世界観が存在するのだと解釈する。

だから、もう否定はやめる。めんどうだし。受け入れるのは簡単ではないけど、楽ではあるのだ。

「お褒めにあずかり光栄だね」

ほら、こんな侮辱の言葉を喜ぶなんて……もう、理解できない。理解しようとするのはやめだ、放棄する。これは、そういう相手ではない。

思考はもっとシンプルに。

ともかく、マッドには複数の手足となる魔益師が存在すると、そうだけ認識する。それだけでも厄介な話であるが、辟易するよりはマシである。

と、ようやく理解を捨てる方針にしたというのに。

「でもねえ、やっぱりこの能力には無理があったのさ。無理というか、人間的な限界かな？」

この能力で生まれる子供たちは精神面では不安定極まりなく情緒が欠如し、身体面でもすぐに死んでしまうほどに身体が脆く虚弱で儚かった」

「あ？」

ここで逆接かよ。どうしてこのタイミングを選んだのか、さっぱりである。もうこの男とどう会話していいのかわからない。羽織は真面目に困惑してしまう。

それにじゃあ目の前にいる、この少女はなんだっていうんだ。いや、情緒は確かに欠如しているようだが、死んではいけないではないか。

マッドにとっては正当順当な会話発展だったのだろうか、ほんの少しも乱れはない。

「サイエンティストと言ったろう？ 私はね、魂魄の力でなせないなら、別の力を頼ることにしたのだよ」

「……まさか、」

「きつとご名答——科学さ。」

現代の科学技術ならば不可能ではない。人口臓器、人口心臓、人口筋肉なんて具合にね。肉体の改造強化に加えて、全く使えない部分は機械で代用して取り替えた。子供たちの身体の四割ていどは機械で保っているのさ。しかもついでに、基本的な強度も向上させておいた。筋力、反射速度、骨格から内臓まで諸々を戦闘用に超強化。並みの魔益師風情なら魂魄能力なしでも、私の子供たちは性能で上回っている。

ま、いわゆるところの強化人間って奴だね。それとも改造人間のほうがお好みかな？ ああ、私が創ったのだから人造人間でもいいかもしれないね。呼称は任せるよ」

「——っ」

また。またこいつは……重要過ぎる事項を世間話と同じ扱いで語りあげやがる。

正直いって、嘘だありえねえどういう意味だ、とか言いたくてた

まらなかったけれど、羽織は字面どおり受け取ることと否を口から出さなかった。

サイエンティスト
「科学者……マジだったのか」

「当然だろう。この白衣が目に入らないのかい？」

「……………」

白衣を着ている人間が全て科学者であるとも言いたいのか、マツドは本気で不可解そうな顔をした。

冗句のようにとぼけたことを言っても、頷いたことは羽織にとって驚異にして脅威。

魔益師は原則として機械類を嫌う傾向が強い。

まあ、携帯電話などは便利なので、嫌悪感を堪えてまで使うが。それでも、やはり魔益師にとって機械——科学というものは“なんとなく嫌悪してしまう”ものだ。

羽織は自然とマツドの横に座るリクスへとみたび目をやる。

眉間に転移したナイフを受け止めるような人間離れした反射神経。

羽織の所持する特別製のナイフを砕くような人間離れした膂力。

魂による自己拡張強化でなく、それができる非常識。

科学——か。

「魂とかファンタジックな話だったのが、いきなりSFじみてきたな」

「行き過ぎた科学はファンタジックなものさ。それに、フィクションではないしね」

「……科学と魂は不可侵であるべきだろうが」

「暗黙の了解のことかい？ そんなものは、私には関係がないね」

雑談の中にも、一切の陰りはない。魂と科学の暗黙の不可侵を破ることへの躊躇も罪悪感もないというわけらしい。

狂うという意味は、逸脱ということ。既存の枠を、確かにこの男は平然と逸脱しているようだった。

誰でもある、“なんとなくやってはいけない”という抵抗感すらないようである。

そこに微かな苛立ちを覚えつつも、羽織は軽薄さを忘れずに突っ込んだことを問う。

「科学者ってんなら、パトロンがいるんじゃないのか」

研究だの実験だの、なんにしても金があるだろう。個人的な資産家というわけでもないのなら、どこかの大きめな組織に資金援助の後ろ盾を求めるなんてのはよく聞いた話だ。

魔益師にも機関——組織があるのだし。

個々人で戦うよりも、やはり組織立って戦ったほうが有利なのは明確なのだから、魔益師だって組織を作る。そういう組織に後ろ盾を求めたのではないのか。

「ふうむ——」

珍しく情報開示を逡巡しているのか——まあ、個人的な話ではない。少しは慎重になるか——マッドは顎に手をあて黙考し

「“黒羽”」

それでもやっぱり手札を公開する。じゃあ今の逡巡はなにを悩んでいたんだよ。突っ込みたかった。が、それよりも重要なことのほうに突っ込まなければならなかったために、泣く泣く断念。

「“黒羽” つつうと、退魔師四大機関の一角のか……。思ったよりもメジャーでさえ後ろ盾じゃねえか」

羽織の口調には、そんな出資まで最近の退魔師機関はしているのかと、新鮮な驚きが含まれていた。

メジャーな機関でさえも暗黙の了解は踏みにじるということは、魂と科学の不可侵とかいう考え方は実は古くなっているのかもしれない。羽織はそう考えを改めるべきかもしれないなかった。

条家十門は、古から存続する退魔師の家系。であるからして、伝統とかにはうるさい傾向があり、羽織もそこに属しているので考え方が自然と古くなっていったのかもしれない。

まあ、“黒羽”だけが踏みにじっている、道を外しているのかも――しれないが。

羽織はあまり外部には気を払っていないからよくわからない。とはいえ“黒羽”って黒だし、悪そうではある。かなりタチの悪い偏見だった。

悪いのか悪くないのかはさて置いても、無償で後ろ盾をするなんてことはありえない。パトロンというのだから金をだしてもらって代わりに見返りを用意しなくてはならないだろう。四大機関の一角から金を出させるなんて、どういう対価を差し出したんだか――

ああ、いや。そうか。

「お前の、子供か」

「その通り。魔益師の業界では、どこも慢性的に人手不足だからねえ。私の子供たちはその解消にはもってこいというわけさ。実用化も、僅かずつだが始まっている」

「確かにお前の話した通りの能力と科学力なら、うまいこと機能すれば量産は可能、か」

苦々しい口調なのは、別に“黒羽”のこととは関係ない。ただ、マッドの戦力が思ったよりもずっと量質ともに高そうであることに、面倒を感じる。

羽織の表情を眺めながら、マッドはニヤニヤと底意地悪そうに笑い、肩を竦める。

「条家十門ですら、人手不足は否めないだろう?」

「……どうかな」

「今回、私が仕掛けたゲームにも、討伐にでた退魔師の人数は少なかったようだしねえ。質は四大機関随一でも、量は四大機関最小なものな。そこが、条家のつくべき唯一最大の弱点といったところか。そこをつけば、壊滅はできないだろうが、戦力を大幅に減らすことはできると思うのだがね。まあ、もう条家には興味は薄れたが」

いきなり、マッドは自分で言った言葉にハツとする。

ああ、そうだったそうだったと、繰り返し呟く。

「そうだったね、私は条家から興味が薄れたのだったよ——私の興味の全ては、条家から君に移ったよ、羽織。そのためにお誘いをかけたというのに、話が本流から離れてしまった」

しまったなあ、と全然困ってない口調でぼやくマッド。

「本当はね、条家に仕掛けるための準備もあったのだが、やめにするよ」

「てか、なんで条家を狙う——や、狙ってたんだよ」

興味がないとか言われても、それでも理由は訊ねておきたかった。そんな言葉の確度は、どうせ信用ならないのだから。いきなり反転して興味が蘇ったりしたら厄介。聞いとくだけ得というものだ。

「ふむ? まあ、既に興味はないし、言っても問題はないか」

案の定、情報の秘匿などは考えておらず、マッドは口軽く喋りだす。

「理由はふたつ。

ひとつは、九条の治療能力。

またもうひとつは、条家が封じているという“人型の魔害物”さ」
「――」

堪えようもなく殺意が跳ね上がった。

その、その理由は到底許容できるものではない！

感情の赴くままに、羽織は腰をかすかに持ち上げて――

マッドは制止するように両手を広げ、まあ待ちたまえとやや困ったように告げる。

「もう興味はないと言っただろう？ そんなに怒らないでくれよ。

私の興味は、今のところ君にしかない」

「……ち」

言葉に我を取り戻し、羽織は舌打ち着席しなおす。

不覚だった。感情を御せないようじゃあ、魔益師としては二流。

未だ自分は二流の魔益師でしかないのか。

顔を背け、背もたれに体重を全て預けて力を抜く。不機嫌さを覆い隠すような声で、羽織は先を促す。

「それで」

「ふむ」

羽織の様子に些かならない興味をそそられたが、マッドは自重。話を進めることにする。

「この三日で、私は君について色々調べさせてもらったよ」
「だろうな」

三日という時間を置いた意味。無論、羽織もわかっていたが、それはわかってからとて避けられる部類の話ではないので、どうでもいい。

冷めた態度の羽織に反して、マッドは昂った口調でまくし立てる。

「しかし羽織、君は面白いね。非常に面白いよ。調べるほどに面白くなってくる。

九条の血が流れているわけでも、婿にきたわけでもなく九条の姓を得ているなんて、どうやったんだい？ それに、総会に出席していたということは、当主の補佐まで務めているということだろう？ もはや開いた口が塞がらないよ」

「は」

知れてどうなるものでもない情報の羅列で、逆に息を抜けた。表面的な情報がいくら調べられても問題は――

「そして、そんな面白い情報を突き抜けるほどに興味深いのは――君の魂魄能力」

「……………」

そうだ。それが一番の問題だ。

最初に適当なことを言って安心させておいて、その安心を見計らった時に重大なことを言って動揺させる。常套手段だが、僅かに羽織は動じてしまったかもしれない。自分ではしていないと言えるはずだが、相手にはどう見えたのかは永劫わかることでもない。

とにかくは、無言を選択。マッドは言葉を重ねる。

「万象の転移」だったか？ なんと恐ろしい能力だねえ。魔害型の魔害物をものもしないとは、正直私も言葉を失くしてしまっただよ。茫然自失というやつだね」

能力の名前まで知れているということは、どういうわけかは不明だが、あの時雫に語った全てが知れているということだろうか。警戒の度合いは上昇していく一方だ。

「それで、だ。

君の能力ならば——私の夢を叶えることが、“生”を支配することが、できるのではないかい？」

“生”の支配。以前も語っていた夢。意味するところはまったくの不明。羽織は無難に不躰に無愛想に切り捨てる。

「知るかよ」

それこそ知らないとばかりに、マッドは滲み出る狂気を膨らませながら演説のように語り続ける。

「くく。万象——定義が広すぎて、なにを転移できるかは曖昧になる。それは能力者が定義づけるということだ。魂魄能力とは、魂の構造でその原型が決まり、無意識からの定義づけで細部と能力の範囲が決まる。

さて。万象——万象、万象、万象！ 君にとっての万象とは、なにか？ 九条 羽織の定義する万象とは、一体全体どんなものを指すのだろうか」

ああ、と。ああ、と羽織はため息を吐き出す。

どうも最悪なことに——最も知られてはいけない思考回路の持ち

主に、自分の能力を知られてしまったようだ。

認識。

人によつては、植えついたイメージ、存在定義、独自の回答、不変の確信、思い込みによる偏見、個人にとつての常識などと呼称は様々だ。マッドは定義と言っているがまあ、今は認識としておう。

その認識という奴が魂を頼って生きる魔益師にとっては、かなりの重要な要素なのである。

魔益師は自分の認識により魂の力を拡大解釈し、能力の内容が決定するなんてことがある。まあある。よくある。よくよくある。

たとえば、“軽器の転移”という能力があったとして、“軽器”とはなにをさすか？ “転移”とはどこまでをさすか？ 能力者本人の認識により変動する。

常識で考えれば、“軽器”とは軽い道具のような解釈だろう。だからナイフは転移できるだろうし、携帯電話も転移できてもおかしくはない。その能力者の彼が、それを“軽器”と認識さえすれば、転移できるのだ。

だから。

彼が軽器という定義に剣を心底から含めば、余人にはそれが軽器ではないと判断されても、転移可能なのだ。転移という単語を、空間を介さすどこにでも瞬間的に移動する現象であると定義すれば、その通りになるのだ。ただし、それは魂の底から絶対の確信をもって断言できるほどの認識が必要である。

そうになると、能力名が曖昧であればあるほど、拡大解釈は簡単となるのがわかるだろうか。そのため曖昧な能力ほど厄介であるといえる。

そこにきて。

“万象”という言葉は、どうだろうか？

先にも挙げたが、“ありえない”と“ありえそう”では天地の差があるとはこういうことだ。

“万象”という言葉であれば――

「――君ならもしかして、概念までも転移させることができるのではないのかい？ “ありえない”とは言い切れない、“ありえそう”と言ってしまえるのではないかい？」

「……………」

前回の戦闘では意図的に物理的なものしか転移しなかったのに、無駄な細工となってしまうたようだ。

まあ、能力名がバレてた時点で、そう考えるだろうことはわかっていたが。

なんも突っ込んでこなかった雫が阿呆なだけで。

羽織が無言している内にも、マッドの弁舌は加速を続ける。

「そして概念の転移がもしも可能だというならば！

――たとえば死という概念さえも、転移できるのではないかい？」

きっとおそらく間違いなく、これがマッドの本題なのだろう。これだけを、羽織に問いかけたかったのだろう。

「死という概念を死者から転移し、人を蘇らせることが、できるのではないのかい？」

「……それが“生”を支配するってことか？ アホらしい」

ヒートアップし過ぎだ。勢いを殺すようにして、羽織は心底本気で軽蔑を吐き捨てた。

軽蔑を真っ向から受け止めて、マッドは鷹揚に首を振る。

「違うね。それだけじゃあないさ。それだけでは死者蘇生だよ。“生”の支配に比べれば、まだ一段下さ。前提、というよりは必修かな」

羽織は重苦しく息を吐き出し、否定を全面的に押し出す。

「死の概念を死者から除いたとして、生という概念がもはや失われた死者が生き返るなんて、ありえるわけがねえだろ」

「ならば別の生者から生という概念を転移させればいい、そうだろう？ まあ、生の概念を失ったものは、死んでしまうだろうがね。」

ほら、死者の蘇生が、君なら可能なのではないかい？」

「無理だ」

くだらない。くだらないが、その思想は捨て置けない。羽織は無理であることを万感の否を込めて言って聞かせる。

「人間の力で、そこまで摂理に反することはできやしない。お前が言った言葉をそのまま返してやる、それは人間的な限界だ。なにをどうしようと、死んだ奴は生き返らない。たとえ生の概念を植え付け、死の概念を取り除いても、それはそれだけだ。なにもおこりやしねえよ」

「ほほう、まるで試したことがあるような言いようじゃあないかい」「んなわけねえだろうが。はじめっから不可能なことをやるなんて意味がない」

「意味がなくとも可能性にかけてやってしまう。誰か大切な者が死せば、ね」

「はん、知った風に言うじゃねえか。経験者は語るってか？」

「ふふ、さてねえ」

ああ言えばこう言う。なんとも陰悪極まるギスギスした会話である。

そんな中、先に折れたのはマッドだった。

「わかった。蘇生に関しては、君にも不可能としておこう」

「誰にも不可能だったの」

「私がやるとも」

いや、折れたというよりも話題の変換のようだ。

「では、また切り口を変えて問おうか。」

蘇生ではなく……不死はどうだね」

ああ——本当に、最も知られたくないような思考回路の持ち主に知られてしまった。

そういうアホな考えを持ち出す奴がいるから、羽織は能力を隠さなければならぬのだ。

確証は全くないのに。むしろできないであろうことは簡単に想像つくだろうに。

それでも、愚か者全ての悲願たるそれが“できるかもしれない”。それだけで、人は狂って果てる。果てても狂おうとする。

羽織は視線を逸らし、侮蔑を突きつけるように言って捨てる。

「けっ、お前思ったよりかなり俗物だな」

「俗物……まあ“生”の支配とは、なにも特殊な願いでもないありきたりなものだから、そう思われても仕様がなとは思おうよ」

なにも恥じることはない。マッドは堂々とした態度を崩さず、久方ぶりに紅茶を啜る。

「話を戻そうか。」

君の能力ならば、そうだね……老化の概念を除けば不老で、死の概念を除けば不死となるのではないかい？」

「ならねえよ」

いい加減鬱陶しい。羽織の言葉には荒れが見え隠れする。

対して、一切その性質が乱れることなく、マッドは嫌味な笑みをたたえる。

「本当かなあ。こちらの問いは少々根拠があるよ？」

「あ？」

「羽織、私は君のことを調べさせてもらったと言ったじゃないか。十数年前までの記録は一切ない。これも不審でなにか考えさせられるが、今は空白期間はおいておこう。私が取り上げたいのは、君が表沙汰にでた、十数年前の話だ」

「……………」

「君は、唐突に九条の使用人として雇用されたね。そして、

そして君は、それからずっと変わらずその容姿のままだ——これは、どういうわけだい？」

「若作りなだけだ」

まるで用意していたかの即答。その返答が、今までよりもほんの少しだけ早かったことに、マッドは楽しげに頬を歪ませる。

「苦しいなあ。君は、自身から老化という概念を、死という概念を、転移し捨て去ったのだろう！？ 君は不老不死なのではないかい！？」

「できねえって、言ってんだろ？ 夢見すぎだよ、てめえは。そん

なこと、常識で考えてできるわけがねえ。摂理に反してる」

「いや、できるね」

「できねえ」

「できるね」

「できねえ」

「できるね」

繰り返す同じ言葉を紡ぎながら、羽織の頭のなかは冷め切っていた。

ああもう。

だめだ。

話せば話すだけ推測される。話の齟齬が晒される。

言葉とは重ねれば重ねるだけ薄っぺらになっていく性質をもっているが故。

これ以上、羽織が否定を積み重ねても、マッドの確信は少しもブレたりはしないだろう。何故なら、この男の中では既に、羽織にはそれが可能だと狂信が生まれているのだから。

口は回し続けながらも、その両手元にナイフを四本ずつ——計八本転移させる。

——前言撤回させてもらう。お前はダメだ。あっちゃいけない、たとえば偽者でも——ここで、

「できるね」

「できねえ」

「できるね」

「できねえ」

「でき——」

「死ね」

今度は加減なく、羽織はナイフを明後日の方向に全力投擲。転移。マッドの頭頂部、眉間、両のコメカミ、両目、頸部、心臓の即死八点を同時に狙い撃つ。

瞬間。

——目標まで到達することなく、ナイフの全てが小爆発を起こし爆散する。

「！」

いきなりの爆破。

何故——魂魄能力しかありえない。ならば発信源——ひとつしかない。

首を捻り、マッドの横にある少女に視点を合わせ、その殺気を感じずる。羽織はその場から大きく跳び退く。爆破の発生。元いた空間が焼き払われる。

マッドのボディガードにして強化処理を施された金髪の少女——リクス。

「ち、邪魔ばつかすんな嬢ちゃん」

喋りながら、羽織は能力を推察する。

なにかの能力を応用しての爆破というには、それが速すぎる。単純に爆発を起こす能力だと推定。素でこの威力となると発生ではなく、まあ生成ほどこか。

他にも様々な可能性はあろうが、可能性の最も高く、かつ最も平凡な答え。それを、鎌かけに呟く。

「“爆破の生成”ってところか」

「……“爆撃の生成”」

いや、動揺のどの字でも表にだしてくればラッキーの話だったのだが、律儀にもリクスは小声で訂正してくれた。無表情で。
って、

「ほとんど正解じゃねえか！」

「くく」

「！」

突っ込んでいる場合ではなく。

その頃にはマッドは席を立ち、後ろでに手を振っていた。

「では、私はそろそろ帰るとするよ、羽織。また今度、だ」

「なっ、逃がすか、待ちやが——」

れ、とまでは言わず、リクスはその魂を具象化。羽織はリクスの具象化したその武具に目を釘付けにされる。

一見しただけでは、ゴテゴテしい鋼の筒。というか棒。

棒の先端には丸い穴があいており——というか巨大なライフルである。

馬鹿でかい銃身の、超巨大武器。長大巨大なライフル銃。

銃——いや、やはりそんな単語は似つかわしくない。あれはもはや砲台だ。もれなく間違いなく爆撃砲だ。

その砲身は全長二メートル以上あり、持ち主であるリクスよりも長大で、絶対に個人が運用するには無茶が伴う兵器である。

砲身の内部にグリップとトリガーは存在するのだが、それが砲身に対してなにかの冗談のように小さく——いや、人間単体の手のひらで握るに適したサイズであり、これが個人用の兵器と主張している。だが、無茶苦茶だ。あんな大きな砲台を、どうして個人が扱えるようか。普通なら複数人、チームで運用するべき組み扱いの武器で

あろうが。

言ってみれば、カノン砲の砲身だけを持ってきて、どうにか弾を撃てるように改造したような感じだ。

いや、最近の若い魔益師たちには、近代銃火器が具象武具となるのは殊更に珍しいわけではない。ないが、これは……。

そんな大砲を少女は軽々と持ち上げ、やはり大きな砲口を羽織に突きつける。

って、いや軽々と？ あの重量を簡単に持ち上げるだなんて、たとえ具象武具だからって無理がある。

まあ、確かに認識しだいでは具象武具の質量は操作可能だが、にしたってあんな見るからに凄まじく“重そうな物”を軽いと、そう思い込めるもんなのか。それともリクスとかいう少女は、そういう稀有な思い込みを肯定できるような人材なのか。

「くく」

——違う。

羽織はほんの僅か前の会話を思い出す。ついつい数秒前の思考を思い出す。

筋力の強化。肉体の改造。強化された人間。改造された人間。そうだ、彼女は人間ではない。ヒトガタをした、いわばその存在自体からして兵器。

あんなか細い腕をしておいて、その臂力は常識外れの桁外れなもの、それならば当然だ。

羽織が向けられた砲口から全力で逃れようと駆け——マッドが遠退きながら、背を向けたままに、最後にひとことだけ響かせる。

「撃ちなさい」

「シュート」

「っ!？」

リクスはその命に躊躇わずトリガーを引く。

轟音と同時に弾丸の射出。

放たれたそれは球形弾丸ではなく長形弾丸であり、もはやミサイルのような巨大な弾丸である。射出とともに回転が弾頭に加わり、精密なる射撃で羽織に襲い掛かる。

とはいえ羽織も先だしの回避が成功。高速の弾丸をギリギリで避けきる。

が。

弾丸は地面に着弾。

そして、

――！！

大爆発。

魂魄能力“爆撃の生成”による、精密爆撃であった。

その強大なる一撃は、先ほどとは比べ物にならないほどの大爆発となり、カフェのテラスを丸ごと吹き飛ばし焼き飛ばしたのだった。

第二十話 造形師

カフェ爆撃を原因としての死傷者は、幸いにして皆無であった。それ以前の羽織とマッドの剣呑な会話の雰囲気から客はいなくなっていたし、店員たちも大爆発の前の小爆発に反応して逃げ出していたからである。

死傷者ゼロ——そう無論に、羽織も平然と健在であった。

あの時羽織は、自身に害ある分だけ爆熱と爆風と爆圧——ついでにうるさそうだったので爆音も——をよそに転移していたのだ。

そして大爆発に周囲が騒然となるのに乗じて、羽織はその場から離れた。そうして今、怪我人だの店の崩壊だの、一切を気にせず帰宅の道すがらぼんやりと思案していた。

「ふむ」

マッドの後ろには組織がいた。思考の焦点はそこである。

それは面倒な上に厄介で、こちらの行動が狭まる事実である。まあ、知らなければ不味っていたので、地味ながらい情報ではあるが。

組織を相手どるとなると、こちらは組織として行動できない。組織で動けば、向こうも大ごとと解釈して組織単位で動いてくるからだ。

そうになると、最悪それはこちらの組織と向こうの組織——条家と

“黒羽”の抗争に繋がってしまう。小さな因で、大きな抗争になるなんて、別段に珍しくもない。

その抗争が不味い。すごく不味い。とっても不味い。

どちらの方が強い弱いではなく、魔益師同士——人間同士で争っていられるほどに世界は安穩とはしていないのだから。

四大機関の一角でも落ちる、とまではならないだろうが、その勢力を減衰されては、魔害物の撃破率はそのままおよそ四分の一となる。

そんなこと、わかっているのに。わかっているのに争うのが人間だ。

もともと組織同士は仲良くないし、小競り合いなら度々ある。しかもその四大機関のうちで、マッドが属しているところが。

「クロバネ黒羽”とか、一番困るよなあ……」

四大機関——世に幾つもある退魔師機関の中で、その実力と規模において他の追随を許さない裏側において最も有名なよつつの組織を総称してそう呼ぶ。その一角にして、四大機関の内で日本最大級の規模を誇る組織こそが“黒羽”だ。

歴史は浅く質より量の組織だったが、最近は構成員の実力も増しており、魔害物の年間討伐総数は昨年、一昨年ともに四大機関トップである。

まあつまり、有名で大きくて強い組織である。

そういうビッグネームは相手取るのは難儀ひとことに尽きる。

それに、“黒羽”は確か条家とは不仲だった記憶がある。

加えて厄介なことに“黒羽”は、人間同士の争いもそれが利となるならば喜んで実行するような組織だ。

利——条家への敵対は、損もあるが利もある。

損とは無論に、その実力を指して敵対するのが馬鹿らしいという意味だ。喧嘩を吹っかけて、負けていては世話がない。

だが、その損をも逆転する利がある。

なになって、最強だ。

もしも条家に勝利すれば、退魔師機関最強の名を得られるのだ。一条家当主を負かすことができれば、退魔師最強の栄誉が与えられるのだ。それは酷く魅力的な称号ではないか。

そういう意味で、条家は他の四大機関に隙あらば狙われている。まあ条家は人間同士の争いをできうる限り回避する傾向にあるので、大きな抗争をしたことは数えるほどしかないが。

その数えるほどしかなかった抗争の数を、こんなことで上乗せするわけにもいかない。

——それに条家の減衰は、最悪に繋がる。直結してると言ってもいい。だから、抗争など起こすわけにはいかない。

つまるところ、羽織は羽織という個人で、マッドという個人と喧嘩という形で穏便に済まさなければならぬ。組織を、その諍いに介入させてはならない。

とはいえそうなると、数の上で圧倒的不利となる。

敵勢力の正確な数はわからないが、おそらく多数。マッドの能力に、その子供の能力——“魔の複製”——も考慮にいれると頭痛を催す兵力総数だ。

対して羽織はひとり。条家の手は借りれないのだから、完全に個人である。

物量戦になれば勝ち目は限りなく薄い。

いや、全力出してもいいなら羽織の前に数なんざ意味をなさないが……それはできない。絶対に、できない。

羽織は全力を出したくないのではなく、ほとんど出せない、という言葉のほうが正しかったりするのだ。

というわけで、真っ向勝負は拒否。てか無理。

なんで、とりあえず頭であり生産ラインでもあるマッドを殺すこ

とだけを考える。多数を無視して個人を狙う、言ってしまえば暗殺の形が望ましい。

もしかしたら、創成者が死ねば創成物は消滅するかも、しれない。その可能性は淡いというか、泡のような期待だが、ゼロというわけでもない。

にしても、ひとりでやるには色々荷が重い。猫の手でも借りたいが、条家の手は借りれない。なんとも奇妙な状況である。んん、ならまあ。

「よし、雫を手駒にしよう」

メチャクチャ軽く、羽織は人権無視の宣言をした。

しかも自分の案が悪くないものじゃないかと、羽織は何度もひとりで頷いていた。

酷い。

だが、羽織的には悪くない案なのだ。本当に。意地悪とかではなくて。

フリーという肩書きがいい。組織と組織の間にある軋轢やら事情やらを考えなくて済むし、死んでも文句言う奴はいない。

雫は組織と組織のデリケートな問題を、全て無視できる随分とちよいどいい人材なのである。

とはいえ、この駒は残念ながら強くはない。もう少し強くないと使える駒も使えない。切れるカードも切れない。だが、いきなり強くはなろうともなれるものではない。なれるなら誰も苦労はしない。とりあえず使えるレベルにまでは引き上げてから、手駒として活用しよう。本人の同意もなしに、羽織はサクサク雫の道筋を決めていた。

さしあたり、雫に必要なのは強さの前に経験だ。

そう、たとえば自分より遙か格上との戦闘経験とか。

以前の武器を扱う魔害物六割戦の時や、魔害を扱う魔害物戦の時、

圧倒的な力を見せ付けられた途端に雫は硬直してしまっていた。

それは確かに人間的な必然だが、退魔師としてはダメだ。もし相手が人間ならば、知恵ある者ならば、気圧された時点で首が飛ぶ。怖気づいた瞬間に心臓を刺される。何故なら人間は魔害物と違い、意図的に威圧してくるのだから。戦いを楽しむべき遊戯ではなく、他者の否定の場と捉えているのだから。

強者に対する気後れ。それを克服するには時間をかけての経験の蓄積か、荒療治しかない。

というわけで、羽織は迷いなく荒療治のほうを選択。雫の人権は、やっぱりガン無視である。

まかり間違って勝ち得てしまえる程度の格上では意味がない。絶対的に一ミリも一ミクロンも勝ち目のないような、そんな理不尽な敵と相対し、生き延びる。

そういう経験をさせよう。

そんな決意をかためたことで、羽織は少しだけ心が軽くなったのを感じた。それと同時に、纏う羽織りがいつもより軽いことにも今更気付いた。

「ん、そういえば、ナイフが砕かれたんだっけか……」

羽織は思い起こし、進路を変更する。

羽織は皆に自身の能力を“軽器の転移”と誤認させるために、ナイフその他諸々の装備を羽織りの懷や袂に忍ばせてあったりする。だから羽織りは重いのだ。それが軽いというのは、装備的にちょっとした不安が付き纏う。

ので、砕かれたナイフを補給しておくことにする。

テクテクと少しばかり歩んで、とある工房へと辿り着く。といっても、外見上はどこにでもある一軒家とさして変わりはない。だがここは、知る人ぞ知る有名な刀剣屋なのである。

ただしインターフォンなどという高級機器はないので、羽織は原

始的ながらノックを数回。

「よう、いるか？」

「羽織か……なんの用だ」

声で判断されたらしい、すぐに刺すような男の声が応えた。

とりあえず留守でないことをそれで確認してから、羽織は軽い調子で工房の主に語りかける。

「ナイフが壊れたんだよ、不良品じゃね？」

「たわけ。また壊したのかお前は、お前はまた壊したのか。製作者の気持ちも考えろ。それにナイフは悪くない、お前が悪い」

はあ、と男はため息を吐きながらドアを開いた。

茶の髪は短く簡素にまとめられ、表情は引き締まっている二十かそこらの青年。言葉を反転して二度言う謎の癖があるこの男の名は藤原 圭也^{けいや}という。彼は魔益師であり、その魔益師の中でも造形師と呼ばれる、なにかを造ることに長けた者だ。

たとえば圭也の魂魄能力は“剣の創製”、刀剣の類を造る造形師というわけだ。

羽織とは旧知の仲であり、そのため羽織のもつ刀剣類は全て彼の作品。だからこそ羽織のナイフは異常な硬度と強度、殺傷力を誇るのだ。

「二度言わんでいい」

と、羽織は毎度の突っ込みをいれておく。

いつもいつも変わらず飛んでくるその突っ込みを受けて、圭也は苦笑する。

「相も変わらず変わらず相も、お前はお前だな、羽織」

「どういう意味だ、コラ」

「まあ、立ち話もなんだしな。入れ」

おじゃまー、とか完全に友達の家に来たという感覚で、羽織は久々に圭也の工房に足を踏み入れる。

踏みいれてすぐは工房であり、刀剣を作り売りさばくための仕事場のスペース。簡素な椅子が二個、無造作に配置してあるだけの質素極まる空間だ。

他には奥に続く扉がひとつだけあり、それは圭也の自宅へと続いているらしい。仕事場と自宅が一体化しており、工房と居住部の境の扉である。

圭也は椅子の片方に座り、もう片方の椅子には羽織が遠慮もなく座り込む。凶々しいその所作を確認してから、圭也の方から切り出す。

「それで、どんな風にして俺の刀剣を殺したんだ、お前は」

睨むようにして問うてくる。自分の作品を、自分の子供かなにかのように大切にしている圭也からすれば、それは気になるところなのだろう。

羽織は意地悪に口元を緩め、つい先ほどの事実を言う。

「あー、間違いなく不良品だって、あれ。なんせ、素手で碎かれたぞ」

「……なに？」

「握力で、お前の認識は碎かれたぞ」

ここで少し唐突な話だが、魂魄能力にもある程度の系統があり、位階がある。無論、系統のない能力も魂の形によってはありえるが。

その系統のうち、圭也の能力“剣の創製”は作製系となり、位階でいえば最上級の創製である。

ちなみに作製系の位階は三段階にわかれ、最下級位階の作製、中級位階の精製、最上級位階の創製となる。

そして位階の違いによってその能力の強さが違うのは勿論のこと、作製系統最上級位階の創製ともなると、作製したモノにはその作製者の認識が付加される。

『俺が創り上げ、鍛え上げたこの刀剣は、どんな何より硬く鋭く、なにより強い』

そんな圭也の強い認識が、圭也の造った刀剣には付加されている。創製した武具もまた、認識の強さによってその強さを増すのだ。

圭也の刀剣は、彼の認識の強さからそれこそ具象武具に匹敵する武具となっており、並の刀剣には及びもつかないほどの業物として完成している。

とはいえ強度よりも切れ味、鋭さを要求したのは羽織であり、そのため圭也の作品の中でも砕かれたナイフは耐久性の低い部類であると言いつてきなくもないが、

それでも――素手で圭也の刀剣が砕かれるなど、そんなことがありえるはずがない。信じられない事実であった。

圭也も動揺してしまって、

「ばかな」

そんな言葉を漏らす。自身の作品に対する自負が、そこには見て取れた。

であるが、すぐに取り戻す。

「……いや、そうか。俺もまだまだ未熟だな。未熟だ、俺も」

日本で有数の造形師にして、刀剣に限れば五本の指に入るであろう男がなにを言うか。

羽織は肩を竦めて慰めじゃないが、事実の真実を告げる。

「ま、ちよいとばかり反則技つかってたらしいけどな」

「能力か？」

「説明めんどい」

「そうか」

ならいい。圭也は言葉をやめた。引き際を心得ている男である。羽織としても、説明が本当にややこしいのだ。

強化された人造のヒトガタだのなんだの、納得できるまで言葉を重ねるのは骨が折れるし。

それにリクスの能力は“爆撃の生成”。もしかしたら、気付かないほどの小爆発を手の内で生じさせていたのかもしれないわけだし。だからリクスの、マッドのヒトガタどもの強化された臂力の程は、未だ不明。

圭也は強張りを落とすように小さく息を吐いてから、顧客に問う。

「まあ、お前にそこまでの落ち度はないようだし、仕方がない、創ってやろう。創ってやろう、仕方がない。」

それで、何本欲しい？」

羽織はあっけらかんと両手を開く。それで数を表しているようだ。

「十本。今は金がねえからツケで」

「……いつになったらツケを返すんだ、お前は。お前はいつになったらツケを返すんだ」

コメカミを押さえながら、圭也はまたため息。

どうせなにを言っても無駄だとは知っているが、このままというのも面白くない。圭也は反撃とばかりにわざとらしく思い出す仕草をとる。

「そういえば、」

「あん？」

「一昨日、春が来たぞ」

羽織は、咄嗟には返事ができなかった。

顎に手をあて、天を仰ぎ、顔を背ける。空っ惚ける。

「……どちら様で？ 季節のことか？」

はるはら
「春原 春」

「知らない名前だなあ、知らないけどなんか間抜けで胸糞悪い名前だなあ」

「まあ、俺はどうでもいいが。どうでもいいが俺は」

圭也は少し笑いそうだった。

羽織は観念したように肩を落とす、不機嫌そうに口を歪める。

「……あいつ転勤でどっか行ってたんじゃねえの？」

「帰ってきたんだろうよ、知らんけど。あいつもあいつで変わってなかった」

「めんどい奴が帰ってきたもんだ……」

「うるさくはあったな」

思い出したのか、圭也は苦々しい顔色で頬を掻く。それから会話を切り上げて、ナイフの創製に取り掛かろうと準備を始めた。

「……はあ」

その背中を眺めながら、羽織は小さく嘆息を漏らした。
面倒ごとは、どうしていつもまとめてやってくるのか。

マッドの件だけでも頭を抱え、辟易している真っ最中であるというのに、そこにもうひとつの厄介事が舞い込むとは……。

春原 春——圭也としては顧客の名であり、羽織としては宿敵の名である。

第二十一話 見舞い

魔害を扱う魔害物の討伐がなってから三日後——ちょうど羽織がマッドと対談している頃——ようやく寝こけていた四条家当主は目を覚ました。

客間にて、九条家当主である静乃が献身的な治療作業を施したお陰か、すっかり傷もよくなった。後は数日ほど休んでいれば、後遺症もなしで日常生活に戻れるだろう。

起きてすぐに、四条は自分が気絶した後がどうなったのかを静乃に問い、ざっと丁寧に語られて——ひとこと。

「んん？ そーかそーか、おれの蹴りがそこまで効いてかい。流石はおれってところだな」

「ええまあ、それは否定しませんけど」

静乃は珍しく、感情をこめずに応えた。

無表情は、無感情は、努めて自己の感情を抑え込んでいるが故だ。とはいえそうして説明を理由に、どうにかいろいろな感情を堪えていたのだが——唐突に糸が切れてしまう。

静乃は吐き出すようにして、ほとんど涙ながらに四条を責める。

「四条、ダメじゃ……ないですか、死ぬところ、だったんですよ？」

「……悪かったよ」

「なんで……なんで自分を大事に、してくれないのですか。死んで

しまったら、死んで、しまったら……」

「あーあー、悪かったって言ってんだろ？ 泣くな泣くな、この泣き虫女」

「泣いてなど、いませんよ。ただ、呆れているだけです」

静乃は強がって言い、その表情を隠すように顔を背けた。

いつもの態度とはえらく違い、静乃はもう子供のように感情を露していた。これもまた、九条 静乃の側面のひとつ。

「誰かを庇って死に掛けるだなんて、本当に、呆れてものも言えません、よ」

「あー」

毎度これだ。

四条は天井を仰いで、似合わないため息を吐き出した。

怪我をする度にこうして九条に泣かれて、もうこんなところに二度と来るかと思う。それでも、四条は戦いをやめないのだから、こうしてまた九条を泣かせている。

静乃は別に、四条だから泣いているというわけではない。誰であれ、彼女の対応は変わらない。四条はそのことを充分に理解している。

戦場に見送る際には微笑んでいるくせに、帰ってきたら無傷であろうと安堵に泣きじゃくる。傷を負っていれば、無論にもっと泣きじゃくる。死んだりなんかしたら、それは――死んだことのない四条は知らないけれど。

確かに同じ一族の親戚同士であるが、とはいえそこまで関係性が築かれているわけでもなかりうに、それでも彼女の涙は尽きることがない。

優しい、とか四条は全然思わないけれど――ただ厄介な女だと、四条は思う。

四条は毎回困り果ててしまう。心配されて、それがむず痒い。安堵されて、それがこそばゆい。涙されて、それが痛い。

こんな気まずい中で寝こけているくらいなら、絶対に魔害物の大軍に囲まれたほうがマシである。むしろそれなら望むトコである。

四条は心底、九条 静乃が苦手であった。

もういつそ逃げてしまおうか。四条がそんな思考に思い至った頃。

「すみません、失礼してもよろしいでしょうか」

「よろしいでしょうか」

凜然とした声と努めた真面目な声が、フスマの向こう側から届いた。

誰と誰の声だ？ と首を傾げる四条を尻目に、九条が涙を指でふき取り易く請け負う。どうやら声で誰だかわかったらしい。

「ええ、どうぞ加瀬さん、条さん」

「失礼します」

フスマを開き敷居を跨ぐ少年は、顔にも名前にも覚えがあった。確か二条ンとこのガキ。

だが。

少女は、どこか見覚えのある少女は、名前が思い出せない。おそらく知っているのだが、思い出せない。

四条が記憶を探っていると、少女――雫のほうから心配色の声を発する。

「四条様、その、大丈夫ですか？」

その問いに、条も身を乗り出して興味を示す。

なんで心配してんだ、とか思いつつも四条は誰であれ弱みを見せ

るのを是としない。強気に勝気に笑う。

「あ？ だいじょうぶに決まってンだろ？ おれを誰だと思ってやがんだ」

「それは、よかった」

「ああ」

その返答に、ふたりして物凄く安堵を浮かべて、いよいよ四条には意味がわからない。

「なあ……二条ンとこのガキはわかるがよ、お前誰だっけ？」

「えっ？ あっ、あー。私は――」

「自分が庇った人の顔くらいは覚えておくものですよ、四条」

「おれが、庇った……？」

静乃の割り込みに、四条は真剣に考え出す。基本的に使用することのない脳みそを稼働させて、四条は庇うという単語と目の前の少女とで検索してみる。

……………。

……………。

……………あ。

「あー、思い出した出した。確かえー、雫か」

「はい、加瀬 雫です。その節は、本当にありがとうございました。四条様に庇っていただければ、おそらく私は生きておりませんでした」

「俺もです。ありがとうございました」

雫と条は、ふたり揃って頭を下げた。というか条は静乃がいるのでかなり控えめだった。

そういうことをされると居心地が悪い、四条は照れ隠しのよう
に素っ気なく言う。

「ンな礼なんざいらねェよ。頭あげろ、ガキども」

おそらくは、こういう真っ直ぐな礼には慣れていないのだろう
から、逆にこの行為は不愉快か。ふたりはそう結論し、苦笑しながら
言われたとおりに頭を上げた。

しかし用事はこれで済んだことになる。雫と条はさてこれからど
うしようと、少しだけ困ってしまう。

と。不意に、四条が笑った。それも危険な雰囲気をもし出した、
獣のような笑み。

——雫は死ぬほど嫌な予感がした。

「——そうだ、雫。確かあの魔害物を倒したのは、おめェだそうじ
やねェか」

どうやら先ほど静乃にされた話を思い出したらしい。

「あー、まあ、一応はそういうことになっていないこともないです
が……」

思い切りバツが悪そうに、雫は言葉を濁す。嘘などつきたくはな
いが、本当を語ることができないのでそこを否定できないのだ。

その明確な否定のない言葉に、四条はあらゆる意味で物騒な、そ
れでいて純粋な笑みをさらに深め。

——嫌な予感だったものが、そこにきて確信へと成長してしまっ
た。

「お前、強くないだなんて言って、ホントは強かったンじゃねェか

よ。そいつはいい、今からおれと――」

「――四条」

「っ！」

もうなにを言い出すのか誰しも予想できただろうが、その言葉は静乃によって断ち切られる。

静乃はいつものようにその表情こそは微笑みを浮かべていたが、目はこれっぽっちも笑っちゃいなかった。

そんな静乃を初めて見た雫は何故か震え上がり、呼ばれた四条もどうしてか冷や汗を流していた。

いや、非常に矛盾した感覚であるのだが、恐いというわけではなく、逆らってははずなのに恐い。逃げ出したいような恐怖ではなく、逆らってはいけないような恐怖である。

静乃は本当に一切の感情を交えずに淡々と続ける。

「今あなたは絶対安静ですよ、四条？」

「おっ、おう」

「それでまさか、はい？　今から、なんですか？」

「なっ、なんでもねエ。なんでもねエよ悪かった！」

「ならばよいのです」

ふっ、と張り詰めた空気は霧散し、恐くないのに恐いという謎の感覚は消失した。

即座に雫は条に視線を送り、ちょうど雫に視線を送ろうとしていた条と目を合わせる。

無言で、頷きあう。

強烈な危機感がふたりにアイコンタクトを可能としていた。

「ええと、そろそろ私たちは退散させてもらいます！」

「四条様、養生してください。では失礼！」

四条でも静乃でも、どっちにしたって長居はやバイ。ふたりは直感的に悟っていた。そそくさと足早に、ふたりは逃げるようにして退室――

する直前、四条が声を上げる。

「おい、雫」

「なっ、なんですか？」

ビクッと雫は肩を震わせ、それでも無視などできようはずもない。ゆっくりと振り返る。

すると、四条はあっけらかんと秘されたその名を告げる。

「おれの名前な、四条 矢継やつぎってんだ」

「――え？」

「名前だよ、名前。おれの名前。いずれ喧嘩する相手だ、真っ当に自己紹介くらい済ませとかねエとな」

あっはっは、と四条はなんも考えてなさそうに笑った。

「条家において下の名前は特別な意味をもってる。条家の退魔師が外で仕事を行う時だって、大概は名乗らない。姓で呼ばせる。名を伏せる慣例があるんだ。特に当主ともなると、滅多に名乗ることはないぞ」

「そう、なのだよな……」

条の説明に、雫は噛み締めるようにして頷いた。

四条がいきなり名乗るもんだから、雫はどうすればいいのかわからないでいた。

いや、光栄ではあるのだ。条家の当主が、自分を認めてくれたのだから、嬉しくないはずがない。だが……なんだ、その、畏れ多い。これどーすればいいんだ、という顔をして雫は悩ましげに頭を抱えていた。

頭を抱えたまま、雫は言う。

「でも、条や浴衣、それに九条様はすぐに名乗ったじゃないか」

「俺はそういうの気にしないし、浴衣ちゃんや九条様は、ほら、あいう性格だから」

「むっ、むう」

説明として全く不完全であるのに、何故か物凄く納得できる言い方である。

条の適当さ、ふたりの善性。

それだけで、納得できてしまう。

いや、で、あるならば、四条家当主も性格的に納得できるのではないか？

条も言ってて気付いたらしく、加えて意見する。

「四条様もあんま考えてなさそうだったな……」

「確かに。喧嘩する相手になら誰にも名乗って当然という風だったな」

そこまで真面目に考えなくてもいいか、雫は安堵なんだか苦笑なんだか落胆なんだか、よくわからない曖昧な表情をして息を吐いた。

雫は魂に根付いてしまった魔害の療養のために、九条家によくよく訪問するようになっていた。

そのため最近は客人という身分に慣れてきたのか、雫は結構気安く九条の屋敷に遊びに来られるようになっていた。魔害が刻まれた魂ではおちおち退魔師の仕事をしてはいられず、だから暇を弄んでいて、そこを浴衣に誘われたりするのだ。勿論、自分から足を運ぶこともあったが。

それで今回は、まあ四条のお見舞いが目的だったわけだが、それで帰るのも味気ない。少し縁側で条と雑談を交わしていた。

条が適当に話題をふる。

「にしても、あれだよな」

「それではなにが言いたいかわからんぞ」

「あれだ、あれ。ちょっと前までは暇だったのに、最近は忙しいよな」

「……私はその暇だった時期の条を知らないのだが、ふむ、まあ武器を扱う魔害物なんて危険な敵手、その複製をばら撒くなんてイカレた人間。物騒なものだ」

「他人事みたいに言うなよ。そのイカレた人間を、条家は今全力で探し回ってる」

条家でも未だ見つけることができているその男と、ほんの少し前まで羽織がお茶していたと知ったら、雫は一体なんと突っ込むだろうか。

そんな事実を知る由もなく、雫は遠くのどこかを定めることもなく眺めながら、疑問する。

「マッド、だったか。一体どんな目的があつてあんなことをしでかしたのだろうか」

「さーなー。オヤジも意味がわからんって言つてたし」

思想に関しては、未だに僅かも不明。条はお手上げとばかりに両手を挙げた。

いや、“生”を支配するとか言つていたか。とはいえ、意味不明度合いは大差ない。どのような意味なのだろうか。

「まあ、目的がなんであれ、探し出して処断しないといけない。条家の名にかけて」

これでも二条家直系の条。言葉は少々硬く鋭い。

ここまで条家を掻き乱したのだ、それ相応の報いをくれてやらねば条家の名折れなのである。

そういった事情もあり、今回は三条家が特に精をだしているとか。三条は最も条家の名を――いや、強さを重んずる一家なのである。

そんな風に軽々しく結構な内情を軽く語る条に、雫はいささか表情に困り問う。

「というか、そういう情報は漏らしていいのか？ 私は一応、部外者だぞ」

「えーあ、あー！　　そういえばそうだった……。すっかり忘れてた。気分的には条家の関係者な感じで喋ってた」

適当だ適当だとは思っていたが、そこまで適当だと雫は呆れてしまふ。

「だっ、誰にも言わないでくれ！ 俺が叱られる！」

「いや、勿論、言うつもりは元よりないが」

「助かる」

本当にありがたそうに、条は両手を合わせた。

自分でバラしておいて、自分で口止めしてはどうしようもない。

条は何か思いついたようにして指をたてる。

「んー、そうだ、会話はやめにしよう」

「は？」

「いやだってほら、俺がまた思わず情報漏らしちまうかもしれないだろ？」

「あー、そうか」

なんて秘密に向かない緩い口元なのか。いや、羽織なんぞと比べると好感をもてる性格であるのだが。

条は子供のような無邪気さで続ける。

「だからさ雫、四条様じゃないけどさ」

「ん、なんだ？」

「一回、軽く戦ってみないか？」

第二十二話 強さ

「斬！」

文字通り風すら裂く、雫の刀剣一閃。

それを条はスウェーバックで避ける——刃が鼻先で通り過ぎ、完全に回避。

したが。

刃より巻き起こった風に、条はブツ飛ばされた。

予想外の一撃。少し驚いたが耐えられない威力ではない。条は地面に轍を刻みながら、制動をかけ拳を握る。

雫の追撃の一步、そして一刀。振り下ろされる銀閃。対して条は掬い上げるように拳を振り上げて、振り下ろされる刀へ正面から受けて立つ。

ガッ。

という肉と金属のぶつかる異音。刃が条の拳を僅か裂き、血を噴出させるも、威力においては圧倒的に雫が劣る。

「らああ！」

「ぐ」

アッパーの要領で刀は押し返され、雫は万歳状態の隙丸出し。そこに。

条の二撃目が炸裂する——直前で停止。

「俺の勝ち、だな」

「私の負けだ」

落胆を隠せずに、雫は肩を落とした。

軽く、などと言ってもそれは九条の治癒を期待してようやく可能な、危険極まる模擬戦。具象武器も、能力も、平然と使用している。手加減がないとは言わないが、危険であることに変わりはない。

危険であると同時に、実戦に限りなく近いことから、得るところは訓練の比ではない。

とはいえ、両者ともに完全に近接戦闘に特化しており、作戦を練るタイプでもない。さらに一撃の威力が強力であるのに反して耐久性に乏しいために、決着は呆気ない。

こうも容易く、条は勝ち雫は負けたのだった。

「どうだった？」

雫は戦闘の評価を訊ねる。相対して戦ったのだ、条の目には雫の戦いがどう映ったのかが気になる。

だが、条は戦闘が終わった途端にやる気をなくし、

「あー、えー、うーん、そうそう。魂魄能力はいいけど、剣術はダメって感じ？」

「むっ、むう」

適当な返答。だがそれはつまり虚飾の手間を省いた率直な感想とも言える。

剣術はダメ——誰よりわかっているが、改めて言われると雫は結構ヘコんだ。

今でこそ接近戦に傾倒している雫だが、接近戦の経験は実は少ないほうなのだ。そのため近接戦闘は苦手の部類であった。剣術技量は、未熟なのである。

そもそも総合的に見て、雫は決して強くはない。

単なる戦力においては、まだまだ条にも劣り、戦えば今の通り勝ちの目すら薄いだろう。

ただ最大の長所として、魂の力を操る法に特化し、誰より巧く力を制御することができた。

たとえば雫は具象武器を自在に具象、消失とやっているが、あれは普通あかもノータイムでできる技ではない。浴衣や条でさえ、無理である。

具象化したら消すのに一定の集中力を要し、その後また具象化するにはインターバルが必須と言える。それを可能とする雫は、それだけ魂制御力がきわめて高いということだ。

つまり同年代での話となるが、雫の实力は条家傍系ほどで——傍系でも条家の名で退魔師をなすならば間違いなく一流で、一般の退魔師が実力及ばずというのは珍しくもない。つまり、雫は決して弱いというわけではない——しかし魂魄能力を、自身の魂を知り尽くし十全に扱いて御せる。だから、“風の制御”での技は強力なのである。

適当そうに見えて、なにげに条の発言は的を射ていた。

「なんか、あれだよな。雫って武器を除けば実は後方支援型だよな」

元々、風という属性は補助に向いている。具象武具が日本刀でもなければ、誰かと組んで後方支援に徹するのもありといえる。

そう思う、と雫はあっさり認め、少しだけ遠い目でどこかを見つめる。

「昔、私はとある退魔師と組んで戦って、その人は完全に前衛向きだったから、後衛支援ばかり上達してしまったのだよ」

「あつ、そうなんか」

「だからこそ、ひとりとなったのだから剣士としての技術を培いたいのだが……」

「あー、だから模擬戦に乗ってくれたのか」

「それもあるな」

単に、強い者との手合わせは様々な学ぶ部分があるということもある。もうひとつおまけに、雫は結構に好戦的な性格をしていて、条の強さを垣間見て一戦交えたいと仄かに考えていたというのもある。まあ、実力差がありすぎる四条と戦ってみたいとは、流石に思わないが。

しかし、実際に戦ってみてこそ、また改めて思う。

「条は強いな」

思って、それがつついっつい雫の口からぽろりと漏れた。

自分は強い方だと、雫は一応思っていたため、こうも容易く負けて、しかも自分の弱点を簡単に見抜かれた。

条家の直系は、やはり強い。

条は軽く笑って、謙遜するでもなく頷いた。

「まあ、強くないといけないからな、俺は」

それは、二条 条だからこそその言葉。

これからももっともっと、強くならなければならない——とは語らなかった。それは自分の決意だから。

その決意の意味を知らぬ雫は、あまり言葉に注目せずに流して話す。

「だが、条よりも当主様たちのほうが、もっと強いんだよな」

「……まあ、そうだな」

雫としては純粋な感想だろうが、条にとっては負けを認めるようなもの。僅か悔しいが、とはいえ正論過ぎるほどの正論だ、苦々しく肯定した。

「俺もあんまり直接戦つてるところを見たことはないけど、かなり強いはずだ。俺レベルじゃあ足元にも及ばないかも」

「で、私より強い条、より強い当主の方々、よりも強いのが一条様——なんだよな」

「まあ、そうなるな」

「……一体、一条様はどれだけ強いんだ？」

条だって充分過ぎるほどに強い。文句なしで強者と言える。だといふのに、当主たちはその条ですら足元にも及ばないほどに遠き強さをもつという。

そして当主ですら適わない一条とは、一体どれほどの最強なのだ？ 雫は数日前の一条の記憶を思い起こし、想像を絶するなとひとりごちて表情を引きつらせた。

「どうだろ。そういえばあの人が戦つてるとこなんて見たことないしな」

条も、考えてみればよく知らないことであつた。

基本的に、一条に仕事は割り振られない。

盟主ゆえに、ある意味で出る幕がないのだ。近年の敵対者は、一条が出張るほどの脅威ではないであるからして。一条のお手を煩わすほどの事件がないがために。

条家といえど、一条の実力を知悉する者は極僅かだった。

「――知りてえか？」

突然に羽織が会話に参入し、にたりと笑う。どうやら、ちょうど帰ってきたところらしい。

全く気配を感じなかった――会話していたふたりが突然の闖入者に吃驚仰天。

「うわ！ なっ、なんだいきなり！？ って、貴様か！」

「！ ったあ、羽織か……」

「いやー、面白そうな話ししてからよお、つつい混じりたくなつてな」

悪びれるどころか、嬉々とした表情で羽織は笑う。

イタズラを成功させた子供のような笑みのまま、羽織は続ける。

「一条は強いぞ、そりゃあ強い、どれくらい強いって、とんでもなく強い」

曖昧に言い、そのままおどけたように適当なことを陳述する。

曰く、思い切りやれば大陸ひとつを分断できるだとか。

曰く、他の条家当主全員を同時に相手に回しても圧勝できるだとか。

曰く、瞬きの間だけの時間で周囲一体の物質全てを細切れにでき

るだとか。

いや。

「絶対嘘だろ！？」 いや、嘘だよな？ 嘘だと言ってくれ、嘘じゃなければ他になんなんだ！」

雫は懇願のように叫んでいた。もう自分でもわけがわからない。なにが本当でなにが嘘なのか、判断がつけられず頭の中が混乱してしまう。

そんな様を見て羽織は横で大爆笑。

条が取り乱す雫の肩を揺すって諭すように語りかける。

「いや、雫落ち着け。あと、羽織の言葉を真に受けるな、口からでるのは嘘か作り話か嘘だから」

「あ……いや、わかっているが、一条様に限っては……」

雫の声音は、悲しいくらいに真剣そのものだった。

もう羽織は腹を痛めるほどに笑い転げてしまう。抱腹絶倒とはこのことか。

条は自分の発言のほとんどが適当だという事実を棚上げしつつも、激しく首を振る。

「ないから！ 流石に一条様でもひとつだって不可能だって！ ひとつでもできたらもう人間じゃないって！」

「そっ、そうだよな」

「そうかな？」

「羽織！」

やんややんやと羽織が引っ掻き回すパターンの駄弁り。

それは羽織が笑い過ぎて本気で腹を痛めだした辺りでふう、とよ

うやく切り上げる。

「あー、笑った笑った……で、なんの話だっけ？」

「お前がそれを言うのか……」

条は疲れ切った様子で羽織を軽くはたく。

羽織はあえて条の一撃を受け、冗談だと笑う。

「一条の強さだろ？　んなもん万言を費やすよりも、手っ取り早く一験させてやるよ」

「……？」

どういう意味だ。というか一見のニュアンスが違う気がしたが？　雫の突っ込みより尚早く、羽織はさっさとその姿を消す。素早い奴である。

「なんだったんだ、一体」

「嫌な予感が……」

ふたりは模擬戦以上の疲労を覚えて、仲良く同じようにため息を吐き出した。

そして羽織は、当の一条に会いに一条家に赴いていた。

フットワークが軽い、というより気ままな男だ。マッドとのお茶やらで今までサボっていた仕事はいいのか。

勝手に一条の屋敷にさがりこみ、その廊下をずんずん進んでいく。迷いない足取りは、一条の私室へ。

たまにすれ違う使用人たちは、我が物顔の侵入者に疑問符を浮かべるが、すぐに羽織だと気付く。

使用人たち、また十条の者たちは、一条から言われていたのだ。

「羽織りを纏った気だるそうな男が勝手に屋敷に侵入するかもしれないが、その場合は気にしなくていい」と。

一体、一条とどういう関係なのかという疑問が無論沸きあがるが、一条は友達だと答えたとか。

羽織もそのことを知っていて、こうも勝手気ままに一条の屋敷に踏み入っていた。

これが他の者ならば、即座に十条の者に捕らえられ、最悪、ただの不法侵入で殺されかねないだろうと。

一直線に進む羽織の耳は、不意と声を拾った。

それは進行方向、その通過点からの一条の声だったので、羽織は立ち止まり耳をそばだてた。

声は二種類。

「何度も申しているが、こちらは受け入れるつもりは一切ない」

「そうはいいますがね、そちらにも悪い話ではないでしょう？」

「くだい。条家は条家のみで完成している、組織と手を組む気はない」

一条と、それから聞きなれない男の声。

どうやら、なにやら話し合っているようだが――ふむ。

どうしようかと少しだけ逡巡して、羽織は気配と音を押し殺してフスマに耳を寄せた。

――盗み聞きである。

どこからどう見ようと、問答無用に盗み聞きの現行犯である。

その盗み聞きの姿勢は堂に入っており、羽織にとっては手馴れたものだと言のうちに語っていた。

それもそのはず、羽織は以前もこうして盗み聞きを繰り返していて、遂には一条の素顔を暴いたという華々しい戦歴——というか前科があったのだ。

当時は組織に属したのだから、そのトップと見知っておこうというやましい思惑があったのだ。

だが——

「すまない、蘇芳殿^{すわう}。少々いいか」

「はい？」

その幾度にも及ぶ犯行のせいで、

「——羽織、そこにいるな？」

一条は異常なまでに気配に敏感となってしまうていた。ので、最近ではこうして盗み聞きをしても、察知されてしまうのだった。

バレちゃあしうがねえと、羽織は態度を翻し堂々と部屋のカマを無遠慮に開く。

「よお、一条、ちよいと話があつてよ」

「盗み聞きもほどほどにしておけよ。……しばし待て、今、こちらの方と話をしている」

一条は突然の羽織の来訪に特段驚きもせず、素早く対応した。

その声を聞き、一条の対面で正座していた男——黒のコートで全身を隠し、帽子まで黒の怪しいことこの上ない黒尽くめの中年ほどの男——はゆっくりと立ち上がる。

「いえ、ちょうどよい潮時と思って、そろそろ私は退席しましょう。しつこ過ぎると、嫌われてしまいますからな」

爬虫類のように笑んでから、男は帽子をとって礼儀正しく頭を下げる。

「では、一条殿——我ら“黒羽”は、あなた様の色よい返事をいつでも期待していますよ」

くく、と不気味にもう一度笑って、男は静かに退室していった。一条は使用人に見送るように言い、自分は動かず去っていく男の後姿を微かな警戒心をもって眺め続ける。

やがて姿は見えなくなり、足音まで消えた段階で——一条は一家当主という演技を脱ぎ捨て、ふやけた声を出す。

「ふう、助かったよ羽織。あの人、全然帰ってくれなくてさ」
「誰だ、あれ」

いつも通りと慣れているのか、羽織は一条のふやけ具合をさらりと無視して質問した。

一条はふにやりと緩んだ表情で、答えを返す。

「ああ、あの人は“黒羽”の蘇芳さんだよ」
（すおう）

「“黒羽”？ 四大機関の？」

「そうそう、その“黒羽”」

最近はその名に縁があるな。羽織は面倒そうに顔を顰めて頬を掻く。

一条は親切心から補足しておく。

「なんでもこの町の支部長さんらしくてさ」

「は？ なに。この町に“黒羽”の支部とかあったの？」

「うん。確か五年くらい前かな。一条家の事件が外に漏れて、チャンスって一時期この町に退魔師が増えたじゃない。その時だよ」

「あー、あん時か」

軽く驚く。

まさかわざわざ条家十門のお膝元であるこの町に、退魔師機関をつくるとは。

馬鹿じゃないのか、とさえ羽織は思う。

たとえ一条家の事件のことがあっても、この町で退魔師機関が長く存続するとは思えない。

何故なら、大概の依頼は条家に流れるのだから。

せめて雫のようにフリーの退魔師なら、なんとかその実力などで存続不可能とは言わないが、機関単位では……。

全くもって、なんの理由でこの町に支部を置いたんだか。支部をおくなら、もっと他にいい土地もあったらうに。

とは思っても、一応五年も存続しているのだから、それなりには優秀ということになるのか、と思い直す。

それと、腑に落ちる事項もでてくる。

マッドが一体どこに潜伏してんだと思っていたのだが、まさか同じ町に“黒羽”の支部があったとは。おそらく奴はそこにいる。

羽織の牙剥く思考とは別に、一条は極々平凡に語る。

「それでね、その蘇芳っていう支部長さんがたまに尋ねて来ては、条家の仕事を譲ってもらえませんかー、だとか、我が“黒羽”に条家の方をお迎えしたいんですがー、とかしつこく言ってくるんだ。それでずつと居座るんだよ？ しかもさ、ちよつとでも対応を間違えると、「それは“黒羽”への敵対意思ですかな」とかいって脅してくるしさ。

もう嫌になっちゃうよ」

流石の一条も辟易したと愚痴を零す。

一条は素の自分を曝け出せる相手が極端に少ない。そのため、反動なのか本当の自分を知る十条と羽織にはかなり態度が軟化する。

まあ、羽織が知ったのは、ただの覗き見による盗み聞きと盗み見だったのだが。

それも今となっては不幸中の幸いと、一条は思っていた。こうして本音で話せる相手がいてくれるのは、本当に助かっているのだから。

「って、あー、愚痴っぽくてごめんね。なにか、用があった？」

とはいえ、それも弱さ。一条は取り繕う。いつもと同じように、とまでは言わないまでも、自己をあるていど律する。

羽織は話題を振られ、そうそうと今しがた思い出したように切り出す。

「まずよ、雫って覚えてるか？」

「うん、勿論。加瀬さんでしょ？ 忘れるわけないよ、あんなカッコイイ人」

一条の評価に、羽織は眉をへの字にしかめる。思い切り渋面である。

「カッコイイかあ？ あれ」

「カッコイイよ！ 条家十門の当主の前であんなに勇ましく宣言するんだよ、すごいと思わない？」

「ま、あれには驚いたが……」

「あ、それと先日のは件はありがとうって、加瀬さんに伝えといてよ」

「先日？ ああ、武器の」

「そうそう、二回もお世話になっちゃったからね。あと羽織にも」

にこりと、無邪気のように一条は笑った。羽織は表情も変えずに返答。

「なんのことだ」

「羽織でしょ、武器から進化した魔害物を倒したの」

「おれじゃねえよ。四条の蹴りがかなり効いてて、後から後から動きが鈍くなってきて、そこを雫がぶった斬ったんだって」

「そういうことにしておきたいなら、聞かないけどさ」

一条には羽織の素性を一切語ったことはないのだが、流石にその勘は鋭い。ことあるごとに実は強かったりするんじゃないの、とか訊いてくるのだ。

隠し通せるのも時間の問題かもしれないが——まあ、それはそれでいい。一条ならば大きな問題にはならないし、いずれ来るべき日には語る予定であるわけだし。

そう、問題は一条などではなくマッド——

「って、だから話を聞け、話を」

「あ、ごめんごめん。で、その加瀬さんがどうしたの？」

ようやく用件を述べるのできる羽織は、にひりんと邪悪な笑みを浮かべていた。

「それがな——」

そうして。

思いついたイタズラを自慢する子供のように、羽織は嬉しげに言

葉を連ねたのであった。

第二十三話 最強

条家十門。

日本最古の退魔師一族にして、数多の魔益師たちから最強と称される一族である。

ここで単純な問いをひとつ。

何故、条家は最強なのだろうか？

理由は種々諸々あるが、特に大きな要因はふたつ。

ひとつは能力の熟知。

普通、魔益師は自分の魂魄の形に気付いて――能力が覚醒した際にその能力名は魂が決定しており、それを自覚してから――最初に、その能力を如何にすれば十全に扱い切ることができるかに頭を悩ませることになる。

なにせ魂の形は千差万別。魔益師という存在は数多くいても、同じ能力をもつ存在などいない。探し回れば、似たような能力者はいるかもしれないが、それでも巡り合うことは難しいだろう。

そのため、魂魄能力の運用法は全て自分ひとりで考えなければならぬのだ。

どのようなことができるのか。どのような認識ができるのか。どのような戦い方が最も適するのか。どのような応用が可能なのか。

自己の能力を知り尽くし、思考と試行を繰り返し、そうして力を完全に統御する必要がある。

それができて——無論にそれだけではないが——ようやく一流と呼ばれるようになるのだ。

だが、条家十門は違う。

彼の一族では、能力が親から子へと受け継がれる。親が、もう既に能力を知悉しているのだ。

故に子は、親から能力の内容、応用、認識、戦法、技法までなんでも隅々まで教わり、それを完全に自分のものとする。

そうしたことが千年近くも繰り返され——しかも誰かがまた新たに戦法などを思いつけば、それも子へと伝承され、能力の知識は積み重なっていく——現在まで至るのだ。

外部の魔益師と比して、能力に対する理解度がずば抜けて高いのは当然といえる。

能力の理解がほとんど完璧であるということ、それが強さの理由のひとつである。

そしてもうひとつの要因は、最強の自負。

条家是最強である——歴史が証明している、実績が物語っている、自分の強さが裏打ちしている。

そういう外的要因、つまるところプレッシャーにより、条家十門の退魔師は皆“自分が強くなってはいけない”と思いつくようになるのだ。誓約のように、自分は強くなてはならないと考えるのだ。歴史が証明する条家十門の威信。それに泥を塗るわけにはいかない。実績が物語る条家十門の威光。それを汚すわけにはいかない。強さが裏打ちする自信。自分が弱ければ、一族郎党先祖諸共までも弱小とされる。

そんなことが、赦せるはずがない。

自分が弱くて、一族やその歴史を貶められることが、彼らには我慢ならない。

何故なら、条家十門は“強くなくてはいけない”のだから。

だから誰よりも最強になろうと努力を繰り返し、鍛錬に明け暮れ

る。才がありながらも、徹底的に努力を続けるのだ。その典型例が一条であり、二条 条であったりする。

また、“強くなくてはいけない”という、もはや強迫観念にも近い自己への誓約は、そのまま魔益師としての強さに繋がっている。

——魔益師とは、認識により自己を改革する者。

条家十門の退魔師の持つ“強くなくてはいけない”という認識により、彼らは本当に強くなっている。

魂の底から自己を強い存在であると定義し、常識にも似た強烈な認識で己に強さを強制する。

自己の認識を強い存在であると固定し、そのように魂から変革させているのだ。

その強制の強度は計り知れず、事実として条家十門は最強である。おかしな言葉になるが、条家は条家が最強であり続ける限り、最強であるということだ。

ちなみにこれは、認識により自己の強さが変質する——認識の中でも、自己認識と呼ばれる種類のもの。

そうした要因が絡み合い、条家十門は名実ともに最強なのである。その最強の条家においても、また序列は存在する。

血筋に因る能力であるために、血の濃い直系は傍系を凌駕するし、さらに当主は直系すらもひとつふたつ領域を異とするほどの実力をもつ。

そして。

当主の中で、最も強く——すなわちこの日本において、およそ最強とされる人物こそが条家十門盟主、一条家当主なのである。

そして明くる日の朝。

「で！ 羽織！」

「あーん？」

「これは、これはどういうことだ！」

雫は現状の全てが理解できないとばかりに声を張る。
対して羽織は全部理解して、その上でニヤけている。

「見たまんまだろ？ お前は今どこにいる？」

「……一条家の屋敷、そのだっ広い中庭」

その通り。

雫は無駄に広い一条家の屋敷の、また無駄に広い中庭に立っていた。

羽織は続ける。

「で、お前の目の前にいるのは？」

「……一条様」

その通り。

雫と十メートルほど離れた位置に、一条は鋭い面持ちで立っていた。

羽織は続ける。

「その一条がお前に向けているものは？」

「けっ、剣気」

その通り。

刺すような剣気にあてられ、雫は気を抜けば膝から崩れ落ちてしまいそうだった。

羽織は、それでも口を噤む雫に呆れをもって解答を示す。

「ここまでできてわっかんねえの？ 模擬戦だよ、模擬戦。お前と一条の模―擬―戦」

「はああ！？」

ありえねー、とばかりに雫は絶叫していた。

まるで志望校に滑った受験生のような魂までも震わす悲痛なる叫びであったが、羽織の心には全く響いていないようで笑んでいる。その上。

「そう、その表情が見たかったのだ！」

完全に悪役な台詞を、全くの自然体で吐く。その表情は見たこともないほどに輝いていた。とっても楽しそうな羽織である。

なんてヤツだ。雫は突っ込みも忘れて茫然自失に言葉を紡ぐ。

「なっ、何故こんなことを……」

「嫌がらせには全力を尽くせて、親に習わなかったのか？」

「つて！ ただの嫌がらせか！」

「いんやあ、それだけじゃあねえよ。お前が一条の強さを知りたがってたんじゃねえか、だから親切心も入ってる。これ以上なくわかりやすい方法だろ、模擬戦って」

親切心は一パーセントにも満たず、本当は羽織の事情が大半を占めていたが、それは言わない。

「おっ、おおお畏れ多いにも程があるだろう！」

雫は全霊を乗せて主張するも、暖簾に腕押しとはこのことか。一切聞こえていないとばかりに、羽織は気軽に気さくに気ままに肩を竦める。

「ま、いんじゃね。結構、あいつも喜んで承諾したぜ？」

「なっ、また嘘を！」

へらへらと、羽織は応えずに笑う。言葉を重ねるのが面倒になってきた。

「どうでもいいけど、一条のヤツ、そろそろ痺れ切らすぞ」

「！ ちよっ、待ってください、一条様！ せめて気を落ち着けてからに……！」

焦る雫に、正面の一条はどこまでも不動。静かに短く頷く。

「構わない。俺の準備は万端だ、お前がいい時に声をかけろ」

「あっ、ありがとうございます！」

言って、雫はもう諦めるしかないと悟る。

ここまで来たら、腹を括る他ない。意を決するしか、ない。

雫が勇敢にもそんな決意を固めている頃には、羽織は充分に離れた位置にまで移動していた。しかも隣には糸もいて、ふたりして気楽に観戦する腹積もりらしい。

一瞬、イラっとくる雫だったが、鎮めるように目を閉じて、落ちて着けと呪文のように胸中で呟く。大丈夫だと暗示のように胸中で囁く。

それは雫が自身を制御するための言霊で、故に雫はそれだけである程度の落ち着きを取り戻す。

目を、開く。

前向きに考えれば、一条という最強者と戦えるのは凄まじくいい経験となるはずだ。見たところ一条も雫と同じく日本刀を使うことから、雫はきつとこの一戦で数多くのことを掴めると、そんな気がした。

さて。

戦闘を始める前に、戦闘を始めるにあたって考えなくてはならないことを、雫は浮かべる。

せつかく一条がくれた準備の時間だ、それくらいしておいてしかるべきだろう。

まずは、一条の魂魄能力とはなんであろう？

二条から十条までは理念が知れ渡り、それによりある程度の能力は推量できる。しかし、一条は理念さえも秘匿されて、その能力は完全に不明。

どうにか戦いながら看破しなくては勝負にならないだろう。それと、異常な現象が起こっても平静を忘れないようにと自分に言い聞かせておく。こうした精神的な備えがあるのとないのでは、驚愕の大きさが変わるのだ。

次に、一条の具象武具はなんであろう？

これは——おそらくずっと大事そうに帯刀しているあの日本刀だ

ろう。

理由は個人によって異なるが、具象武具を常時具象化し続ける魔益師も、確かに少なからず存在する。きっと一条はそのタイプの魔益師。

最後に、一条の実力は如何ほどであろう？

はつきり言って、自分より遥か格上だということしかわからない。だが一体、どれほどに隔絶しているのか。

必死に決死にがんばれば、覆るほどの差か。それともこれきり努力を重ね続けても、一生涯追いつけぬほどの差か。

これも、戦いながら判断するしかない。

とはいえ、今回は実戦ではなく模擬戦なので結局後者でも現状においては問題ない。これが実戦であれば、後者が敵に回った時には全力で逃避するのが鉄則だが。

思案に耽ったことで、雫は自分の心が鋼鉄のように冷えていくのがわかる。

感情を置き去りにして論理を走らせたために、感情の機能は低下し、揺らぎも収まる。かわりに思考回路が活性化。いつになく頭が高速で回転しているのがわかる。

熱しやすい雫にとっては、戦闘に最も適した心象図。

これにて準備は整った。今できる最高のコンディションにまでどうにか仕立て上げた。

さあ、後ははじめるだけだ。

雫は震える声で、けれども芯の通った言葉で、火蓋を――

「いけます」

「では――はじめよう」

火蓋を切る。

その宣言と、一条が腰元に帯びた日本刀を握ったのは同時だった。

雫も即座に魂魄を具象化、刀を構え

——キン、という澄んだ金属音が響いた。

「っ！」

咄嗟。

反射的に不吉を感じての防御動作。

しかし間に合わず、雫はいきなりぶった斬られた。峰であつたらしく打撃だったが、痛烈極まる一太刀。なにより、高速極まる一太刀。

「ぐっ」

雫は苦痛を無理やりに我慢。電流のように思考が走る。

なにが起こったのかは不明。全くわからない。不可解に過ぎる。

視認どころか、微かにすら知覚できなかったのは何故だ？ 十メートルの距離はどこへいった？ 見れば、既に刀が鞘に収まっているのはどういうわけだ？ そもそもどういう原理で斬られたというのだ？

わからない。なにもわからない。

わからないが——つまりそれこそが一条の魂魄の形ということ！

思考を停止、どうせこの少ない情報では答えなど見つからない。だからそれより前へ出る。

その立ち直りの早さに、一条は些か感心したように瞳を広げ、すぐに細めなおす。

「しっかりと、その目を凝らせ」

一条はこれ見よがしに刀を前にだし、鯉口を切る。

ありがたいと思いつながら、雫は足を止めず視覚に集中の全てを詰め込み――

キン、と収刀した。

――それでも一切、銀色の刀身を視認できなかった。

そして何時の間に、雫はズパンと小気味良く袈裟懸けに断ち斬られていた。とはいえ例によって峰、血は流れずに苦痛だけが雫を苛む。

「くう！」

前方への疾走は、その斬撃により後方へ吹き飛ばされる。

足で地面を削って制動、雫は眼光だけでも一条を見据える。ただし、身体は痛みに戦闘を拒絶していた。膝は笑い、息は絶え絶え、冷や汗は止まらず、刀を握る手には必要以上に力が籠ってしまふ――手加減を加えたたった二撃で、これである。

雫は額の汗を乱雑に拭い、極々短時間、瞬きのように目を閉じる。落ち着けと呪文のように胸中で呟く。大丈夫だと暗示のように胸中で囁く。

目を開く、足を前へと進める、笑みを刻む。

「まだ……まだだ！」

相も変らぬ特攻。

一条の能力は全く不明。だが、ともかく遠距離攻撃が可能なのだから離れているのは不味い。

退いては負け、立ち止まっては負け、ならば前へと疾駆するのみ。

雫の疾走はまさしく風の如し。目算で一条との距離を踏破するまでに五歩で足りると判断。その五歩の間に、走力と同じだけ加速する思考回路。

雫の頭脳はいつになく冴え渡っており、その最高に切れる状態でもって、一条の能力を解析しだす。不明を明快までにもっていくための、推測思考開始。

二撃で見立てた一条の能力。

ともかく微かに抜刀、即座に収刀するのが、能力行使の始発なのは確か。収刀の際に必ず響き渡る鏝と鯉口が噛み合う音にも意味があるのかはわからない。

そして距離の離れた雫に斬撃を過たず直撃させたことから、距離を無視するなにかがある。それは能力による無視か、能力で操った事象が無視するものなのか——どちらかは不明。

だがおそらくは前者。

後者であれば——例えば雫の“風の制御”なのだが——なんらかの形で武具が事象に干渉、事象を制御または作り出し、距離を走らせ、敵にぶつける。このような四工程が必須となる。またこれ以上に工程を増やし威力、飛距離諸々を増量することもできるが、工程を減らすことはそうそう出来ない。そして工程ひとつひとつに僅かずつ時間を費やし、そのためにタイムラグが必ず存在する。

だが。

——一条の斬撃にはタイムラグがない。

一条の斬撃には始発と発生との間隔が、真実全くないのだ。つまり一条の能力は前者であると推察できる。収刀し、斬撃が襲うというなんとも脅威の短工程。さらなる脅威は、距離を進むタイムラグが本当にゼロだということ。斬撃を飛ばしているのではなく、雫のいるそこに斬撃が発生したということ。

これが理由で、雫は遠距離から風を放つ戦法を検討もせずに取り

やめたのだ。タイムラグがある遠距離攻撃と、ない遠距離攻撃。勝敗は火を見るより明らかといえる。

これらを踏まえた上で推測される能力の候補。

たとえば、“空間の無視”とかか？

一条はその場で居合いの太刀を放ち、それが空間距離を無視して雫の立つ場に現出した？

最も単純な能力で現状を説明してみたが、それは即座に自分で否定。

何故ならば、もしそうであった場合——一条は雫の知覚を完全に通り過ぎた速度で抜刀し、収刀しているという事実がなくてはならない。

流石に、それは不可能だろう。

視認できぬほどの高速の抜刀なら、まだわからないわけではないが、どうしたって収刀の動作ばかりは見えるだろう。

どれほど常識外れの退魔師、その最上位たる条家十門盟主一条でも、それは無理難題だ。

では——“太刀の加速”とかは、どうだろう。

能力がそもそもあの速度の原因だとすれば、悪くない推理な気がする。

……いや、それならば距離を無視した説明がつかないという本末転倒。

たとえばあまりの速度に、斬撃の衝撃波が巻き起こったのだとしても、そこにはタイムラグがなくてはならない。ならば現状とは噛み合わない。

では最後のもうひとつの仮定。

あの耳残る音を意味あるものと捉えるなら、“音の支配”という案もありではないだろうか。

一条の持つ大仰な日本刀は、斬るための武器ではなく——鳴らすための楽器なのではないか？　そういう思考の飛躍だ。

鏗鳴りの金属音が発生となり、音の衝撃波となるように支配した。

音は振動、距離を走るし、その速度は文字通り音速。

速度、距離、抜刀と収刀の異様な短さ、全ての説明がつく。さらに、そういう考え方でいいのなら、一条が斬撃ではなく打撃を放ったことにも納得がいく。手加減だと、最初は確信したものだが、あれは 元々、斬撃ではなかったのではないだろうか。音の衝撃波、それゆえに打撃だった。さらには、一条が常に武具を具象化している理由もわかるというもの。あの刀が、武器であると印象づけるためだ。

あんな小さな音で、こうまでも威力を増幅し高出力となるのは信じがたいが、しかしこの考え方は、今までの事象の全てに説明がつく。

雫は暫定的に、一条の能力を“音の支配”と決定した。

しかし。

そう、しかしである。

しかしそれがそうであるとして。

——ならばどう戦えばいい!?

雫は上手く説明ができてしまったことにより、逆に平静を欠く。

一条の能力、その脅威に対処が見当たらない。

速度による勝ち目はなく。威力による勝ち目はなく。技量による勝ち目はない。

絶対的上位者に対抗する法——雫は早急にそれを編み出さなければならなかった。

とはいったものの一条の一撃は重く、直撃した雫の身体は軋みをあげていた。次を耐え切れる自信がない。つまり、時間的猶予も身体的余裕もない。早急という言葉では、足りないのかもしれない。た。

どうすればいい——雫は、焦っていた。

対して、一条の精神は凧いでいた。

雫にとって、思考は数瞬で三步に過ぎない。その間は無論に、油断していたわけでもなく、一条を見据えていた。

だがその程度の警戒では、一条としては欠伸がでもお釣りがくるような隙だった。

隙——戦闘への集中力の数割ほどが思考に注がれ、確かに臨戦態勢半歩手前ではあった。とはいえそれは、常人ではまず隙とは言えないような、細い筋のようなもの。雫自身、攻められても対応できると自然に考えている。相対したのが二条 条であったなら、迂闊には攻められないと感じたことだろう。

しかし一条という恐るべき使い手に対しては、隙という言葉の範囲は通常よりもずっと広いものとなるのである。故に一条の視点では、今の雫のザマは隙と言って差し障りはない。おそらくここで攻め立てれば、勝敗は決するだろう。

だろうが……それを見送る。

勝負を楽しみたいという、雫の実力を知りたいという、自己を不利に追い込むことでの修練という、様々な意味をこめて、一条は様子見に徹する。

そうして。

跳躍のような疾走で、ようやく五歩目にて——雫は刀の間合いに侵入する。

雫は一条の手心をそこで理解し、しかし躊躇いなく刀を一閃させる。苦肉の策、ともいえない拙い考え——音を鳴らされる前に攻め手に回る。

無論、待ち構えていた一条には見切ることが容易く可能。鞘走る

ことで現れた数センチのみの銀刃が、高速の斬撃を受け止める。
金属音。

雫の口角は、そこで釣りあがる。雫と剣劇する場合において、その防御法は悪手に他ならない。

「疾っ！」

刀身は受け止められ停止したが、巻き起こした風は止まらない。
渦巻いて、集って、刃となる。

鏢競り合う二刀を無視して、後追い風が斬撃と化して一条を襲う。
武具は雫と鏢競り合っているので動けない。この距離での風、その速度に回避もままならない。風の猛威が、受けようも避けようもなく一条に迫る。

雫は直撃を確信して、

一条は、それでも揺らがない。

「――斬」

掛け声は静かに。

能力の発動は不可視に。

ただ、剛風を斬り捨てる。

「な――っ？」

雫が想定した“空間の無視”や“太刀の加速”、そして“音の支配”までもが、全くの見当外れであることが確定した。

刀は、未だ鏢競り合っているというのに、雫の風は斬り払われた。
風を斬るだなんて、条理の外なる技だと驚くが、そこよりも驚くべきは、鏢競り合っているのに能力が発動したという事実。

それは刀を動かしていないのに、能力が発動したということだ。

音を鳴らしていないのに、能力が発動したということだ。

まさか、声が発動鍵になったというのか。それとも刀がぶつかりあった際の衝突音？

いや、それにしては能力の発現が遅い。タイミングが噛み合わない。

——“音の支配”という考え方は、間違っていたのだ。暫定的と、自分でも思ったはずなのに。

説明がつきすぎて、説得力がありすぎて、自己の想定を妄信してしまった。間違いを、正解として受け止めてしまった。

とはいえ間違いが確定したが——しかしじゃあ、だったとしたら。一体、一条の能力とはなんだ——！？

「隙だぞ」

「っ！」

どこまでも自然な宣言に、雫は戦慄した。頃には。

一条は鏢競り合った状態で、己が刀を収刀。

「なにをっ！？」

虚を突く奇手。

それは目を見開くまでの時間を稼ぎ、二手目へと繋ぐ。

雫の具象武具たる刀を、鞘と鏢で挟むようにして捕まえ、ぐるりと回す。それは雫の握力を上回る回転動作、そのため雫の刀は高々と中空へと弾き飛ばされる。

「なああ！？」

驚愕。そして、

「勝負ありだ」

敗北。

鞘を被せたままに刀尖を首につきつけられたことに気付いて、雫は全身の力を抜き去った。

カラン、と雫の背後で刀が落ちる音が嫌に大きく響き渡り。

「……参り、ました」

雫は俯きながらそれだけ告げた。

そうして結局、一条はまともに抜刀すらしないうちに、この勝負は決着を見たのだった。

第二十三話 最強（後書き）

いきなりなに戦ってんの！？

という感じですが、作者が一条の戦闘を書きたかったのです。
……というか、色々なキャラの戦いを書きたいんです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8572u/>

おれに助けを求めるな！

2011年11月24日01時50分発行